青森県埋蔵文化財調査報告書　第465集

荒屋敷久保（２）遺跡
横　沢　山（１）遺跡
横　沢　山（２）遺跡

－国道45号八戸南道路建設事業に伴う遺跡発掘調査報告－

２００９年３月

青森県教育委員会

序

青森県埋蔵文化財調査センターでは、平成18年度から国道45号八戸南道路建設事業予定地内の発掘調査を実施しています。本報告書は、平成18・19年度に調査した八戸市荒屋敷久保（２）遺跡、階上町横沢山（１）遺跡、横沢山（２）遺跡の調査成果をまとめたものです。

調査の結果、この３遺跡から縄文時代の落とし穴と考えられる土坑などが検出され、広範囲にわたって狩猟域として使われていたことが明らかになりました。また、横沢山（１）遺跡の水辺に面した地点からは、縄文時代早期から弥生時代までの各時期の遺物が出土しており、その水源を永くに亘り利用していたことが窺われます。また、本県では例の少ない大木３式土器も出土しており、東北南部の大木系文化圏との関連も注目されます。

この調査成果が、埋蔵文化財の保護と研究に広く活用され、この地域の歴史教育や文化財保護意識の高揚につながることを期待します。

最後に発掘調査の実施及び報告書の作成にあたり、御指導・御協力を賜りました関係各位に対して厚くお礼申し上げます。

平成21年３月

青森県埋蔵文化財調査センター
所　長　伊　藤　博　文

例　言

1　本報告書は、国道45号八戸南道路建設事業に伴い、平成18・19年度に青森県埋蔵文化財調査センターが発掘調査した、荒屋敷久保（２）遺跡、横沢山（１）遺跡、横沢山（２）遺跡の発掘調査報告書である。

2　荒屋敷久保（２）遺跡の所在地は、青森県八戸市大字金浜字土橋19－６外、青森県遺跡番号は０３２８３、横沢山（１）遺跡の所在地は、青森県三戸郡階上町大字道仏字横沢山１－176外、青森県遺跡番号は６３０７６、横沢山（２）遺跡の所在地は、青森県三戸郡階上町大字道仏字横沢山３－６外、青森県遺跡番号は６３０７９である。

3　本報告書は、青森県埋蔵文化財調査センターが編集し、青森県教育委員会が作成した。執筆は、青森県埋蔵文化財調査センター小田川文化財保護主幹と平山文化財保護主査が担当し、執筆者名を文末に記した。

4　発掘調査及び整理作業・報告書作成の経費は、調査を委託した国土交通省東北地方整備局青森河川国道事務所が負担した。

5　剥片石器のうち平成18年度出土分の実測図は、株式会社アルカに委託した。

遺物写真撮影は、シルバーフォト及びスタジオエイトに委託した。

放射性炭素年代測定（荒屋敷久保（２）遺跡）は、株式会社加速器分析研究所に委託した。

6　本報告書に掲載した遺跡位置図は、国土地理院発行５万分の１地形図「八戸東部」・「階上岳」を複製して使用した。

7　基本層序及び遺構内堆積土の注記には、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』2002年版（農林水産省農林水産技術会議事務室監修）を使用した。

8　本報告書における図表中での表現は次のとおりである。

１）報告書に記載した座標値は世界測地系（JGD2000）に基づく。挿図中の方位は座標北を示し、複数の遺構が図示される場合は遺構毎に方位を示した。

２）遺構図版の縮尺は１/60を基本としたが、小規模遺構の縮尺は１/30としたほか、配置図などは任意に定め、スケールと縮尺率を図中に示した。

３）掲載遺物については、土器は縮尺１/３を基本としたが、大型土器（破片を含む）は縮尺１/４で掲載した。石器の縮尺は、剥片石器類１/２、礫石器類１/３を基本としたが、大型礫石器は１/４で掲載した。

４）遺物写真は縮尺不同で、個々の遺物番号は挿図番号と一致する。（図５－13＝５－13と表記）

9　引用文献については巻末に収めた。

10　発掘調査及び報告者作成における出土品、実測図、写真等は青森県埋蔵文化財調査センターで保管している。

11　発掘調査及び本報告書の作成にあたり、次の方々から御指導・助言および御協力を頂いた。銘記して感謝申し上げます。（順不同・敬称略）

階上町教育委員会・森　淳、八戸市教育委員会・大野　亨、小保内裕之

目　　次

序
例言
目次
挿図目次・写真図版目次
第１編　調査概要……1
　第１章　調査要項……5
　　第１節　調査に至る経緯……5
　　第２節　調査要項……5
　　第３節　調査の経過と方法……6
　　第４節　調査区の層序・検出遺構と出土遺物の概要……8
第２編　荒屋敷久保（２）遺跡……10
　第１章　検出遺構……11
　　第１節　土坑……11
　　第２節　溝状土坑……14
　　第３節　溝跡……19
　第２章　出土遺物……19
　第３章　理化学的分析……20
第３編　横沢山（１）遺跡……23
　第１章　検出遺構と出土遺物……25
　　第１節　土坑……25
　　第２節　溝状土坑……27
　　第３節　野外炉……37
　　第４節　集石遺構……38
　　第５節　焼土跡……40
　　第６節　炭窯……42
　第２章　出土遺物……44
　　第１節　出土土器……44
　　第２節　出土石器……57
第４編　横沢山（２）遺跡……70
　第１章　検出遺構と出土遺物……71
　　第１節　遺構……71
　　第２節　出土遺物……71
出土遺物観察表……72
引用・参考文献……77
写真図版……78
報告書抄録……105

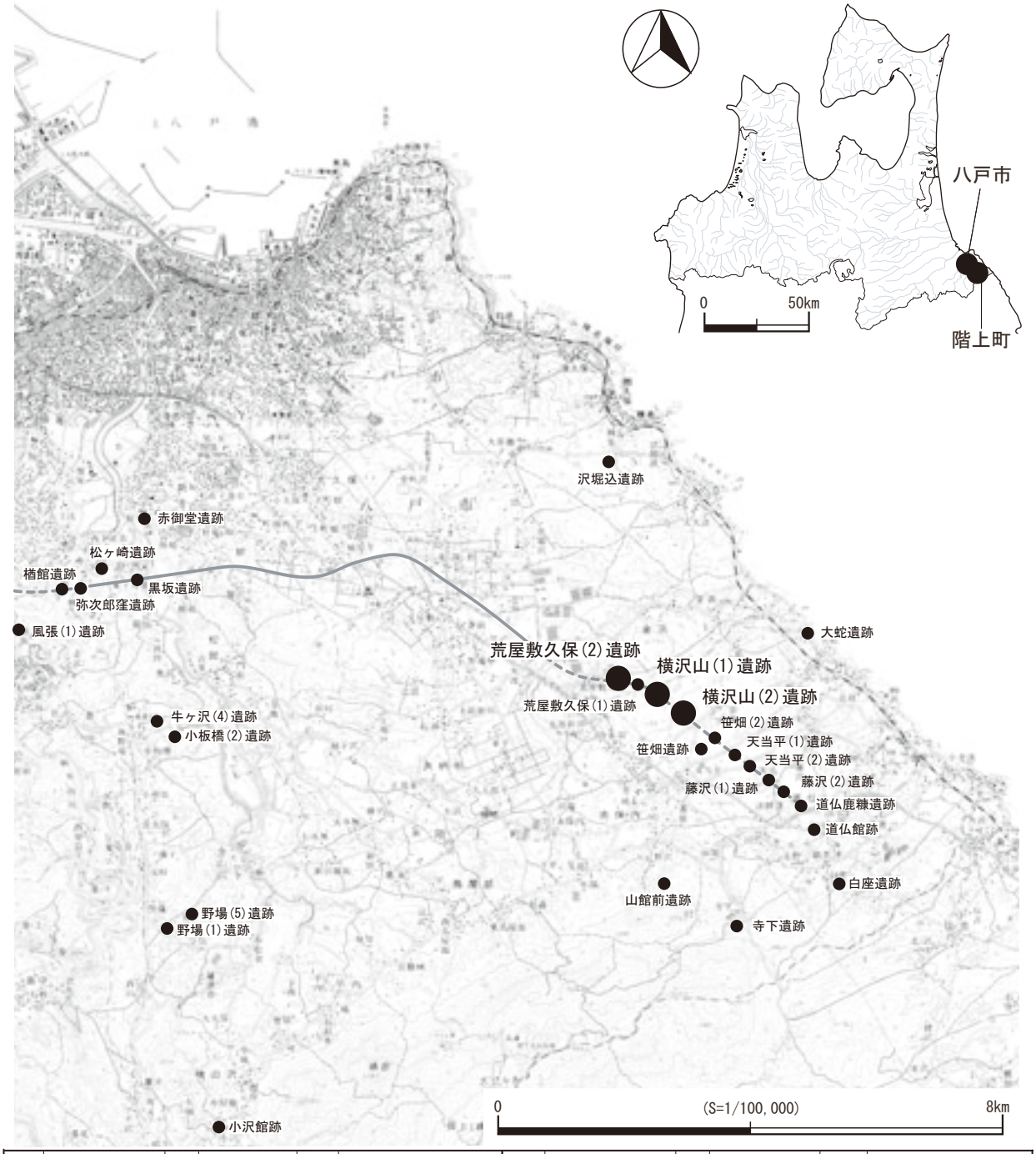
挿図観察表目次

図１　遺跡位置……２
図２　遺跡の地形と路線・調査区……３
図３　基本層序……９
図４　荒屋敷久保（２）遺跡遺構配置……10
図５　土坑（１）……12
図６　土坑（２）……14
図７　溝状土坑（１）……16
図８　溝状土坑（２）……17
図９　溝跡……18
図10　荒屋敷久保（２）遺跡出土遺物……19
図11　横沢山（１）遺跡遺構配置……23
図12　横沢山（１）遺跡Ａ・Ｂ区遺構配置……24
図13　土坑……26
図14　溝状土坑（１）……29
図15　溝状土坑（２）……31
図16　溝状土坑（３）……34
図17　溝状土坑（４）……36
図18　野外炉……38
図19　集石遺構……39
図20　焼土跡……40
図21　横沢山（１）遺跡遺構内出土遺物……41
図22　炭窯……43
図23　横沢山（１）遺跡出土土器（１）……45
図24　横沢山（１）遺跡出土土器（２）……46
図25　横沢山（１）遺跡出土土器（３）……47
図26　横沢山（１）遺跡出土土器（４）……49
図27　横沢山（１）遺跡出土土器（５）……50
図28　横沢山（１）遺跡出土土器（６）……52
図29　横沢山（１）遺跡出土土器（７）……53
図30　横沢山（１）遺跡出土土器（８）……54
図31　横沢山（１）遺跡出土土器（９）……55
図32　横沢山（１）遺跡出土土器(10)……56
図33　横沢山（１）遺跡出土土器(11)……57
図34　横沢山（１）遺跡出土石器（１）……58
図35　横沢山（１）遺跡出土石器（２）……60
図36　横沢山（１）遺跡出土石器（３）……62
図37　横沢山（１）遺跡出土石器（４）……63
図38　横沢山（１）遺跡出土石器（５）……64
図39　横沢山（１）遺跡出土石器（６）……65
図40　横沢山（１）遺跡出土石器（７）……66
図41　横沢山（１）遺跡出土石器（８）……67
図42　横沢山（１）遺跡出土石器（９）……68
図43　横沢山（１）遺跡出土石器(10)……69
図44　横沢山（２）遺跡遺構配置図・検出遺構図
……70
図45　横沢山（２）遺跡出土遺物……71
焼土跡一覧表……41
荒屋敷久保（２）遺跡出土遺物観察表……72
横沢山（１）遺跡出土遺物観察表……72
横沢山（２）遺跡出土遺物観察表……77
荒屋敷久保（２）遺跡写真図版……78
横沢山（１）遺跡写真図版……82
横沢山（２）遺跡写真図版……91
荒屋敷久保（２）・横沢山（１）遺跡
出土遺物写真図版……92

第１編　調査概要

国土地理院撮影の空中写真（ＣＴＯ-75-18　Ｃ16Ｂ-27）を加筆
昭和50年度撮影・縮尺は１／15,000

遺跡周辺空中写真



市町名	遺跡名	遺跡番号	時代	種別	備考
八戸市	荒屋敷久保(1)遺跡	03282	縄文早～晩、弥生平安	散布地製鉄跡	青森県教委2008
	荒屋敷久保(2)遺跡	03283	縄文早～晩	狩猟場	本報告書
	赤御堂遺跡	03023	縄文早・前・後、奈良、中世、近世	貝塚集落跡	八戸市教委1989他
	松ヶ崎遺跡	03068	縄文前・中・後	貝塚集落跡	八戸市教委1994他
	弥次郎窪遺跡	03140	縄文早～晩、弥生、奈良、平安	集落跡	青森県教委1990他
	風張(1)遺跡	03142	縄文後・晩、弥生、奈良、平安	集落跡	八戸市教委1991他
	椛館遺跡	03148	縄文早・前・後、弥生、平安、中世	集落跡館跡	青森県教委2003他
	沢堀込遺跡	03170	縄文早～晩、平安	集落跡	青森県教委1992
	牛ヶ沢(4)遺跡	03266	縄文、弥生、平安	集落跡	八戸市教委2004他
	黒坂遺跡	03275	縄文中・後、奈良、平安、近世	集落跡瓦窯跡	青森県教委2001
階上町	横沢山(1)遺跡	63076	縄文早～晩、弥生、平安	散布地炭窯跡	本報告書
	横沢山(2)遺跡	63079	縄文早	狩猟場	本報告書
	野場(1)遺跡	63001	縄文中～晩	集落跡	階上町教委2001
	寺下遺跡	63020	縄文中～晩	貝塚集落跡	階上町教委2007

市町名	遺跡名	遺跡番号	時代	種別	備考
階上町	白座遺跡	63021	縄文前～後	散布地	階上町教委1989
	大蛇遺跡	63056	縄文晩	散布地	鈴木克彦1978
	道仏館跡	63058	中世	館跡	青森県教委1983
	小沢館跡	63060	縄文早～晩、中世	館跡	青森県教委1997
	野場(5)遺跡	63064	縄文中・後	集落跡	青森県教委1993
	山館前遺跡	63073	縄文早～晩、弥生、平安	集落跡	階上町教委1996
	小板橋(2)遺跡	63074	縄文早～晩、弥生、平安	集落跡	階上町教委2002
	笹畑遺跡	63077	縄文早	散布地	階上町教委2007
	道仏鹿糠遺跡	63078	縄文後、古代	散布地	次年度調査予定
	天当平(1)遺跡	63081	縄文早・後、弥生	散布地	次年度報告予定
	天当平(2)遺跡	63082	縄文	散布地	次年度報告予定
	藤沢(1)遺跡	63083	縄文早・後、弥生、平安	散布地	次年度報告予定
	笹畑(2)遺跡	63084	縄文	散布地	次年度報告予定
	藤沢(2)遺跡	63085	縄文後・晩	散布地	次年度調査予定

図１　遺跡位置

周辺地形図

路線図

（青森県埋蔵文化財調査報告書
第453集 報告
荒屋敷久保（1）遺跡）

荒屋敷久保（2）遺跡

横沢山（2）遺跡

横沢山（1）遺跡Ｂ区

横沢山（1）遺跡Ａ区

0　200m
(S=1/5,000)

各遺跡調査区図

図２　遺跡の地形と路線・調査区

第１章　調査要項

第１節　調査に至る経緯

国道45号八戸南道路は、国土交通省青森河川国道事務所が国道45号の渋滞緩和と移動時間の短縮をめざし、高規格幹線道「八戸・久慈自動車道」の一環として整備するもので、八戸市大字妙の八戸南インターチェンジから階上町大字道仏に至る延長約8.7㎞の自動車専用道路である。平成７年に事業着手され、平成15年から工事が開始されている。

当該事業予定地内に所在する埋蔵文化財の取り扱いについては、青森河川国道事務所と青森県教育庁文化財保護課により協議が続けられ、平成18年度に青森県埋蔵文化財調査センターが担当して、横沢山遺跡外の発掘調査を実施することとなった。しかし、横沢山遺跡の範囲外の事業予定地内で新たな遺物の散布が確認されたことから、関係機関で今後の調査方針について協議された。

これにより、当初は横沢山遺跡と尼寺沢遺跡の発掘調査を行う予定であったが、本事業工事の優先順位から､新規発見の遺跡を荒屋敷久保(１)遺跡として登録し平成18年度中に発掘調査することとし、さらに荒屋敷久保(１)遺跡の西側に発見された遺跡を荒屋敷久保(２)遺跡として登録し、翌年度に発掘調査することとしたほか、横沢山遺跡の一部と尼寺沢遺跡の調査についても翌年度に繰り越すこととなった。また、尼寺沢遺跡として調査した区域は、県遺跡台帳に登録されている尼寺沢遺跡の範囲から外れていることと、所在地の小字名も横沢山であることから、横沢山(２)遺跡として新規登録することとなり、横沢山遺跡は、横沢山(１)遺跡として名称変更する事となった。

なお、横沢山(１)遺跡外に係る土木工事等のための発掘に関する通知は、平成18年３月及び平成19年４月に青森河川国道事務所長名で提出され、平成18年４月及び平成19年５月に文化財保護課から当該発掘前における埋蔵文化財の記録の作成を目的とする発掘調査の実施が指示された。

第２節　調査要項

１　調査目的

国道45号八戸南道路建設事業の実施に先立ち、当該地区に所在する荒屋敷久保(２)遺跡、横沢山(１)遺跡、横沢山(２)遺跡の発掘調査を行い、その記録を保存して、地域社会の文化財の活用に資する。

２　発掘調査期間　　平成19年４月24日～平成19年10月30日

３　遺跡名及び所在地　荒屋敷久保(２)遺跡（青森県遺跡番号０３２８３）
八戸市大字金浜字土橋19－６外
横沢山(１)遺跡　　（青森県遺跡番号６３０７６）
三戸郡階上町大字道仏字横沢山１－176外
横沢山(２)遺跡　　（青森県遺跡番号６３０７９）
三戸郡階上町大字道仏字横沢山３－６外

４　調査面積　　荒屋敷久保(２)遺跡　１２，０００㎡
（調査対象面積　２６，７００㎡）
横沢山(１)遺跡　６，８００㎡

（調査対象面積　７，８００㎡）

横沢山(２)遺跡　２，２５８㎡

（調査対象面積　２６，０００㎡）

5　調査委託者　　国土交通省東北地方整備局　青森河川国道事務所

6　調査受託者　　青森県教育委員会

7　調査担当機関　青森県埋蔵文化財調査センター

8　調査体制

調査指導員	藤沼　邦彦　元、国立大学法人弘前大学人文学部教授	（考古学）
調　査　員	松田　泰典　東北芸術工科大学	
	文化財保存修復研究センター長、教授	（分析科学）
	佐々木辰雄　青森県立八戸中央高等学校教諭	（地質学）
調査担当者	青森県埋蔵文化財調査センター	
	所　長　　末永　五郎	（平成20年３月退職）
	次　長　　三宅　徹也	（平成20年３月退職）
	総務ＧＬ　　櫻庭　孝雄	
	調査第二ＧＬ　工藤　　大	（現・次長）
	文化財保護主幹　小田川哲彦	
	文化財保護主査　平山　明寿	
	調査補助員　　楠美　匡、館山　朝子、村上由美子、鈴木　貴仁	

第３節　調査の経過と方法

調査経過

当該事業の優先順位から、荒屋敷久保(２)遺跡から発掘調査することとなり、４月24日から調査を開始した。荒屋敷久保(２)遺跡の表土撤去の都合から、５月第２週まで横沢山(１)遺跡側で前年度の残土処理や検出作業などを行い５月15日から荒屋敷久保(２)遺跡の本格的な調査に入った。前年度の確認調査で遺構が検出された調査区西側を主体に、面的な掘り下げと検出作業を行ったが、遺構は広がらず、遺物もほとんど出土しない状況であった。このため、東側はトレンチ調査にとどめ、６月29日で荒屋敷久保(２)遺跡の調査を終了した。

７月からは横沢山(１)遺跡の調査に入った。前年度にはＢ区の西側緩斜面部の調査を終えており、今年度は、町道から西側の丘陵平端部が調査対象である。この地点には産業廃棄物が約1,800㎡の範囲で路線を覆っており調査の障害となっていたが７月上旬には廃棄物処理が完了し、まず町道側の約800㎡の掘り下げと検出作業を行った。この範囲に検出された遺構と遺物は少なく、削平が第Ⅲ層まで及んでいることも判明した。７月下旬には町道側範囲の精査が終了し、８月にはこの範囲を排土置き場として、丘陵平坦部の掘り下げと遺構の検出作業に入った。前年度の西側緩斜面部の遺物出土状況からは、丘陵の平坦部に竪穴住居跡などの集落を構成する遺構の存在が予想されたが、そのような遺構は検出されず、落とし穴とされる溝状土坑が散漫な状態で検出されただけであった。遺物も同様に散漫で、多くは細片で出土した。９月上旬には第Ⅳ～Ⅴ層までトレンチを設定して掘り下げたが、

前年度に確認した縄文時代早期前葉の土器も広がりを見せず、数点の出土に止まった。また、小川に面した斜面からの出土遺物も少なく、急傾斜で遺構がつくられている可能性も低いことからトレンチ調査に止めた。

９月中旬には、横沢山（２）遺跡の調査に入ったが、背丈ほどの雑草や雑木が密集しておりその処理に時間を要した。前年度に路線の南側を試掘しており、今年度は路線の北側を主体にトレンチを設定して掘り下げと検出作業を行ったが、２基の土坑と礫石器１点が出土しただけであった。10月最終週に危険箇所を埋め戻し、横沢山（２）遺跡の南側路線内に次年度用調査器材を越冬し、予定どおり10月30日に調査を終了した。平成19年度の調査対象総面積は約60,500㎡であり、３遺跡分の約21,058㎡を調査した。

調査の方法

荒屋敷久保遺跡（２）遺跡と横沢山（１）遺跡の調査はグリッド法を用い、公共座標に合わせた基準となるグリッド杭を業者委託で打設した。この基準杭を基に調査区を区割りし、大区画には木杭を用いさらにその中に４ｍ四方のグリッドを設定した。グリッドの呼称は、北から南に向けてアルファベットを、西から東に向け算用数字を付し組み合わせて呼称した。横沢山（１）遺跡は平成18年度に調査した荒屋敷久保（１）遺跡と小川を介して分けられるが、一連のグリッドの呼称で調査している。

標高値は、委託で打設した基準点上に同時に設け、各遺構精査および地形図作成の必要に応じてさらに移動して用いた。粗掘り作業は人力を主体に行ったが、一部の表土撤去と無遺物層の掘り下げおよび排土の移動には重機を用いた。遺構は検出時に各遺構の略号と検出順に番号を付した。略号は、土坑＝ＳＫ、溝状土坑＝ＳＶ、焼土跡＝ＳＮ、埋設土器＝ＳＲ、用途不明遺構＝ＳＸとし、これ以外の野外炉と集石遺構には略号を付していない。なお、調査時に用途不明遺構＝ＳＸとした遺構は炭窯と考えられることから、本文中では炭窯として記載している。遺構の精査は四分法と二分法を基本として各遺構の規模と形状に応じて行った。土層観察は、『新版標準土色帖』を用い、土色とマンセル記号を併記し特徴を注記した。層順については、遺構の堆積土には算用数字を用い、調査区全体の自然層についてはローマ数字を用いた。遺構の作成は簡易遣り方を主にしたほか、トータルステーションでも位置を記録した。縮尺は１/20を基本とし種類や規模に応じて定めたほか、地形図も任意に定めた。遺物の取り上げは、遺構およびグリッド単位ごとに各層単位で行うことを基本とし、機器で位置を記録した。遺構とそのほかの写真撮影は、デジタルカメラを主体とし、35㎜カメラも併用した。35㎜カメラではモノクロームおよびリバーサルフィルムで同方向から同じ枚数を撮影した。

横沢山（２）遺跡はトレンチ調査とし、各トレンチの位置は路線幅杭の座標値をもとにトータルステーションで記録したほか、検出遺構は簡易遣り方測量で作図し、前記の機器で位置を記録した。

整理の方法

荒屋敷久保遺跡（２）遺跡、横沢山（１）・（２）遺跡の報告書作成に係わる整理作業は、平成19年４月から始められた。遺物のうち、平成18年度横沢山（１）遺跡で出土した剥片石器については、実測を委託したが、その他の遺物については、水洗・注記・復元・実側・トレースなどは整理作業員、及び補助員と職員が行った。遺物の写真撮影は委託したが、一部は職員が撮影した。図版についてはデジタルデータと台紙張りを併用し、職員が行った。　（小田川）

第４節　調査区の層序・検出遺構と出土遺物の概要

調査区の層序

荒屋敷久保(２)遺跡と横沢山(１)・(２)遺跡の層序は、前年度に刊行した荒屋敷久保(１)遺跡の層序と基本的に変わるところはない。しかし、各遺跡ともに近世から現代に行われた攪拌および削平により、特に第Ⅰ層～第Ⅳ層までの上位堆積層に各地点で欠落する層があったり、各層の厚さに多少の違いが見られた。以下に、荒屋敷久保(１)遺跡の層序を基準に層序の違いを記す。

荒屋敷久保(２)遺跡では路線の南北両サイドで土層確認を行ったが、北側では第Ⅲ層に相当する中掫浮石粒を混入する第Ⅲ層が広範囲に欠落しており、南側では南部軽石を混入する第Ⅳ層の黒褐色土が欠落している。これら欠落する層の範囲等は捉えることはできなかったが、調査区のほぼ全域に円形ないしは不整形の植え込み痕と小型重機による掘削穴も確認されており、ほぼ平坦な台地上が虫食い的に地形改変されている。縄文時代および古代の遺構はすべて第Ⅴ層面で検出しているほか、数点の土器は第Ⅱ層中から出土している。

横沢山(１)遺跡は路線の南側で土層確認を行った。前年度にＢ区として調査した範囲のうち西側のグリッド40 ～ 50ラインは削平されており、その削土は小川の湧水地点に向かって下る斜面に、最大約２ｍの厚さで盛土されていた。盛土下に遺物包含層が残っていたが、部分的に植え込みによる攪拌がみられた。また、産業廃棄物が集積されていた範囲も削平および掘削されており、廃棄物の下の大部分が直に第Ⅳ層ないしは第Ⅴ層の状態であり、植え込み痕も数カ所で確認されている。Ａ区はトレンチ調査にとどめ土層は略図のみで確認した。欠落する層はないが、東端の松森川に面した地点では第Ⅲ層が厚く、また第Ⅳ層とⅤ層の間に二次堆積した褐色土が２ｍを超える厚さで堆積している。

横沢山(２)遺跡もトレンチ調査にとどめ土層は略図のみで確認した。林道から北側の緩斜面では、欠落する層はなく、第Ⅱ・Ⅲ層の黒色土が厚い。南側の平坦面は、表土直下に第Ⅳ層ないしはⅤ層がみられ所々削平されている。

遺構と遺物の概要

荒屋敷久保(２)遺跡は、八戸市南端の標高122 ～ 127ｍの台地上にあり、平成18年度の確認調査により発見登録された遺跡である。発掘調査により、縄文時代の溝状土坑８基、土坑７基、近代の溝跡１条を検出している。土坑には、縄文時代の円形落とし穴と、炭素年代測定により古代に比定されるものがある。遺物は少なく、縄文時代晩期の土器が数点まとまって第Ⅱ層中から出土している。

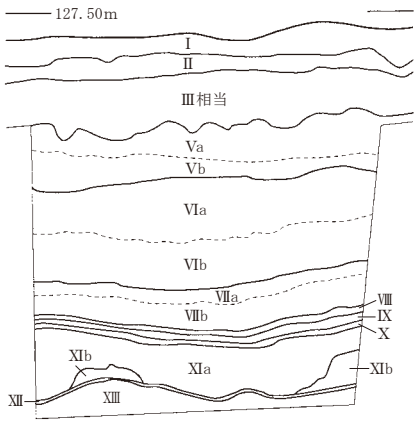
横沢山(１)遺跡は、階上町松森川から西側の標高95 ～ 100ｍの台地上にあり、八戸市と階上町の境となる松森川の支流の小川に面している。平成18年度に町道から東側のＡ区と西側Ｂ区の一部を調査し、平成19年度にＢ区の残りを調査している。平成18年度は範囲確認のためのトレンチ調査を主に行い、遺構と遺物が密な範囲を面的に調査した。Ａ区からは縄文時代の溝状土坑２基、近代の炭窯２基と土坑１基を検出している。遺物は石鏃が１点出土しただけである。Ｂ区は２ヶ年の発掘調査により、縄文時代の溝状土坑20基、土坑７基、野外炉１基、焼土跡５基、古代の炭窯５基が検出した。小川に向かう緩斜面地から各時期の遺物が出土していることから、グリッド50ラインから東側の平坦な台地縁辺には、竪穴住居跡の存在が予想されたが検出されなかった。

遺物は、縄文時代早期～晩期と弥生時代の土器と石器のほか少量の鉄滓と古銭数点を含み、段ボー

ル箱にして42箱分が出土した。出土遺物の大半は前年度に調査した、Ｂ区西側の小川縁辺の低地部から出土しているが、この地点は前述のとおり盛土されており、盛土中には各時期の遺物が混在していた。盛土下の層は遺物を包含するプライマリーな層であった。しかし、第Ⅳ層までの各層の厚さは薄く、第Ⅱ・Ⅲ層中には各時期の土器が混在し、第Ⅳ層とⅤ層上面からは早期中葉の土器が出土している。台地縁辺の平坦部からの出土遺物は少なく、第Ⅴ層の上面から早期前葉の土器が出土している。

横沢山(２)遺跡は、松森川を介し横沢山(１)遺跡の東側の台地上にある。トレンチ調査により、縄文時代の溝状土坑１基と落とし穴と考えられる土坑１基を検出した。遺物は、第Ⅳ層下位から礫石器が１点出土しているが、土器は出土していない。

以下に、各遺跡ごとに検出遺構と出土遺物について記述するが、横沢山(１)遺跡Ａ区で検出された近代の炭窯と土坑については割愛した。　　(小田川)



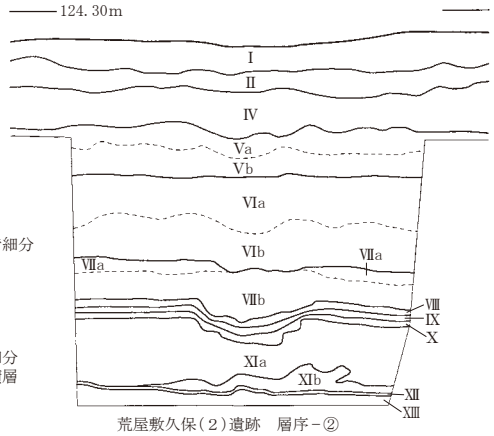
荒屋敷久保(２)遺跡　層序－①

Ｖａ・Ｖｂ＝南部軽石粒の混入量で細分

Ⅵａ・Ⅵｂ＝色調の違いから細分

Ⅶａ・Ⅶｂ＝色調の違いから細分

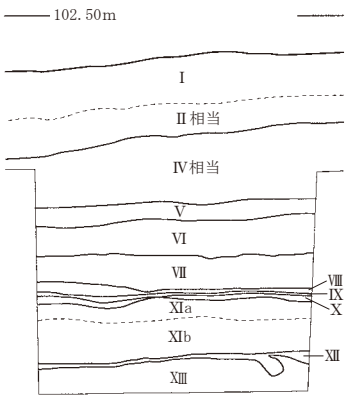
ＸＩａ・ＸＩｂ＝色調の違いから細分
ＸＩａは二次堆積層



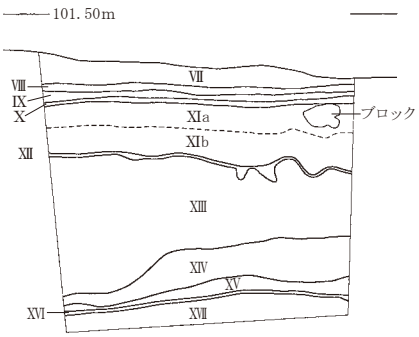
荒屋敷久保(２)遺跡　層序－②

基本層序
Ⅰ層－黒色土(10YR1.7/1～2/1)　表土
Ⅱ層－黒褐色土(10YR2/2)　下位からの中撰軽石混入
Ⅲ層－黒褐色土(10YR3/2)　中撰軽石層に対比できる
Ⅳ層－黒褐色土(10YR2/3)　下位からの南部軽石混入
Ⅴ層－黒褐色土(10YR2/2～2/3)　南部軽石層に対比できる
Ⅵ層－暗褐色土(10YR3/3)　黒色土と八戸火山灰層との漸移層
Ⅶ層－黄褐色土(10YR5/6)　八戸火山灰ⅴ層と八戸火山灰ⅳ層の二次堆積層
Ⅷ層－明黄褐色軽石(10YR6/8)　八戸火山灰ⅳ層に相当
Ⅸ層－黄褐色粘土(10YR7/8)　八戸火山灰ⅲ層に相当

Ⅹ層－明黄褐色軽石(10YR7/6)　八戸火山灰ⅱ層に相当
ⅩⅠ層－灰白色～にぶい黄橙色粘土(10YR7/1～7/3)　八戸火山灰ⅰ層に相当
ⅩⅡ層－褐灰色粘土(10YR4/1～5/1)　八戸火山灰と高舘火山灰の間隙層(暗色帯)
ⅩⅢ層－明黄褐色粘土(10YR6/8)　高舘火山灰最上層
ⅩⅣ層－橙色粘土(7.5YR6/8)　高舘火山灰
ⅩⅤ層－にぶい橙色粘土(7.5YR6/4)　高舘火山灰
ⅩⅥ層－黄橙色粘土(7.5YR7/8)　高舘火山灰
ⅩⅦ層－明褐色粘土(7.5YR5/8)　高舘火山灰
(ⅩⅥ層とⅩⅦ層の間に極薄い間隙層が入る)

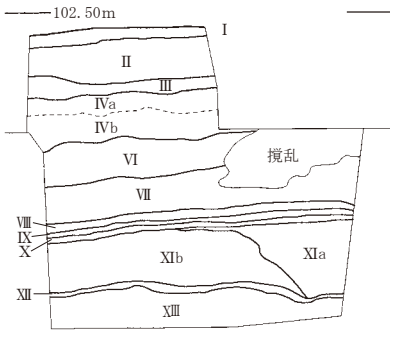


横沢山(１)遺跡　層序－①



横沢山(１)遺跡　層序－②

Ⅰ層の直下にⅦ層、Ⅱ層～Ⅵ層は削平



横沢山(１)遺跡　層序－③

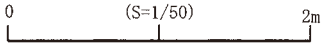


図３　基本層序

第２編　荒屋敷久保(２)遺跡

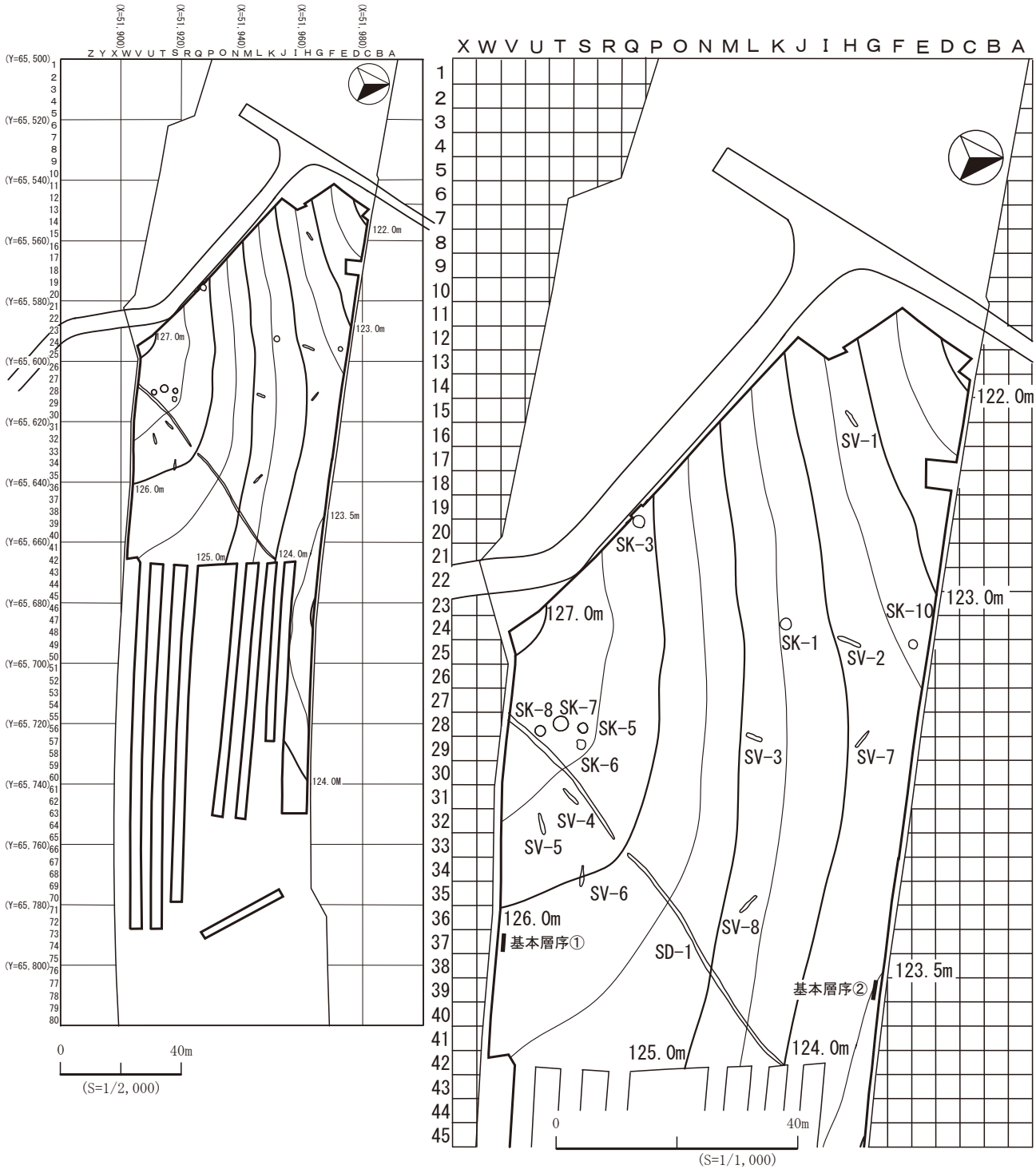


図４　荒屋敷久保(２)遺構配置

第１章　検出遺構

第１節　土坑（図５～６）

発掘調査時に10基の土坑プランを検出し遺構番号を付けて精査したが、第２・４・９号土坑としたものは植え込み等の攪乱と判明したため欠番とした。土坑数は７基で、縄文時代と古代と思われるものがある。

第１号土坑（図５）

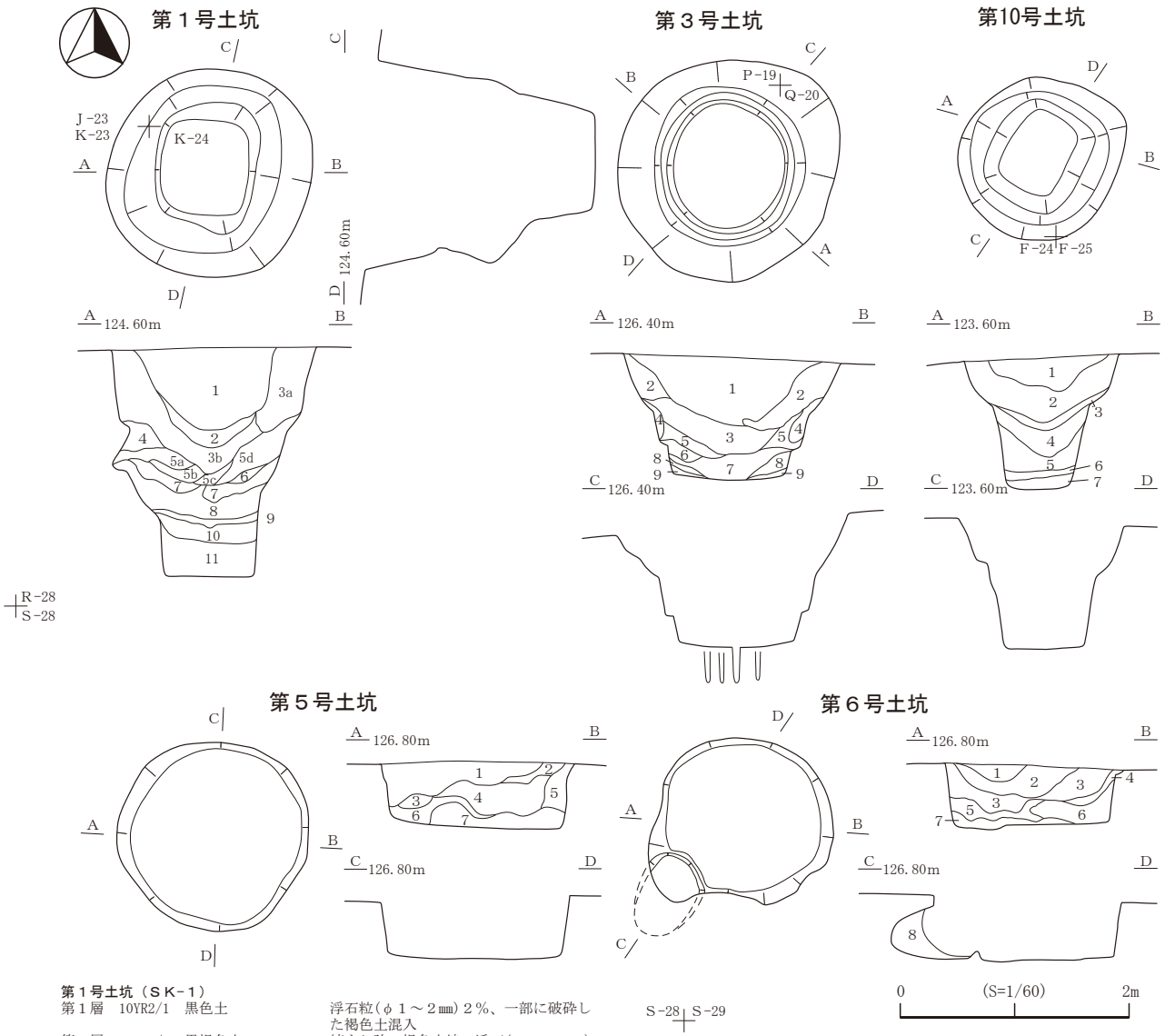
［位置・確認］Ｋ－24グリッドを中心に位置するが、一部Ｊ・Ｋ－23・24グリッドにも掛かる。
［形態・規模］平面形は開口部が円形、底面部は隅丸方形である。規模は開口部径が約180㎝、底面部は長軸約80㎝・短軸幅約75㎝で、検出面からの深さは約200㎝である。壁は底部から中位までは垂直、中位から開口部までは外傾しながら立ち上がる幅の広いＹ字状の断面形状で、壁面は中位で崩落してえぐれている。底面はほぼ平坦である。
［堆積土］自然堆積で11層に分けられる。堆積土下半の第４～11層は壁の崩落土と思われる。
［時期］遺物は出土しなかったため詳細な時期は不明であるが、縄文時代の落とし穴と思われる。

第３号土坑（図５）

［位置・確認］調査区西端のＱ－19グリッド主体に、一部Ｒ・Ｑ－19・20グリッドに位置する。
［形態・規模］平面形は不整な円形をしている。規模は、開口部は長軸が205㎝・最大幅190㎝、底面部は長軸が110㎝・幅100㎝で、検出面からの深さは最大約110㎝である。断面形状は、壁が底面から外傾して立ち上がる逆台形状である。底面は平坦で、逆茂木痕と思われるピットが７基検出された。ピットの規模は、直径４～６㎝、底面からの深さは28～32㎝である。
［堆積土］自然堆積で９層に分層された。壁際の第４・６・８層は壁の崩落土、第２・５・７層は壁の崩落土と自然堆積土が混合したものと思われる。
［時期］遺物は出土しなかったため詳細な時期は不明であるが、縄文時代の落とし穴と考えられる。

第５号土坑（図５）

［位置・確認］調査区南西端のＳ－28グリッドに位置する。重複はないものの、後述する第６～８号土坑と近接して位置している。
［形態・規模］平面形はほぼ円形である。規模は、開口部径約170㎝・底面径約150㎝、検出面からの深さは60㎝である。壁は底面から外傾しながら立ち上がるが、底面径に比べ深さがないので断面形状は箱状である。底面はほぼ平坦である。
［堆積土］人為堆積で７層に分層された。堆積土下位の第３・４・６・７層中には粒径の大きいロームブロックが混入している。
［時期］遺物は出土しなかったため詳細な時期は不明であるが、後述する第６～８号土坑と規模や形態・堆積状況の特徴が似通っているため、これらとほぼ同時期と考えられる。



第１号土坑（ＳＫ-１）

第１層	10YR2/1 黒色土	浮石粒（φ１～２㎜）２％、一部に破砕した褐色土混入
第２層	10YR3/2 黒褐色土	締まり強、褐色土塊・浮石（φ２～５㎜）５％混入
第3a層	10YR4/4 褐色土	締まり強、黒色土粒・浮石（φ２～５㎜）３％混入
第3b層	10YR4/4 褐色土	黒褐色土粒・浮石（φ２～５㎜）15％混入
第４層	10YR5/6 黄褐色粘質土	壁崩落土
第5a層	10YR4/4 褐色ローム	
第5b層	10YR3/3 暗褐色土	黒色土・褐色ロームとの混合
第5c層	10YR3/3 暗褐色土	黒色土・褐色ローム・浮石との混合
第5d層	10YR3/4 暗褐色土	ローム細粒の混合が多い
第６層	10YR4/2 灰黄褐色砂・浮石	壁崩落土
第７層	10YR4/6 褐色ローム	黒色土塊・浮石混入
第８層	2.5Y6/6 明黄褐色ローム塊	壁崩落土
第９層	10YR5/6 黄褐色ローム	黒色土混入
第10層	2.5Y6/6 明黄褐色ローム塊	橙色粘土細粒塊混入
第11層	7.5Y5/6 明黄褐色粘土	高舘火山灰暗色帯・八戸火山灰第Ⅰ層・黒色土粒塊の細ブロック２～３㎝混入

第３号土坑（ＳＫ-３）

第１層	10YR2/1 黒色土	褐色土との混合、浮石粒（φ１～２㎜）15％・浮石塊（５～10㎜）３％混入
第２層	10YR4/4 褐色ローム	壁崩落土、浮石粒（φ５～10㎜）５％混入
第３層	10YR3/2 黒褐色土	層下位を主体に浮石塊（φ10㎜以上）45％一部黒色土混合
第４層	10YR5/8 黄褐色ローム	壁崩落土
第５層	10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土	浮石50％以上混合
第６層	10YR5/6 黄褐色ローム	壁崩落土、上位に浮石混入
第７層	10YR3/3 暗褐色土	浮石50％以上混合
第８層	10YR5/6 黄褐色ローム	壁崩落土
第９層	10YR2/3 黒褐色土	浮石（φ３～10㎜）45％混入

第10号土坑（SK-10）

第１層	10YR2/1 黒色土	締まりあり、浮石粒（φ0.5～３㎜）７％
第２層	10YR3/2 黒褐色土	締まりあり、ローム粒、浮石粒（φ0.5～３㎜）３％混入
第３層	10YR2/2 黒褐色土	締まりあり、浮石粒（φ３～５㎜）３％
第４層	10YR3/4 暗褐色土	締まりあり、黒褐色土・浮石粒（φ３～10㎜）50％混入
第５層	10YR4/6 褐色粘質土	浮石とローム主体層、にぶい褐色土粒５％
第６層	10YR3/1 黒褐色土	締まり弱、若干の浮石混入
第７層	10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土	黒色土・黒褐色土・にぶい黄褐～明黄褐色粘土との混合、若干の浮石混入

第５号土坑（ＳＫ-５）

第１層	10YR2/3 黒褐色土	締まり中、粘性弱、ローム粒（φ２～５㎜）３％、浮石粒（φ２～５㎜）１％混入
第２層	10YR2/2 黒褐色土	締まり中、粘性弱
第３層	10YR5/8 黄褐色ローム塊	締まり中、粘性弱、黒褐色土との混合、浮石粒（φ２～５㎜）２％混入
第４層	10YR3/3 暗褐色土	締まり中、粘性弱、中央にローム塊（φ10～20㎜）20％混入
第５層	10YR2/3 黒褐色土	締まり中、粘性弱、ローム粒（φ２～５㎜）１％混入
第６層	10YR2/2 黒褐色土	締まり中、粘性弱、ローム粒（φ２～８㎜）３％混入
第７層	10YR2/3 黒褐色土	締まり中、粘性弱、ローム粒・塊（φ２～20㎜）20％混入

第６号土坑（ＳＫ-６）

第１層	10YR2/2 黒褐色土	締まり中、粘性弱、ローム粒（φ１㎜）１％
第２層	10YR2/2 黒褐色土	締まり中、粘性弱、ローム粒（φ２～５㎜）２％混入
第３層	10YR2/2 黒褐色土	締まり中、粘性弱、ローム塊（φ10～20㎜）３％混入
第４層	10YR2/2 黒褐色土	締まり弱、粘性弱、ローム粒（φ５～10㎜）１％混入
第５層	10YR7/8 黄褐色ローム塊	締まり弱、粘性弱、ローム塊（φ10～20㎜）５％混入
第６層	10YR2/2 黒褐色土	締まり中、粘性弱、ローム塊（φ10～20㎜）10％混入
第７層	10YR2/3 黒褐色土	締まり中、粘性弱、ローム粒（φ５～10㎜）７％混入
第８層	10YR2/2 黒褐色土	締まり弱、粘性弱、浮石粒（φ１～５㎜）３％層下部では７％混入

図５　土坑（１）

第６号土坑（図５）

［位置・確認］Ｓ－29グリッドを中心に位置するが、一部Ｓ－28グリッドにも掛かっている。

［形態・規模］平面形はいびつな円形で、底面の南西が袋状に張り出している。規模は、開口部径約150㎝、底面部径約130㎝で、検出面からの深さは最大約60㎝である。壁は底面から外傾するが、浅いので箱状の断面形状である。底面には若干の起伏が認められる。また、西南側の一部に袋状に張り出す箇所がある。張り出し部は長軸75㎝・最大幅47㎝の楕円形状で、開口部からの張り出し幅は約40㎝である。張り出し部の用途は不明である。

［堆積土］８層に分層された。第８層は張り出し部の堆積土である。堆積土下位の第３～７層中には粒径の大きいロームブロックが混入しているため人為堆積と考えられるが、堆積土上位の第１層は黒味が強いため自然堆積の可能性がある。

［時期］遺物は出土しなかったため詳細な時期は不明であるが、形状や堆積土の様子から第５・７・８号土坑とほぼ同時期に廃絶・埋め戻された土坑と思われる。

第７号土坑（図６）

［位置・確認］Ｔ－28グリッドに位置するが、一部Ｔ－29グリッドにも位置している。

［形態・規模］平面形はほぼ円形である。規模は開口部が径約260㎝・底面部が径約220㎝・検出面からの深さは約100㎝と他に比して大きい。壁の立ち上がりは、底部から中位までは垂直、中位から開口部までは外傾しており、断面形状は幅の広いＹ字状である。底面には若干の起伏が認められる。

［堆積土］人為堆積で15層に分層された。堆積土下位の第11～15層中にはロームブロックが混入しているため人為堆積と考えられるが、堆積土上位の第１層は黒味が強く自然堆積の可能性がある。堆積土中から炭化物片が出土した。ほぼ15㎝四方の板状であるが、用途は不明である。

［時期］炭化物以外の遺物は出土しなかったため、詳細な時期は不明であるが、堆積状況などが類似する第５・６・８号土坑とほぼ同時期と考えられる。

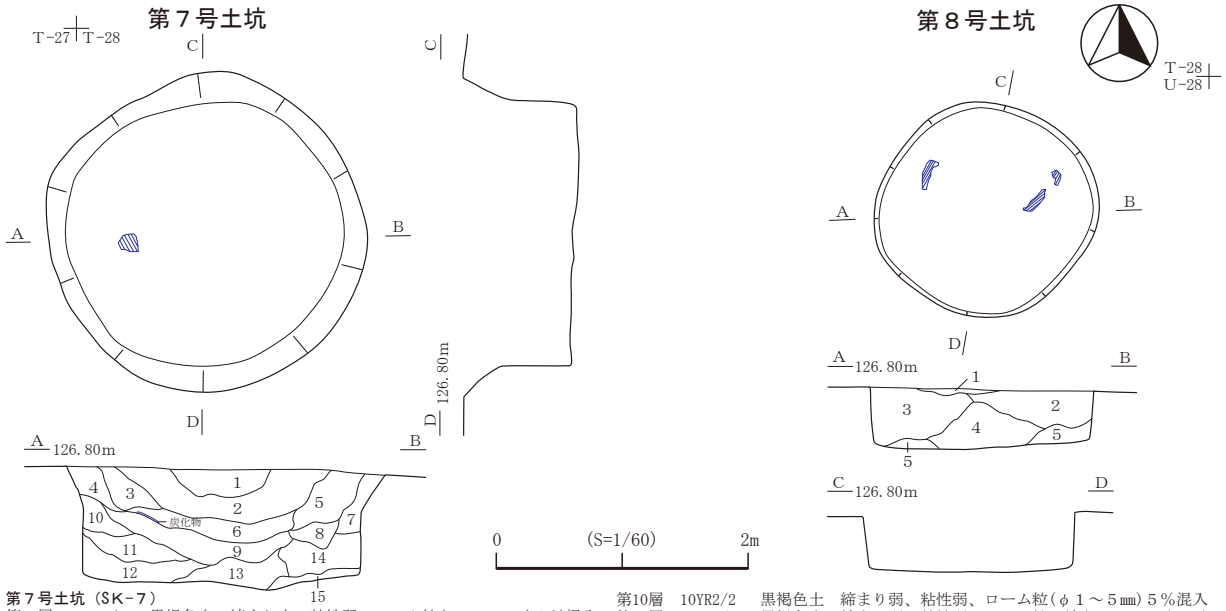
第８号土坑（図６）

［位置・確認］Ｕ－28グリッドに位置する。

［形態・規模］平面形は円形である。規模は、開口部径約175㎝、底面部径170㎝、検出面からの深さは50㎝である。断面は、壁が坑底からほぼ垂直に立ち上がる箱状である。底面は概ね平坦である。

［堆積土］人為堆積で５層に分層された。堆積土下位の第３～５層には粒径の大きいロームブロックが混入しているため人為堆積と考えられるが、堆積土上位の第１層は黒味が強いため自然堆積の可能性がある。堆積土中から炭化物片が３点出土している。板状で、５㎝×25㎝程度のもの２点・５㎝×10㎝程度のもの１点であるが、用途は不明である。

［時期］堆積土中から出土した炭化物について炭素年代測定を行ったところ、暦年較正年代（１σ＝68.2％）で775～875AD（1210±30yrBP）の年代が得られたことから、この土坑は８世紀後葉から９世紀後葉に廃絶・埋め戻されたと思われる。



第７号土坑（SK-７）

第１層	10YR2/2	黒褐色土	締まり中、粘性弱、ローム粒（φ１～10㎜）３％混入
第２層	10YR2/2	黒褐色土	締まりやや弱、粘性弱、ローム粒（φ１～15㎜）７％ 炭化物粒（φ１～５㎜）１％混入
第３層	10YR2/2	黒褐色土	締まり中、粘性弱、ローム粒（φ１～５㎜）３％混入
第４層	10YR2/3	黒褐色土	締まりやや強、粘性弱、ローム粒・塊（φ１～20㎜） ５％、炭化物粒（φ１㎜）１％混入
第５層	10YR2/2	黒褐色土	締まり中、粘性弱、ローム粒（φ１～５㎜）２％混入
第６層	10YR2/2	黒褐色土	締まり弱、粘性弱、ローム粒（φ１～５㎜）15％、 炭化物粒・塊（φ１～180㎜）５％混入
第７層	10YR3/2	黒褐色土	締まり弱、粘性弱、ローム粒（φ１～10㎜）２％混入
第８層	10YR2/1	黒色土	締まり弱、粘性弱、ローム粒（φ１～５㎜）１％混入
第９層	10YR2/1	黒色土	締まり弱、粘性弱、ローム粒（φ１～10㎜）７％混入
第10層	10YR2/2	黒褐色土	締まり弱、粘性弱、ローム粒（φ１～５㎜）５％混入
第11層	10YR2/2	黒褐色土	締まり弱、粘性弱、ローム粒・塊（φ１～50㎜）40％
第12層	10YR2/2	黒褐色土	締まり弱、粘性弱、ローム粒・塊（φ１～70㎜）40％
第13層	10YR2/2	黒褐色土	締まり中、粘性弱、ローム粒・塊（φ１～50㎜）10％ 炭化物粒（φ１～３㎜）１％混入
第14層	10YR2/2	黒褐色土	締まり中、粘性弱、ローム粒・塊（φ１～40㎜）40％
第15層	10YR2/2	黒褐色土	締まり中、粘性弱、ローム粒50％混入

第８号土坑（SK-８）

第１層	10YR1.7/1	黒色土	ローム粒（φ２～５㎜）１％混入
第２層	10YR2/2	黒褐色土	ローム粒（φ２～５㎜）３％、炭化物混入
第３層	10YR2/3	黒褐色土	ローム塊（φ10～20㎜）10％、炭化物混入
第４層	10YR2/1	黒色土	ローム塊（φ20～50㎜）10％、炭化物混入
第５層	10YR2/3	黒褐色土	ローム塊（φ10～20㎜）３％混入

図６　土坑（２）

第10号土坑（図５）

［位置・確認］Ｅ－24・25グリッドを中心に位置する。一部Ｆ－24・25グリッドにも掛かっている。

［形態・規模］平面形は開口部がほぼ円形状・底面部が隅丸楕円形状をしている。規模は、開口部は径150㎝・底面部は長軸約70㎝・幅約55㎝で、検出面からの深さは約120㎝を測る。断面形状は、壁が底部から中位までは垂直、中位から開口部までは外傾している幅の広いＹ字状である。

［堆積土］自然堆積で７層に分層された。第５層は壁の崩落土と自然堆積土との混合土と思われる。

［時期］出土遺物がなく詳細な時期は不明であるが、縄文時代の落とし穴と考えられる。　（平山）

第２節　溝状土坑（図７・８）

縄文時代の落とし穴といわれる溝状土坑は８基検出された。

第１号溝状土坑（図７）

［位置・確認］Ｈ－15グリッドに位置する。

［形態・規模］平面形は葉巻状をしている。規模は、開口部の長軸が320㎝・短軸が約60㎝、底面部の長軸が295㎝・短軸14 ～ 16㎝、検出面からの深さは最大120㎝で、主軸方位はＮ－55°－Ｅである。長軸断面は逆台形状であるが、北側の一部は中位から下が袋状にえぐれている。元々の掘り方なのか、崩落であるか不明である。短軸断面はＹ字状である。底面はほぼ平坦である。

［堆積土］自然堆積で５層に分けられる。

［時期］遺物は出土しなかったため詳細な時期は不明であるが、縄文時代と思われる。

第２号溝状土坑（図７）

［位置・確認］主にＨ－24グリッドに位置するが、一部Ｈ－25グリッドに掛かる。

［形態・規模］平面形は不整な葉巻状である。規模は、開口部は長軸405㎝・長軸80㎝と今回の調査で検出された溝状土坑中で最大である。底面部は長軸415㎝・長軸12㎝で、検出面からの深さは最大で150㎝である。主軸方位はＮ－21.5°－Ｅである。長軸断面は箱状であるが、両端部分がわずかに袋状になる。短軸断面はＶ字状であるが、片側は崩落したものか、階段状となる。底面はほぼ平坦であるが、全体的に見ると中央が低い。

［堆積土］自然堆積で８層に分けられる。第２層は壁の崩落土、第４・５層は壁の崩落土と自然堆積土との混合土である。

［時期］遺物は出土しなかったため詳細な時期は不明であるが、縄文時代と思われる。

第３号溝状土坑（図７）

［位置・確認］Ｌ－28グリッドに位置する。

［形態・規模］平面形は葉巻状である。規模は、開口部は長軸が275㎝・最大幅70㎝と今回の調査で検出された溝状土坑で最小である。底面部は長軸が265㎝・短軸12 ～ 22㎝で、長軸の両端部が広い。検出面からの深さは最大82㎝で最小である。主軸方位はＮ－20°－Ｅである。長軸断面は箱状で、短軸断面は幅広で歪んだＶ字状である。底面は北側端部に向かって緩やかに傾斜している。

［堆積土］自然堆積で９層に分層された。第５～８層は壁の崩落土と自然堆積土との混合土である。

［時期］遺物は出土しなかったため詳細な時期は不明であるが、縄文時代と考えられる。

第４号溝状土坑（図７）

［位置・確認］Ｓ・Ｔ－31グリッドに位置する。

［形態・規模］平面形は葉巻状をしている。規模は、開口部の長軸が350㎝・短軸が最大で60㎝、底面部の長軸が340㎝・短軸が10 ～ 14㎝で、検出面からの深さは110㎝を測る。主軸方位はＮ－47.5°－Ｅである。長軸断面は箱状で、短軸断面はＹ字状であるが、緩やかに開いているためＶ字状に近い。底面はほぼ平坦である。

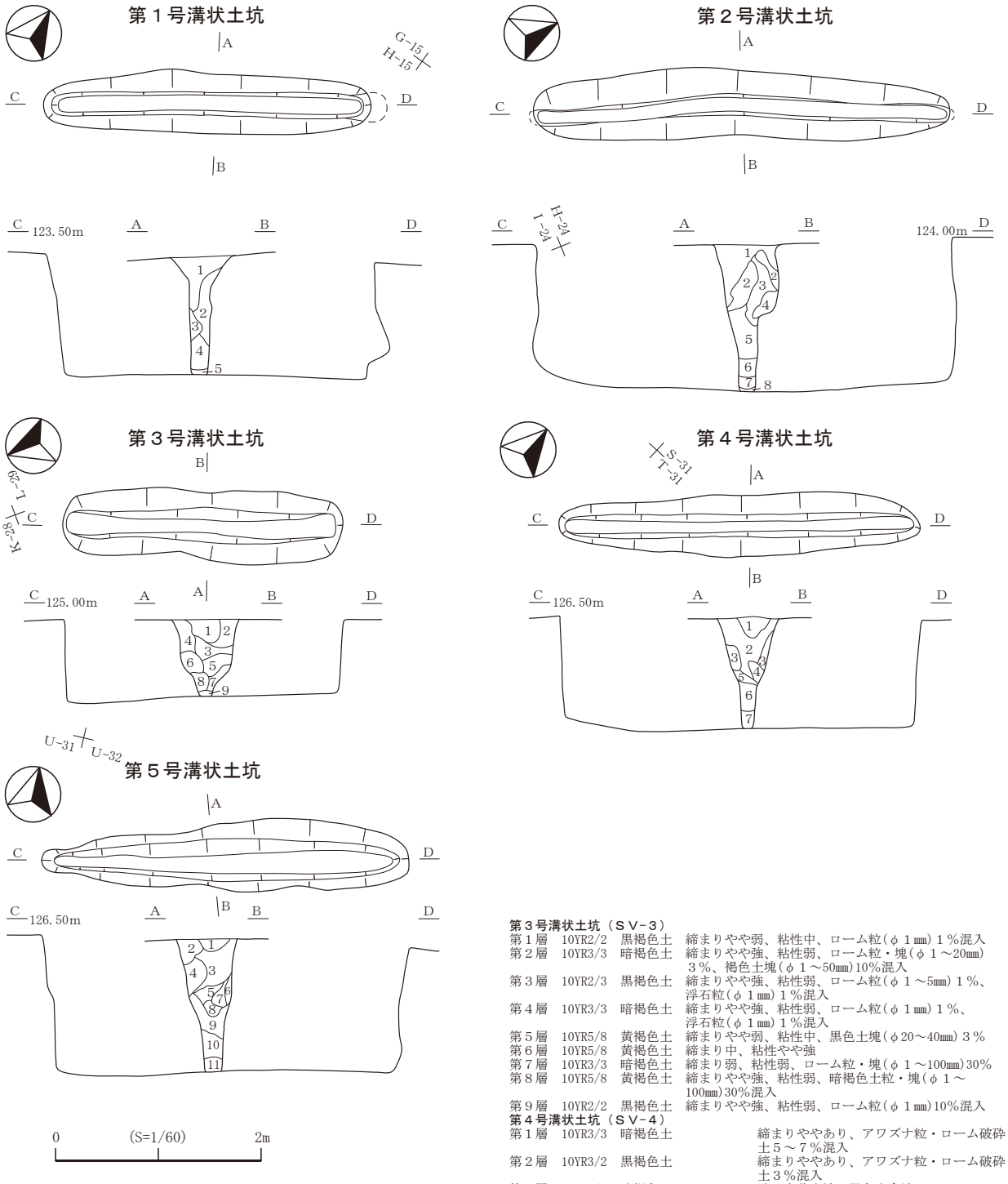
［堆積土］自然堆積で７層に分層された。壁際の第４層は壁の崩落土、第３・５層は壁の崩落土と自然堆積土との混合土である。

［時期］遺物は出土しなかったため詳細な時期は不明であるが、縄文時代と考えられる。

第５号溝状土坑（図７）

［位置・確認］Ｕ－32グリッドに位置する。

［形態・規模］平面形は葉巻状であるが、西側が細く東側が広いいびつな形状をしている。規模は、開口部の長軸が約360㎝・最大幅が70㎝、底面部の長軸が330㎝・短軸が10 ～ 22㎝、検出面からの深さは約130㎝である。主軸方位はＮ－76.5°－Ｅである。長軸断面は中位で屈曲する逆台形状だが、東側端部はえぐれている。短軸断面はＹ字状である。底面はほぼ平坦に近いが、中央部から西側がやや深くなっている。



第１号溝状土坑（ＳＶ－１）

第１層	10YR2/2	黒褐色土	締まりややあり、アワズナ粒７～15%、ローム破砕一部混入
第２層	10YR2/3	黒褐色土	アワズナ粒５～７%混入
第３層	10YR3/2	黒褐色土	柔らかく締まりなし、アワズナ粒５～７%混入
第４層	10YR4/3	にぶい褐色土	黒色土との混合、アワズナ粒・ローム細塊混入
第５層	10YR6/8	黄褐色粘質土	壁崩落土

第２号溝状土坑（ＳＶ－２）

第１層	10YR2/2	黒褐色土	アワズナ粒(φ１～２㎜)３～５%、ローム細塊２%混入
第２層	10YR5/8	黄褐色ローム塊	壁崩落塊
第３層	10YR2/2	黒褐色土	壁崩落塊(φ３～５㎝)混合
第４層	10YR5/6	黄褐色浮石層	壁崩落土
第５層	2.5YR4/6	オリーブ褐色ローム	壁崩落土、黒色土・褐色土粒との混合
第６層	10YR5/4	にぶい黄褐色土	壁崩落土、黒色土・ローム細塊との混合
第７層	2.5YR4/6	オリーブ褐色ローム	壁崩落土、黒色土・褐色土粒との混合
第８層	10YR2/3	黒褐色土	

第３号溝状土坑（ＳＶ－３）

第１層	10YR2/2	黒褐色土	締まりやや弱、粘性中、ローム粒(φ１㎜)１%混入
第２層	10YR3/3	暗褐色土	締まりやや強、粘性弱、ローム粒・塊(φ１～20㎜)３%、褐色土塊(φ１～50㎜)10%混入
第３層	10YR2/3	黒褐色土	締まりやや強、粘性弱、ローム粒(φ１～5㎜)１%、浮石粒(φ１㎜)１%混入
第４層	10YR3/3	暗褐色土	締まりやや強、粘性弱、ローム粒(φ１㎜)１%、浮石粒(φ１㎜)１%混入
第５層	10YR5/8	黄褐色土	締まりやや弱、粘性中、黒色土塊(φ20～40㎜)３%
第６層	10YR5/8	黄褐色土	締まり中、粘性やや強
第７層	10YR3/3	暗褐色土	締まり弱、粘性弱、ローム粒・塊(φ１～100㎜)30%
第８層	10YR5/8	黄褐色土	締まりやや強、粘性弱、暗褐色土粒・塊(φ１～100㎜)30%混入
第９層	10YR2/2	黒褐色土	締まりやや強、粘性弱、ローム粒(φ１㎜)10%混入

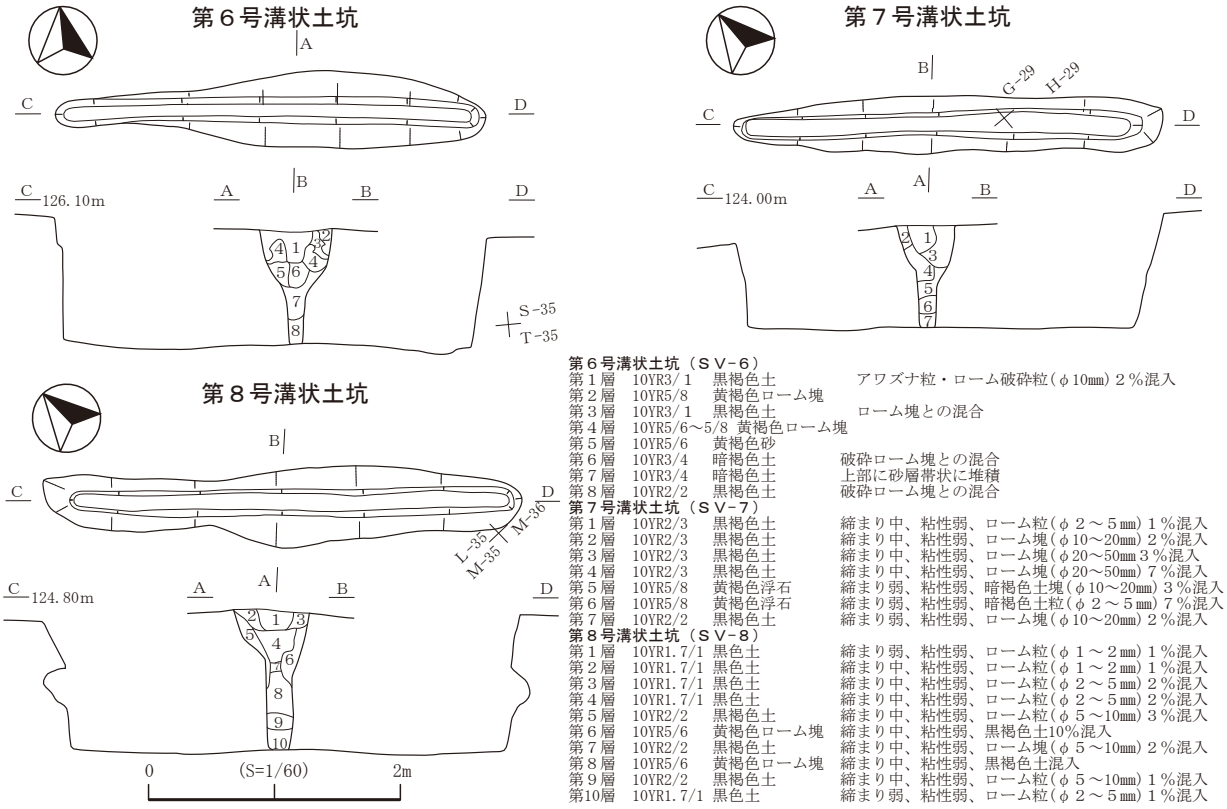
第４号溝状土坑（ＳＶ－４）

第１層	10YR3/3	暗褐色土	締まりややあり、アワズナ粒・ローム破砕土５～７%混入
第２層	10YR3/2	黒褐色土	締まりややあり、アワズナ粒・ローム破砕土３%混入
第３層	10YR3/4	暗褐色ローム	壁の崩落土塊、黒色土介流
第４層	10YR5/6	黄褐色ローム砂層	壁の崩落土塊、下位に浮石・砂層
第５層	10YR4/6	褐色土	壁の崩落土塊、黒色土混合
第６層	10YR4/4	褐色土	ローム土粒・黒色土粒・浮石の混合
第７層	10YR2/1～2/2	黒色～黒褐色土	締まりなし、アワズナ粒混合

第５号溝状土坑（ＳＶ－５）

第１層	10YR2/1	黒色土	締まり中、粘性弱
第２層	10YR2/2	黒褐色土	締まり中、粘性弱、ローム粒(φ５～10㎜)１%混入
第３層	10YR2/3	黒褐色土	締まり中、粘性弱、ローム粒(φ２～５㎜)１%、浮石粒（φ１～２㎜）１%混入
第４層	10YR2/2	黒褐色土	締まり中、粘性弱、暗褐色土との混合、ローム粒（φ２～５㎜）２%混入
第５層	10YR2/1	黒色土	締まり弱、粘性弱、ローム粒・塊(φ５～100㎜)３%
第６層	10YR2/2	黒褐色土	締まり弱、粘性弱、ローム粒(φ２～５㎜)１%混入
第７層	10YR3/4	暗褐色土	締まり弱、粘性弱、ローム塊(φ10～20㎜)１%、下部に浮石(φ１～２㎜)２%混入
第８層	10YR2/3	黒褐色土	締まり弱、粘性弱、ローム塊(φ10～20㎜)１%、浮石(φ２～５㎜)２%混入
第９層	10YR5/8	黄褐色土	締まり弱、粘性弱、浮石(φ２～10㎜)全体的に50%
第10層	10YR2/3	黒褐色土	締まり弱、粘性中、浮石(φ２～10㎜)３%混入
第11層	10YR2/2	黒褐色土	締まり弱、粘性中、浮石(φ１～５㎜)１%混入

図７　溝状土坑（１）



第６号溝状土坑（ＳＶ-６）

第１層	10YR3/１	黒褐色土	アワズナ粒・ローム破砕粒（φ10㎜）２％混入
第２層	10YR5/8	黄褐色ローム塊	
第３層	10YR3/１	黒褐色土	ローム塊との混合
第４層	10YR5/6～5/8	黄褐色ローム塊	
第５層	10YR5/6	黄褐色砂	
第６層	10YR3/4	暗褐色土	破砕ローム塊との混合
第７層	10YR3/4	暗褐色土	上部に砂層帯状に堆積
第８層	10YR2/2	黒褐色土	破砕ローム塊との混合

第７号溝状土坑（ＳＶ-７）

第１層	10YR2/3	黒褐色土	締まり中、粘性弱、ローム粒（φ２～５㎜）１％混入
第２層	10YR2/3	黒褐色土	締まり中、粘性弱、ローム塊（φ10～20㎜）２％混入
第３層	10YR2/3	黒褐色土	締まり中、粘性弱、ローム塊（φ20～50㎜３％混入
第４層	10YR2/3	黒褐色土	締まり中、粘性弱、ローム塊（φ20～50㎜）７％混入
第５層	10YR5/8	黄褐色浮石	締まり弱、粘性弱、暗褐色土塊（φ10～20㎜）３％混入
第６層	10YR5/8	黄褐色浮石	締まり弱、粘性弱、暗褐色土粒（φ２～５㎜）７％混入
第７層	10YR2/2	黒褐色土	締まり弱、粘性弱、ローム塊（φ10～20㎜）２％混入

第８号溝状土坑（ＳＶ-８）

第１層	10YR1.7/1	黒色土	締まり弱、粘性弱、ローム粒（φ１～２㎜）１％混入
第２層	10YR1.7/1	黒色土	締まり中、粘性弱、ローム粒（φ１～２㎜）１％混入
第３層	10YR1.7/1	黒色土	締まり中、粘性弱、ローム粒（φ２～５㎜）２％混入
第４層	10YR1.7/1	黒色土	締まり中、粘性弱、ローム粒（φ２～５㎜）２％混入
第５層	10YR2/2	黒褐色土	締まり中、粘性弱、ローム粒（φ５～10㎜）３％混入
第６層	10YR5/6	黄褐色ローム塊	締まり中、粘性弱、黒褐色土10%混入
第７層	10YR2/2	黒褐色土	締まり中、粘性弱、ローム塊（φ５～10㎜）２％混入
第８層	10YR5/6	黄褐色ローム塊	締まり中、粘性弱、黒褐色土混入
第９層	10YR2/2	黒褐色土	締まり中、粘性弱、ローム粒（φ５～10㎜）１％混入
第10層	10YR1.7/1	黒色土	締まり弱、粘性弱、ローム粒（φ２～５㎜）１％混入

図８　溝状土坑（２）

［堆積土］自然堆積で11層に分層された。第７～９層は壁の崩落土と流入土との混合土である。

［時期］遺物は出土しなかったため詳細な時期は不明であるが、縄文時代と考えられる。

第６号溝状土坑（図８）

［位置・確認］Ｓ－34グリッドに位置する。

［形態・規模］平面形はいびつな葉巻状で、第５号溝状土坑に類似している。規模は、開口部の長軸が約340㎝・短軸が22～60㎝、底面部の長軸が325㎝・短軸が約10㎝、検出面からの深さは最大110㎝である。主軸方位はＮ－85°－Ｗで、ほぼ東西方向に構築されている。長軸断面形は、西壁はほぼ垂直に立ち上がる箱状で、短軸断面形はＹ字状をしている。底面には緩やかな起伏があり、中央が高く、両端が深くなっている。

［堆積土］自然堆積で８層に分層された。第１～４層までの上位層は混濁しており、うち、第３・４層は壁の崩落土である。中位の第６・７層は壁の崩落土と流入土との混合土である。

［時期］縄文時代であるが、遺物は出土しなかったため詳細な時期は不明である。

第７号溝状土坑（図８）

［位置・確認］Ｇ・Ｈ－28・29グリッドに位置する。

［形態・規模］平面形は葉巻状である。規模は、開口部は長軸が342㎝・短軸が最大46㎝で、検出した溝状土坑中で、短軸が最小のものである。底面部は長軸が305㎝・短軸が12～15㎝、検出面からの深さは最大で95㎝である。主軸方位はＮ－50°－Ｗである。長軸断面は中位でゆるく屈曲する逆台形状で、短軸断面はＹ字状である。底面はほぼ平坦である。

［堆積土］自然堆積で７層に分層された。第２～４層は壁の崩落土と流入土との混合土、第５層は崩落土と思われる。

［時期］縄文時代であるが、遺物は出土しなかったため詳細な時期は不明である。

第８号溝状土坑（図８）

［位置・確認］Ｌ－35グリッドに位置する。

［形態･規模］平面形はいびつな葉巻状をしている。規模は、開口部の長軸が約380㎝･短軸35～60㎝、底面部の長軸が約345㎝・短軸が約15㎝、検出面からの深さは116㎝である。主軸方位はＮ－46°－Ｗである。長軸断面は坑底隅から開くように立ち上がる逆台形状であるが、中位が崩落したようにえぐれている。横断面はＹ字状である。底面はほぼ平坦であるが、中央がわずかに高くなっている。

［堆積土］自然堆積で10層に分層された。第５・６・８層は壁の崩落土と流入土との混合土である。

［時期］縄文時代であるが、遺物は出土しなかったため詳細な時期は不明である。　（平山）

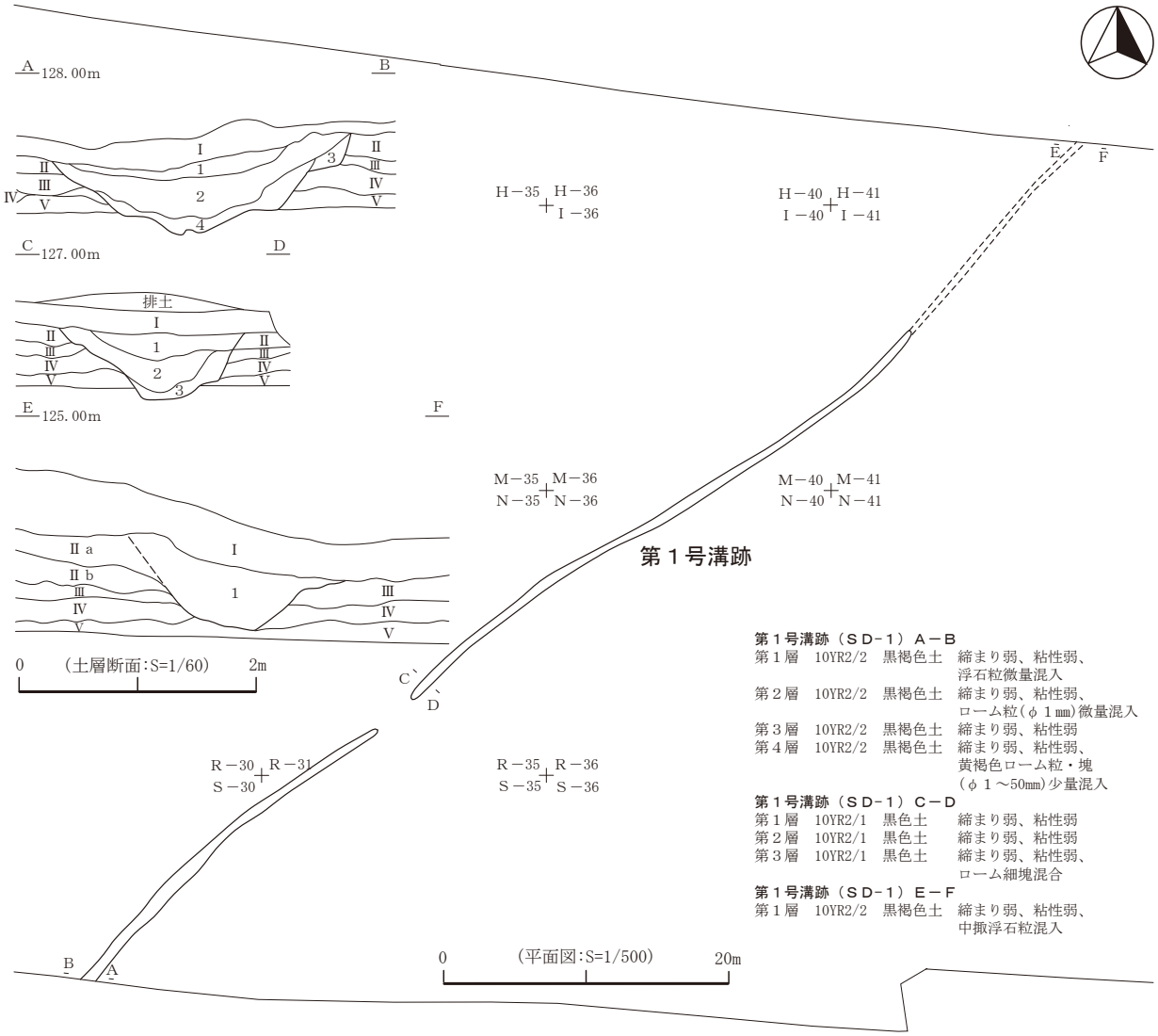


図９　溝跡

第３節　溝跡（図９）

第１号溝跡（ＳＤ－１）（図９）

［位置・確認］本調査では１条検出された。平面として検出されたのは調査区の南西から中央にかけてであるが、断面が中央北側の壁面で確認されたことから、調査区を斜めに横断していたものと推定される。第Ⅱ層を掘り込み、第Ⅰ層に被覆されている。

［形態・規模］平面形は細長い溝状である。検出された規模は、途中途切れる箇所はあるものの、長さ約73m、幅約50 ～ 120㎝、深さ10 ～ 20㎝であるが、調査区壁面で確認された断面から推定すると、開口部の最大幅253㎝、掘り込み面からの深さが最大で85㎝である。検出面上では調査区中央付近で浅く・狭くなるが、底面の標高は調査区南側で高く・調査区北側で低いため、南から北へ向かって傾斜していたものと考えられる。その比高差は約3.5mである。壁は底部から強く外反しながら立ち上がる皿状の断面形状で、底面には若干の起伏が認められる。

［堆積土］自然堆積で最大で３層に分けられる。黒色～黒褐色土主体で、柔らかく、しまりがない。

［時期］遺物は出土しなかったため詳細な時期は不明であるが、掘り込み面や堆積土・被覆状況から新しいことが想像される。地境の溝と推定されるが、地籍とは一致していない。　（平山）

第２章　出土遺物

本遺跡から出土した遺物は遺構外出土の土器のみで、遺物総量は、接合後の点数で24点である。遺物の出土範囲は遺跡北西端のⅠ－15・16グリッドのⅡ層に限られる。これらは第Ⅴ群に比定され、同一個体と思われる。特徴的な５点を図示した。底部は出土しなかった。

１は胴上半、２は口縁部片である。器形は、口縁部付近で外面に強く屈曲する鉢形と思われる。文様の一部が観察されるに過ぎないが、胴上半は、外面の屈曲部と口縁部内面に沈線が、口唇部直下と胴部に２個１対の瘤状の貼付が施されている。貼付は口縁と胴部を交互にしていたものと思われる。胴下半は恐らく変形工字文と思われるＺ字条の沈線が施されている。内面にはお焦げと思われる黒～黒褐色の物質が付着する。色調は明るく、胎土はきめ細かいが、砂礫が混入し、焼成はやや軟質で器面の摩滅が激しい。３～８は２・３条の平行沈線が施されたものである。小破片で、胴下半部のものと思われる。地縄文が施されているが、器表面の摩滅が激しいため、詳細は不明である。９・10は地縄文のみ施されているものである。これらも摩滅が激しいため、詳細は不明である。　（平山）

図10　出土遺物

第３章　理化学的分析

出土遺物がなく時期の推定ができなかった第８号土坑の炭化材の放射性炭素年代測定を委託した。

放射性炭素年代測定（AMS 測定）

（株）加速器分析研究所

１）遺跡の位置

荒屋敷久保（２）遺跡は青森県八戸市大字金浜字土橋19-6（北緯40° 27′ 54″、東経141° 36′ 25″）に所在する。

（２）測定の意義

遺構の廃絶年代を明らかにしたい。

（３）測定対象試料

測定対象試料は、第８号土坑の第２層から出土した木炭（AYK(2)-1：IAAA-71788）である。

（４）化学処理工程

１）メス・ピンセットを使い、根・土等の表面的な不純物を取り除く。

２）AAA（Acid Alkali Acid）処理。酸処理、アルカリ処理、酸処理により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では１Ｎの塩酸（80℃）を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では0.001 ～１Ｎの水酸化ナトリウム水溶液（80℃）を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では１Ｎの塩酸（80℃）を用いて数時間処理した後、超純水で中性になるまで希釈し、90℃で乾燥する。希釈の際には、遠心分離機を使用する。

３）試料を酸化銅１ｇと共に石英管に詰め、真空下で封じ切り500℃で30分、850℃で２時間加熱する。

４）液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し真空ラインで二酸化炭素(CO_2)を精製する。

５）精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出(水素で還元)しグラファイトを作製する。

６）グラファイトを内径１㎜のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、加速器に装着し測定する。

（５）測定方法

測定機器は、３MV タンデム加速器をベースとした^{14}C-AMS 専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。134個の試料が装填できる。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸(HOx Ⅱ)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。また、加速器により^{13}C/^{12}C の測定も同時に行う。

（６）算出方法

１）年代値の算出には、Libby の半減期5568年を使用した。

２）BP 年代値は、過去において大気中の^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定された、1950年を基準年として遡る^{14}C 年代である。

３）付記した誤差は、次のように算出した。

複数回の測定値について、χ^2検定を行い測定値が１つの母集団とみなせる場合には測定値の統計誤差から求めた値を用い、みなせない場合には標準誤差を用いる。

４）$\delta^{13}C$ の値は、通常は質量分析計を用いて測定するが、AMS 測定の場合に同時に測定される $\delta^{13}C$ の値を用いることもある。

$\delta^{13}C$ 補正をしない場合の同位体比および年代値も参考に掲載する。

同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差（‰；パーミル）で表した。

$$\delta^{14}C = [(^{14}A_S - {}^{14}A_R) / {}^{14}A_R] \times 1000 \quad (1)$$

$$\delta^{13}C = [(^{13}A_S - {}^{13}A_{PDB}) / {}^{13}A_{PDB}] \times 1000 \quad (2)$$

ここで、　$^{14}A_S$：**試料炭素の^{14}C濃度**：$(^{14}C/^{12}C)_S$ **または** $(^{14}C/^{13}C)_S$

$^{14}A_R$：**標準現代炭素の^{14}C濃度**：$(^{14}C/^{12}C)_R$ **または** $(^{14}C/^{13}C)_R$

$\delta^{13}C$ は、質量分析計を用いて試料炭素の^{13}C 濃度（$^{13}A_S = {}^{13}C/{}^{12}C$）を測定し、PDB（白亜紀のベレムナイト（矢石）類の化石）の値を基準として、それからのずれを計算した。但し、加速器により測定中に同時に$^{13}C/^{12}C$ を測定し、標準試料の測定値との比較から算出した $\delta^{13}C$ を用いることもある。この場合には表中に〔加速器〕と注記する。

また、$\Delta^{14}C$ は、試料炭素が $\delta^{13}C = -25.0$（‰）であるとしたときの^{14}C 濃度（$^{14}A_N$）に換算した上で計算した値である。（１）式の^{14}C 濃度を、$\delta^{13}C$ の測定値をもとに次式のように換算する。

$$^{14}A_N = {}^{14}A_S \times (0.975 / (1 + \delta^{13}C / 1000))^2$$ （$^{14}A_S$ **として$^{14}C/^{12}C$ を使用するとき**）

または

$$= {}^{14}A_S \times (0.975 / (1 + \delta^{13}C / 1000))$$ （$^{14}A_S$ **として$^{14}C/^{13}C$ を使用するとき**）

$$\Delta^{14}C = [(^{14}A_N - {}^{14}A_R) / {}^{14}A_R] \times 1000 \text{（‰）}$$

貝殻などの海洋が炭素起源となっている試料については、海洋中の放射性炭素濃度が大気の炭酸ガス中の濃度と異なるため、同位体補正のみを行った年代値は実際の年代との差が大きくなる。多くの場合、同位体補正をしない $\delta^{14}C$ に相当する BP 年代値が比較的よくその貝と同一時代のものと考えられる木片や木炭などの年代値と一致する。

^{14}C 濃度の現代炭素に対する割合のもう一つの表記として、pMC (percent Modern Carbon)がよく使われており、$\Delta^{14}C$ との関係は次のようになる。

$$\Delta^{14}C = (pMC / 100 - 1) \times 1000 \text{（‰）}$$

$$pMC = \Delta^{14}C / 10 + 100 \text{（%）}$$

国際的な取り決めにより、この $\Delta^{14}C$ あるいは pMC により、放射性炭素年代(Conventional Radiocarbon Age；yrBP)が次のように計算される。

$$T = -8033 \times \ln[(\Delta^{14}C / 1000) + 1]$$

$$= -8033 \times \ln(pMC / 100)$$

５）^{14}C 年代値と誤差は，１桁目を四捨五入して10年単位で表示される。

６）較正暦年代の計算では、IntCal04データベース（Reimer et al 2004）を用い、OxCalv3.10較正プログラム（Bronk Ramsey1995　Bronk Ramsey 2001　Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger2001）を使用した。

（７）測定結果

第８号土坑の木炭（AYK(2)-1：IAAA-71788）の^{14}C 年代は1210±30yrBP である。暦年較正年代（１σ＝68.2%）は、775 ～ 875AD である。化学処理および測定内容に問題はなく、炭素含有率も十分であることから、妥当な年代と考えられる。

参考文献

Stuiver M. and Polash H.A. 1977 Discussion: Reporting of 14C data, *Radiocarbon* 19, 355-363

Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program, *Radiocarbon* 37(2), 425–430

Bronk Ramsey C. 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal, *Radiocarbon* 43(2A), 355-363

Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. 2001 'Wiggle Matching' radiocarbon dates, *Radiocarbon* 43(2A), 381-389

Reimer, P.J. et al. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP, *Radiocarbon* 46, 1029-1058

IAACode No.	試	料	BP 年代および炭素の同位体比				
IAAA-71788	試料採取場所：	青森県八戸市大字金浜字土橋	Libby Age（yrBP）	：	1,210	±	30
		19-6　荒屋敷久保(2)遺跡　木炭	δ^{13}C(‰)、(加速器) Δ^{14}C	=	−28.31−	±	0.79
	試料形態　：		(‰)	=	139.6	±	3.4
	試料名(番号)：	AYK(2)-1	pMC（%）	=	86.04	±	0.34
			δ^{14}C(‰)	=	−145.5	±	3.1
	（参考）	δ^{13}C の補正無し	pMC（%）	=	85.45	±	0.31
#2001			Age（yrBP）	：	1,260	±	30

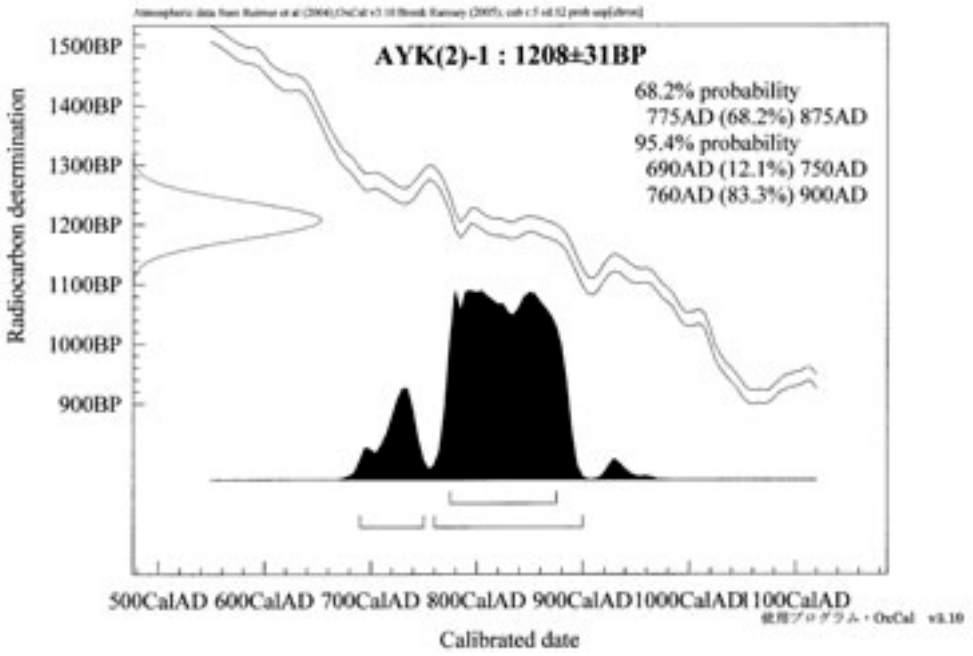
参考資料：暦年較正用年代

IAA Code No.	試料番号	Libby Age（yrBP）
IAAA-71788	AYK(2)-1	1208　±　31

ここに記載する Libby　Age（年代値）と誤差は下１桁を丸めない値です。

試料番号	IAACode No.	前処理方法	試料状態	処理前試料量	回収炭素量	燃焼量	精製炭素量	δ 13C（‰）〔加速器〕	Libby Age（yrBP）	（yrBP・丸め込みなし）	暦年較正１σ（yrcalBP）	暦年較正２σ（yrcalBP）
No.AYK(2)-1	IAAA-71788	AAA処理	乾燥	42.34mg	27.72mg	4.48mg	3.17mg	-28.31±0.79	1210±30	1208±31	775AD-875AD(68.2%)	690AD-750AD(12.1%) 760AD-900AD(83.3%)

【参考値：暦年較正　Radiocarbon determination】



第３編　横沢山（１）遺跡

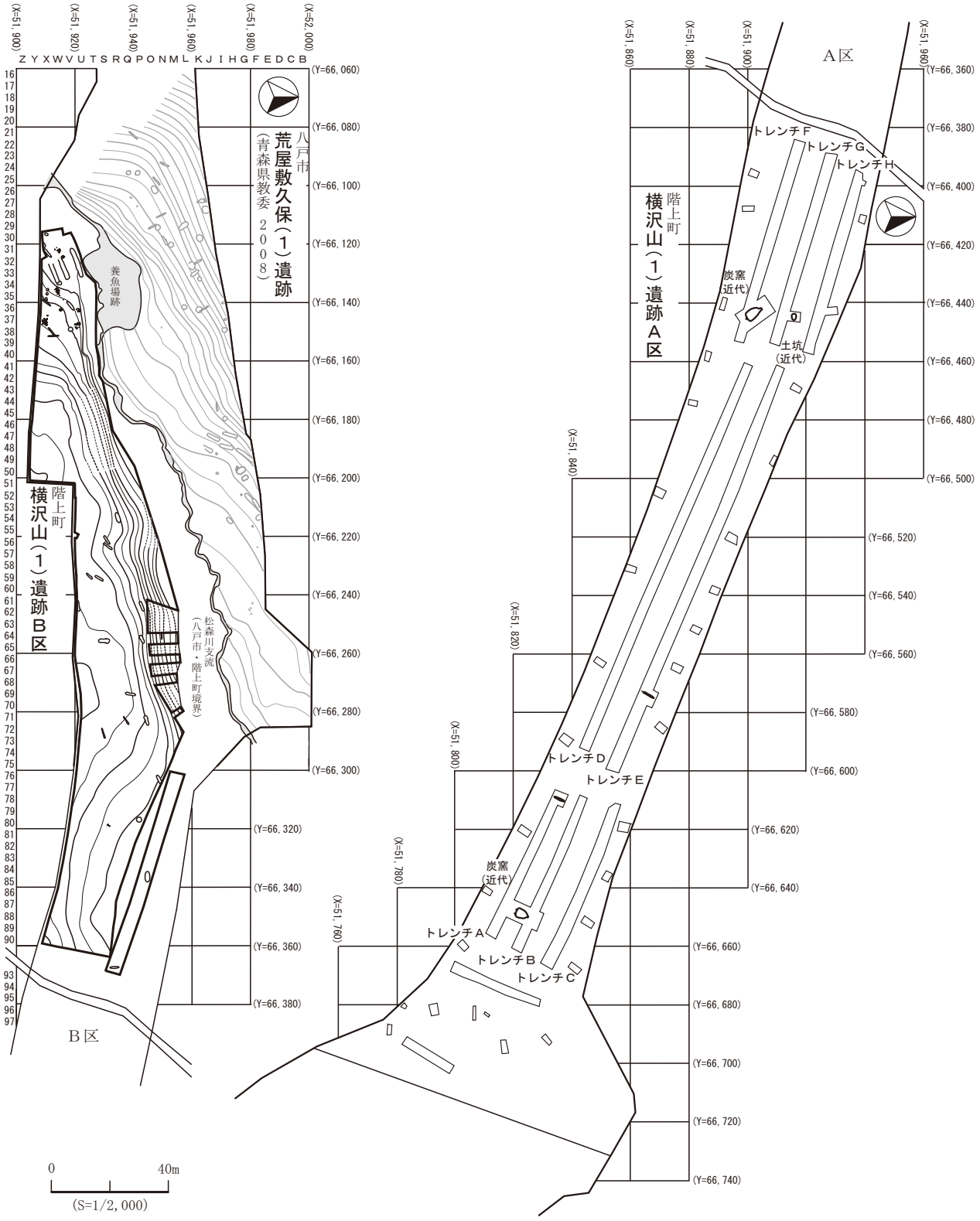


図11　横沢山（１）遺構配置

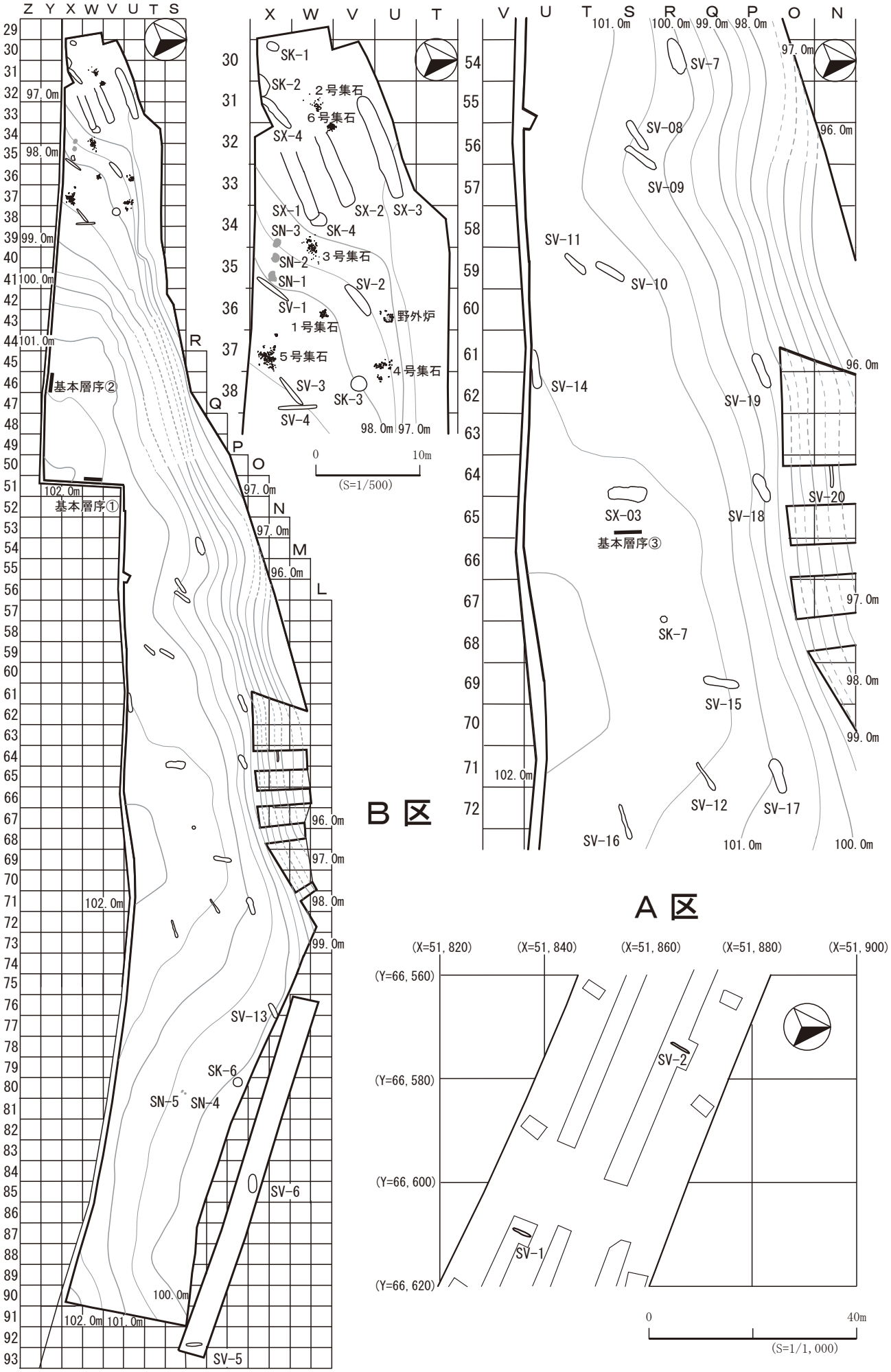


図12　横沢山（１）Ａ・Ｂ区遺構配置

第１章　検出遺構と出土遺物

第１節　土坑（図13）

２ヶ年の調査でＡ区に１基とＢ区に７基の総数８基の土坑を検出した。このうちＡ区の１基は近代のものであり、Ｂ区で検出しＳＫ－５は現代の植え込み穴であることが判明したため欠番とした。平成18年度の調査で検出された４基は、小川に面した遺物包含層地点から検出されており、詳細な時期比定までには至らないが、いずれも縄文時代のものと考えられる。平成19年度には２基検出されており、このうち１基は形態から縄文時代の円形落とし穴と考えられる。

第１号土坑（ＳＫ－１）（図13）

［位置・確認］調査区西端のＸ－30グリッドに位置し、盛土の下の遺物包含層を撤去後に検出した。この周辺は低湿地で、検出時点で水が染みでる状態であった。第Ⅳ層相当の面で検出している。

［形態・規模］平面形は楕円形で長軸約1.2m、短軸約80㎝の大きさである。断面形は巾着袋状のフラスコ状土坑であるが、西側の上部は崩落している。検出面からの深さは約55㎝で、底面は平坦である。

［堆積土］３層に分けられる。黒色土を主体にしており、グライ層化している。

［出土遺物］本遺構内からの出土はないが、周辺から縄文時代晩期と弥生時代の土器が出土している。

［時期］検出状況から縄文時代と考えられるが、時期は特定できない。

第２号土坑（ＳＫ－２）（図13）

［位置・確認］Ｘ－31グリッドに位置し、第１号土坑と同じく低地の第Ⅳ層相当の面で検出している。

［重複］第４号炭窯と重複しており、本遺構の方が古い。

［形態・規模］調査区境界に検出され全体の半分以上が調査区外にある。調査区内には、長軸約2.7m、短軸約90㎝の大きさで弧状に検出されており、円形ないしは楕円形の形状が推定される。周壁は10㎝～ 20㎝の高さでほぼまっすぐに立ち上がるが、調査区境界の土層面から約60㎝～ 70㎝の深さがあったものと思われる。底面には多少起伏がある。

［堆積土］４層に分けられる。黒色土を主体にしておりグライ層化している。自然堆積か、人為に埋められているか判断しかねるが、出土遺物の時期から埋められている可能性が高い。

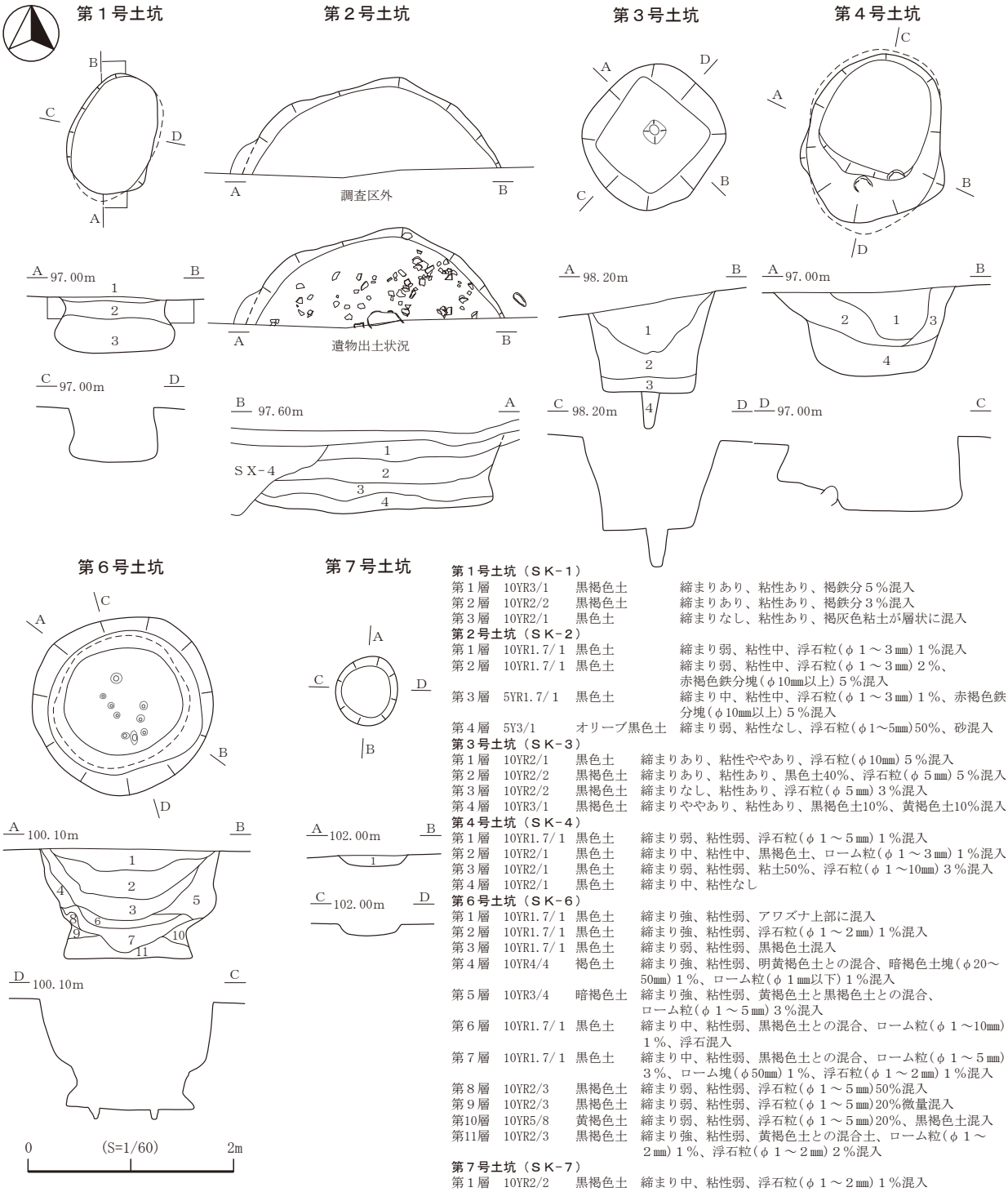
［出土遺物］底面および覆土中から約390点の土器破片が出土しているが、全体形状のわかるものはない。図21－22と21はＲＬが施文される深鉢形土器で底面から出土している。他６点は覆土からの出土で、24と28は縄文時代早期の貝殻文土器、25は鉢形土器で縄文時代晩期または弥生時代に比定される。

［時期］底面出土の土器から縄文時代晩期に帰属する可能性が高い。

第３号土坑（ＳＫ－３）（図13）

［位置・確認］Ｖ－38グリッドに位置し小川に近い緩斜面につくられている。標高約98mの第Ⅳ層面で検出している。

［形態・規模］開口部の形状は歪んだ円形状で、1.25m×1.35mの大きさである。底面は一辺が70㎝～90㎝の隅丸方形である。周壁は底面から開くように立ち上がる逆台形状である。検出面からの深さは



第１号土坑（ＳＫ−１）

第１層	10YR3/1	黒褐色土	締まりあり、粘性あり、褐鉄分５％混入
第２層	10YR2/2	黒褐色土	締まりあり、粘性あり、褐鉄分３％混入
第３層	10YR2/1	黒色土	締まりなし、粘性あり、褐灰色粘土が層状に混入

第２号土坑（ＳＫ−２）

第１層	10YR1.7/1	黒色土	締まり弱、粘性中、浮石粒（φ１～３㎜）１％混入
第２層	10YR1.7/1	黒色土	締まり弱、粘性中、浮石粒（φ１～３㎜）２％、赤褐色鉄分塊（φ10㎜以上）５％混入
第３層	5YR1.7/1	黒色土	締まり中、粘性中、浮石粒（φ１～３㎜）１％、赤褐色鉄分塊（φ10㎜以上）５％混入
第４層	5Y3/1	オリーブ黒色土	締まり弱、粘性なし、浮石粒（φ1～5㎜）50%、砂混入

第３号土坑（ＳＫ−３）

第１層	10YR2/1	黒色土	締まりあり、粘性ややあり、浮石粒（φ10㎜）５％混入
第２層	10YR2/2	黒褐色土	締まりあり、粘性あり、黒色土40%、浮石粒（φ５㎜）５％混入
第３層	10YR2/2	黒褐色土	締まりなし、粘性あり、浮石粒（φ５㎜）３％混入
第４層	10YR3/1	黒褐色土	締まりややあり、粘性あり、黒褐色土10%、黄褐色土10%混入

第４号土坑（ＳＫ−４）

第１層	10YR1.7/1	黒色土	締まり弱、粘性弱、浮石粒（φ１～５㎜）１％混入
第２層	10YR2/1	黒色土	締まり中、粘性中、黒褐色土、ローム粒（φ１～３㎜）１％混入
第３層	10YR2/1	黒色土	締まり弱、粘性弱、粘土50%、浮石粒（φ１～10㎜）３％混入
第４層	10YR2/1	黒色土	締まり中、粘性なし

第６号土坑（ＳＫ−６）

第１層	10YR1.7/1	黒色土	締まり強、粘性弱、アワズナ上部に混入
第２層	10YR1.7/1	黒色土	締まり強、粘性弱、浮石粒（φ１～２㎜）１％混入
第３層	10YR1.7/1	黒色土	締まり弱、粘性弱、黒褐色土混入
第４層	10YR4/4	褐色土	締まり強、粘性弱、明黄褐色土との混合、暗褐色土塊（φ20～50㎜）１%、ローム粒（φ１㎜以下）１％混入
第５層	10YR3/4	暗褐色土	締まり強、粘性弱、黄褐色土と黒褐色土との混合、ローム粒（φ１～５㎜）３％混入
第６層	10YR1.7/1	黒色土	締まり中、粘性弱、黒褐色土との混合、ローム粒（φ１～10㎜）１％、浮石混入
第７層	10YR1.7/1	黒色土	締まり中、粘性弱、黒褐色土との混合、ローム粒（φ１～５㎜）３％、ローム塊（φ50㎜）１％、浮石粒（φ１～２㎜）１％混入
第８層	10YR2/3	黒褐色土	締まり弱、粘性弱、浮石粒（φ１～５㎜）50%混入
第９層	10YR2/3	黒褐色土	締まり弱、粘性弱、浮石粒（φ１～５㎜）20%微量混入
第10層	10YR5/8	黄褐色土	締まり弱、粘性弱、浮石粒（φ１～５㎜）20%、黒褐色土混入
第11層	10YR2/3	黒褐色土	締まり強、粘性弱、黄褐色土との混合土、ローム粒（φ１～２㎜）１%、浮石粒（φ１～２㎜）２%混入

第７号土坑（ＳＫ−７）

第１層	10YR2/2	黒褐色土	締まり中、粘性弱、浮石粒（φ１～２㎜）１％混入

図13　土坑

最大で約１ｍある。底面は平坦で、ほぼ中央に小 Pit が１個設けられている。小 Pit は20㎝四方の方形に掘られており、底面から約40㎝の深さがある。逆茂木を設置したと推定される

［堆積土］３層に分けられる。黒色土を主体にした層で黄褐色の南部軽石の粒が多量に混入する。

［出土遺物］覆土中から縄文時代早期の土器が２点出土している。

［時期］出土土器からは時期決定に欠けるが、本遺構の形態的特徴と検出例から縄文時代の古い時期（早期～前期頃）の落とし穴の可能性が高い。

第４号土坑（ＳＫ－４）（図13）

［位置・確認］Ｗ－34グリッドに位置する。標高約97ｍの低湿地の第Ⅳ層相当面に、６個の角礫が集積した褐色土のプランを検出した。

［形態・規模］開口部の形状は歪んだ楕円形で、長軸1.7ｍ、短軸1.4ｍの大きさである。底面は約１ｍの方形状である。短軸方向の断面をみると壁は開くように立ち上がり、長軸方向はオーバーハングする。また地山に包含される礫を取り除いていないため、段差をもつ形状となっている。検出面からの深さは最大で80㎝ある。

［堆積土］４層に分けられる。黒色土主体で、第３層には黄褐色のブロックが混入する。

［出土遺物］覆土第２層から繊維混入土器が３点出土している。

［時期］出土土器から時期は特定できないが、縄文時代早期末から前期に帰属する可能性がある。

第６号土坑（ＳＫ－６）（図13）

［位置・確認］Ｐ－80グリッドに位置し、標高は約100ｍの第Ⅳ層面に黒色土プランで検出した。

［形態・規模］平面形は歪んだ円形で、開口部は径が約1.8ｍ、底面は1.3ｍの大きさである。断面形をみると底面から上へ30㎝～ 40㎝のところで屈曲し、下はフラスコ状となり上の周壁は開くように立ち上がる。おそらく屈曲部より上は崩落により生じたものと思われる。検出面からの深さは約1.１ｍあり、底面は平坦である。また底面には小 Pit が９個設けられている。小 Pit の配置に規則性はみられず、底面からの深さも４㎝～ 10㎝と浅い。

［堆積土］レンズ状の自然堆積で11層に分けられる。第１～３層は黒色土で、第１層中には中掫軽石粒が混入する。第４層以下の層は、壁の崩落土と流入土の混合したものと思われる。

［時期］出土遺物はなく時期決定に欠けるが、本遺構の形態的特徴と検出例から縄文時代の落とし穴の可能性が高く、第１層中に混入する中掫軽石粒から縄文時代前期初頭にはほぼ埋没状態にあり、構築の時期はそれ以前と考えられる。

第７号土坑（ＳＫ－７）（図13）

［位置・確認］Ｒ－67・68グリッドに位置し、台地平坦部の第Ⅳ層面で検出した。

［形態・規模］60㎝×70㎝の楕円形で、検出面からの深さも10㎝と浅い皿状の土坑である。

［堆積土］黒色土の単一層である。

［時期］帰属時期は不明である。　（小田川）

第２節　溝状土坑（図14 ～ 17）

平成18年度の調査でＡ区に２基、Ｂ区に６基（ＳＶ－１～６）、平成19年度にはＢ区で14基（ＳＶ－７～ 20）の、総数22基が検出された。検出位置はＢ区の小川に面した丘陵の端部に集中しており、その内でも西側緩斜面地点と東側平坦部に位置するものに分けられる。概ね等高線と平行するようにつくられているが、特に規則性はみられない。また第３号と４号の重複や、第８号と９号および10号と11号の様に近接した位置にあることから、構築時期には時間差があるものと考えられる。いずれにしても、対岸の荒谷屋敷久保（１）遺跡で検出された溝状土坑と関連して機能したものと推察される。

検出層位は第Ⅳ層及び第Ⅴ層であるが、荒谷屋敷久保（１）遺跡の例やＡ区で検出された遺構の土層面にみられるように大多数が第Ⅱ層中から掘り込まれているものと思われる。

Ａ区第１号溝状土坑（ＡＳＶ－１）（図14）

［位置・確認］東側トレンチＡの第Ⅴ層面に遺構の半分を検出し、トレンチ北側を拡げて全体形状を確認した。検出面地点の標高は約102.5ｍである。

［形態・規模］開口部の平面形は歪な葉巻状で、大きさは長軸で約3.5ｍ、短軸は最大55㎝ある。底面は長軸で約3.3ｍ、短軸は10㎝弱である。長軸方向の断面形は北側端部がオーバーハング、南側は垂直に立ち上がる。短軸の断面形はＶ字状である。底面は若干の起伏をもち北側に傾斜している。検出面からの深さは最大1.1ｍであるが、トレンチを拡げる前に作図した土層図からみて、本来は1.5ｍ程の深さがあったものと思われる。長軸方向はＮ－24°－Ｅである。

［堆積土］自然堆積で５層に分けられる。全体に第Ⅱ層ないしは第Ⅲ層に相当する黒色土が主体である。第４層中には壁の崩落したブロックが混じる。

［時期］出土遺物はなく時期不明であるが、縄文時代と思われる。

Ａ区第２号溝状土坑（ＡＳＶ－２）（図14）

［位置・確認］トレンチＥの第Ⅴ層面に遺構の半分を検出し、トレンチ北側を拡げて全体形状を確認した。検出面地点の標高は約102ｍである。

［形態・規模］開口部の形状は長軸両端部付近が膨らむ葉巻形で、大きさは長軸が約3.75ｍ、短軸の最大幅は両端部で55㎝～ 57㎝ある。底面の長軸も約3.75ｍあり、短軸は約20㎝ある。長軸方向の断面形は両端がほぼ垂直に立ち上がり、短軸の断面形はＶ字状である。底面は北側に傾斜している。検出面からの深さは約１ｍであるが、本来は1.5ｍ位あったと思われる。長軸方向はＮ－30°－Ｅである。

［堆積土］自然堆積で６層に分けられる。すべて黒色土を主体としている。

［時期］出土遺物はなく時期不明であるが、縄文時代と思われる。

Ｂ区第１号溝状土坑（ＢＳＶ－１）（図14）

［位置・確認］Ｘ－35・36グリッドに位置する。小川湧水地点に向かう緩斜面に、遺物包含層を掘り込んでつくられており、第Ⅴ層面まで掘り下げて全体形状を確認してから精査している。

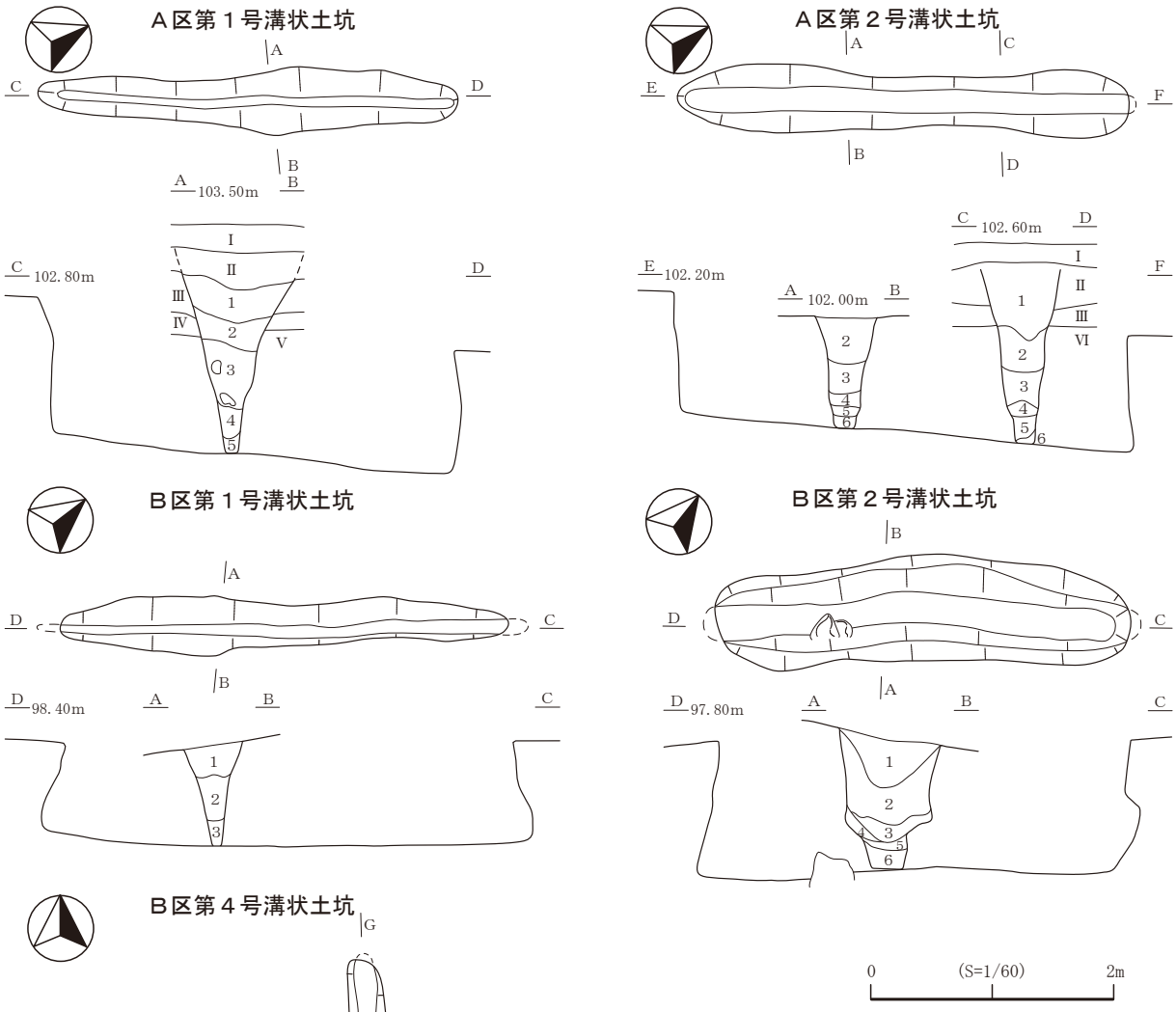
［形態･規模］開口部の形状は歪な葉巻形であり、大きさは長軸が約3.7ｍ、短軸の最大幅は48㎝である。底面長軸は約４ｍ、短軸は10㎝程である。長軸方向の断面形は両端がオーバーハングしたフラスコ状である。短軸の断面形はＶ字状であるが、遺構の上位を大きく取り去っているため定かではない。長軸方向はＮ－37°－Ｅである。

［堆積土］自然堆積で３層に分けられる。すべて黒色土を主体としている。

［時期］出土遺物はなく時期不明であるが、縄文時代と思われる。

Ｂ区第２号溝状土坑（ＢＳＶ－２）（図14）

［位置・確認］Ⅴ－36グリッドに位置し、小川に近い低地に長楕円形のプランで検出された。



Ａ区第１号溝状土坑（ＡＳＶ-１）

第１層	10YR1.7/1	黒色土	締まり中、粘性弱、中掫浮石粒、ローム粒（φ１～2㎜）少量混入
第２層	10YR2/1	黒色土	締まり中、粘性弱、中掫浮石粒、ローム粒微量混入
第３層	10YR3/1	黒褐色土	締まり中、粘性弱、中掫浮石粒、ローム塊（φ１～60㎜）混入
第４層	10YR2/2	黒褐色土	締まり弱、粘性中、中掫浮石粒（φ１～5㎜）少量混入
第５層	10YR2/3	黒褐色土	締まり弱、粘性強、ローム土、黒色土混入

Ａ区第２号溝状土坑（ＡＳＶ-２）

第１層	10YR1.7/1	黒色土	締まり中、粘性弱、中掫浮石粒、ローム粒（φ１～2㎜）少量混入
第２層	10YR2/2	黒褐色土	締まり弱、粘性中、中掫浮石粒（φ１～5㎜）少量混入
第３層	10YR3/2	黄褐色土	締まり弱、粘性強、中掫浮石粒（φ１～2㎜）微量混入
第４層	10YR3/3	暗褐色土	締まり弱、粘性強、中掫浮石粒、ローム粒（φ１～3㎜）少量混入
第５層	10YR5/6	黄褐色土	締まり中、粘性弱、中掫浮石粒、ローム粒（φ１～2㎜）少量混入
第６層	10YR3/1	黒褐色土	締まり弱、粘性強、ローム土塊、黒色土混入

Ｂ区第１号溝状土坑（ＢＳＶ-１）

第１層	10YR1.7/1	黒色土	締まり中、粘性やや弱、ローム塊（φ１～50㎜）15%、浮石（φ１～５㎜）２%混入
第２層	10YR2/1	黒色土	締まり弱、粘性やや強、ローム塊（φ１～30㎜）20%、浮石（φ１～10㎜）10%混入
第３層	10YR1.7/1	黒色土	締まり弱、粘性やや強、浮石粒（φ１～５㎜）10%混入

Ｂ区第２号溝状土坑（ＢＳＶ-２）

第１層	10YR1.7/1	黒色土	締まり中、粘性弱、浮石粒（φ１～５㎜）２%混入
第２層	10YR2/2	黒褐色土	締まり弱、粘性弱、浮石粒（φ１～５㎜）30%混入
第３層	10YR7/8	黄橙色土	締まり中、粘性中、浮石粒（φ１～５㎜）１%混入
第４層	10YR8/6	黄橙色土	締まり弱、粘性中、浮石粒（φ１～５㎜）30%混入
第５層	10YR5/6	黄褐色土	締まり弱、粘性中、浮石粒（φ１～５㎜）３%混入
第６層	10YR4/3	にぶい黄褐色土	締まり弱、粘性強、浮石粒（φ１～５㎜）３%混入

Ｂ区第３号溝状土坑（ＢＳＶ-３）

第１層	10YR2/1	黒色土	締まりあり、粘性なし、アワズナ２%混入
第２層	10YR2/1	黒色土	締まりややあり、粘性あり、褐色土が斑状に５%混入

Ｂ区第４号溝状土坑（ＢＳＶ-４）

第１層	10YR2/1	黒色土	締まり中、粘性弱、浮石粒（φ２～４㎜）３%混入
第２層	10YR2/1	黒色土	締まり中、粘性なし、浮石粒（φ１～３㎜）１%、黒褐色土混入
第３層	10YR2/1	黒色土	締まりなし、粘性中、ローム粒（φ１～10㎜）７%、浮石（φ１～３㎜）30%混入

図14　溝状土坑（１）

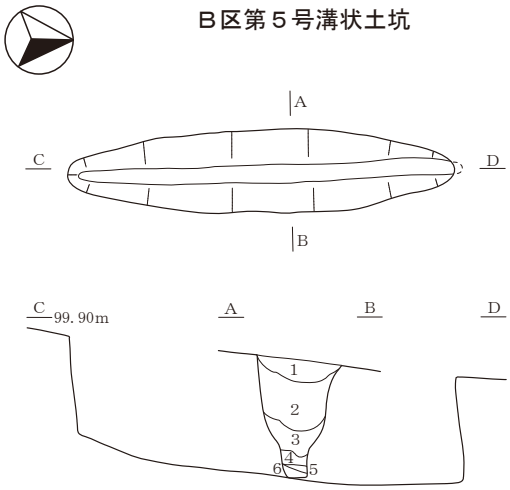
［形態・規模］開口部の形状は太い葉巻形で、大きさは長軸が約3.4m、短軸の最大幅は88㎝である。底面長軸は約3.6m、短軸幅は20㎝～25㎝程である。長軸方向の断面では南側が浅くオーバーハングし、北側は抉れた形状である。短軸方向の断面形は、大小の箱形を２段に重ねた様な形状であり、おそらく周壁が崩落して生じたものと思われる。底面は平坦であるが、地山中に包含されている大型礫を残したまま掘られている。長軸方向はＮ－52°－Ｅである。
［堆積土］自然堆積で６層に分けられる。第１・２層は流入した黒色土、第３～５層は壁の崩落土、第６層は底面となる第ＸＩｂ層と黒色土の混合土である。
［時期］出土遺物はなく時期不明であるが、縄文時代と思われる。

Ｂ区第３号溝状土坑（ＢＳＶ－３）（図14）
［位置・確認］Ｗ・Ｘ－38グリッドに位置し、標高約98.6ｍの第Ⅳ層面で検出した。
［重複］第４号溝状土坑と重複しており、本遺構の方が新しい。
［形態・規模］開口部の形状は棒状で、大きさは長軸が約3.7ｍ、短軸の最大幅は約32㎝である。底面部の長軸は約3.8ｍ、短軸幅は最大で15㎝ある。長軸方向の両端はオーバーハングしており、南西側は抉れている。短軸は筒状である。検出面からの深さは約80㎝であるが、遺物包含層を掘り下げて検出しているためで本来はもっと深いものと思われる。長軸方向はＮ－51°－Ｅである。
［堆積土］自然堆積で２層に分けられる。黒色土が主体で第２層中に崩落した壁のブロックが混じる。
［時期］出土遺物はなく時期不明であるが、縄文時代と思われる。

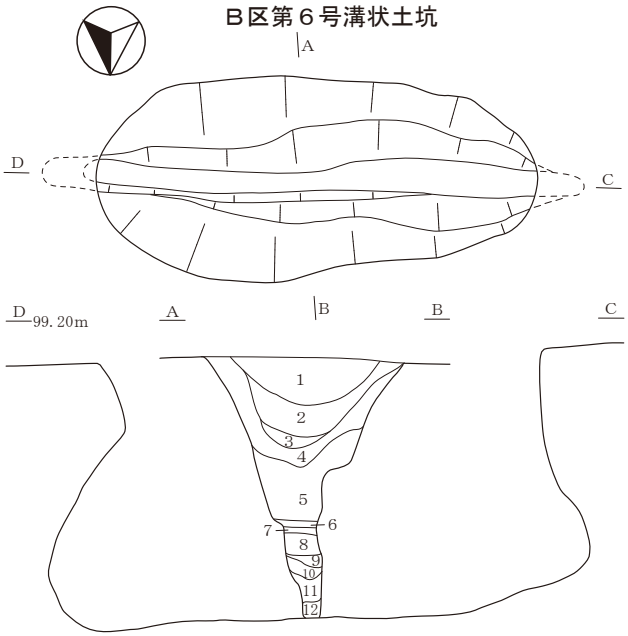
Ｂ区第４号溝状土坑（ＢＳＶ－４）（図14）
［位置・確認］Ｗ・Ｘ－38グリッドに位置し、標高約98.6ｍの第Ⅳ層面で検出した。
［重複］第３号溝状土坑と重複しており、本遺構の方が古い。
［形態･規模］第３号溝状土坑と同じく棒状で、大きさは長軸が約3.6m、短軸の最大幅は約35㎝である。底面部の長軸は約3.8m、短軸幅は最大で18㎝ある。長軸方向の両端はオーバーハングし抉れている。短軸は筒状である。検出面からの深さは最大で１ｍあるが、本来はもっと深いものと思われる。長軸方向はＮ－２°－Ｗである。
［堆積土］自然堆積で３層に分けられる。第２・３層中に崩落した壁の細かいブロックが混じる。
［時期］出土遺物はなく時期不明であるが、縄文時代と思われる。

Ｂ区第５号溝状土坑（ＢＳＶ－５）（図15）
［位置・確認］Ｒ－92グリッドに位置し、標高約101.0ｍの第Ⅳ層面で検出した。平成18年度のトレンチ調査で検出精査された。
［形態・規模］開口部の形状は柳葉形で、大きさは長軸が約3.1ｍ、短軸の最大幅は約65㎝である。底面部の長軸は約３ｍ、短軸幅は最大で15㎝ある。長軸方向の断面形は菱形状で、南側は開くように立ち上がり、北側は浅くオーバーハングしている。短軸断面はＹ字状である。底面は平坦で、南側から北側に傾斜している。長軸方向はＮ－３°－Ｗである。
［堆積土］自然堆積で５層に分けられる。黒色土が主体で第３・４層中に崩落土のブロックが混じる。

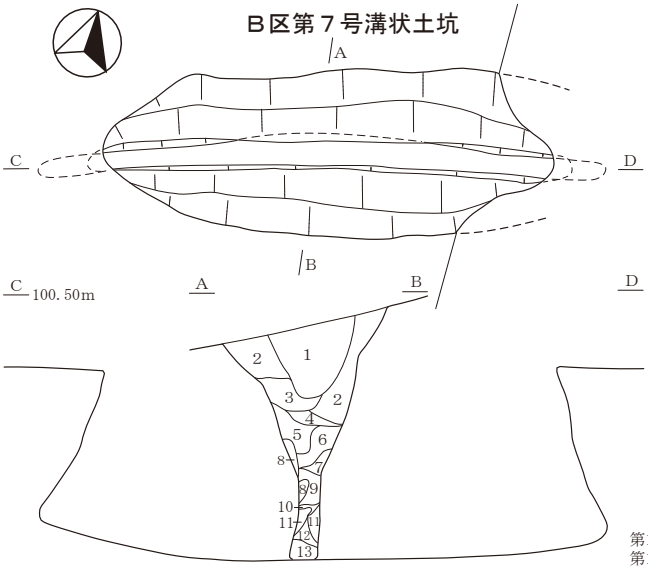
Ｂ区第５号溝状土坑



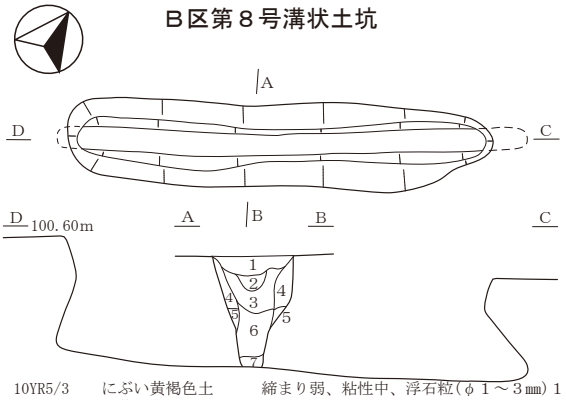
Ｂ区第６号溝状土坑



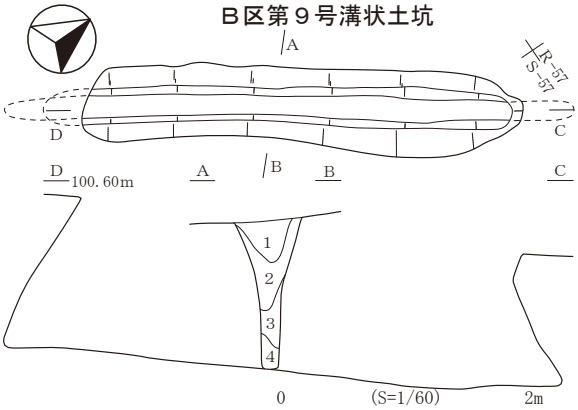
Ｂ区第７号溝状土坑



Ｂ区第８号溝状土坑



Ｂ区第９号溝状土坑



Ｂ区第５号溝状土坑（ＢＳＶ-５）

第１層	10YR1.7/1	黒色土	締まり中、粘性弱、浮石粒(φ１～５㎜)１％混入
第２層	10YR2/2	黒褐色土	締まり中、粘性弱、浮石粒(φ１～３㎜)３％混入
第３層	10YR4/1	褐灰色土	締まり強、粘性中、浮石塊(φ50～70㎜)25%、粘土塊50%混入
第４層	10YR2/3	黒褐色土	締まり弱、粘性弱、浮石粒(φ１～２㎜)７%、浮石塊(φ30～50㎜)15%混入
第５層	10YR3/4	暗褐色土	締まり中、粘性中、浮石粒(φ１～３㎜)５%混入
第６層	2.5Y3/1	黒褐色土	締まり中、粘性弱、浮石粒(φ１～２㎜)２%混入

Ｂ区第６号溝状土坑（ＢＳＶ-６）

第１層	10YR1.7/1	黒色土	締まり強、粘性中、浮石粒(φ１～５㎜)５%混入
第２層	10YR1.7/1	黒色土	締まり強、粘性中、浮石粒(φ１～10㎜)10%混入
第３層	10YR2/2	黒褐色土	締まり強、粘性中、浮石粒(φ１～３㎜)30%混入
第４層	10YR3/2	黒褐色土	締まり中、粘性中、浮石粒(φ１～10㎜)60%混入
第５層	10YR6/8	明黄褐色土	締まり強、粘性中、浮石粒(φ10～30㎜)５%混入
第６層	10YR8/4	浅黄橙色土	締まり弱、粘性中
第７層	10YR3/3	暗褐色土	締まり弱、粘性強、浮石粒(φ１～５㎜)１%混入
第８層	10YR5/4	にぶい黄褐色土	締まり弱、粘性強、浮石粒(φ１～５㎜)１%
第９層	10YR2/1	黒色土	締まり弱、粘性中
第10層	10YR5/3	にぶい黄褐色土	締まり弱、粘性中、浮石粒(φ１～３㎜)１%
第11層	10YR6/8	明黄褐色土	締まり強、粘性弱、ローム塊との混合、黒褐色土５%混入
第12層	10YR3/1	黒褐色土	締まり弱、粘性中、浮石粒(φ１～３㎜)１%

Ｂ区第７号溝状土坑（ＢＳＶ-７）

第１層	10YR2/3	黒褐色土	締まり中、粘性弱、浮石粒(φ５㎜)１%
第２層	10YR1.7/1～2/3	黒色～黒褐色土	締まり強、粘性弱、ローム塊(φ10～60㎜)３%浮石粒(φ２～10㎜)１%混入
第３層	10YR2/2	黒褐色土	締まり強、粘性弱、ローム塊(φ10～20㎜)１%、浮石粒(φ１～５㎜)１%混入
第４層	10YR2/2	黒褐色土	締まり強、粘性弱、浮石粒(φ２～５㎜)１%
第５層	10YR2/2	黒褐色土	締まり強、粘性弱、ローム塊(φ30～60㎜)２%浮石粒(φ１～２㎜)１%混入
第６層	10YR1.7/1～2/2	黒色～黒褐色土	締まり強、粘性弱、ローム塊(φ30～60㎜)２%浮石粒(φ２～５㎜)１%
第７層	10YR6/8	明黄褐色ローム	締まり強、粘性弱、ローム塊(φ50～70㎜)との混合、黒褐色土１%混入
第８層	10YR6/8～7/8	明黄褐色～黄橙色ローム	締まり強、粘性弱、ローム塊(φ50～80㎜)主体、黒褐色土１%帯状に混入
第９層	10YR6/8	明黄褐色ローム	締まり強、粘性弱、黒色土２%混入
第10層	10YR2/2	黒褐色土	締まり中、粘性弱、ローム塊(φ10～20㎜)１%混入
第11層	10YR5/6～7/8	黄褐色～黄橙ローム	締まり強、粘性弱、ローム塊(φ12㎜)、黒褐色土１%混入
第12層	10YR2/1	黒色土	締まり強、粘性弱、ローム粒(φ５～10㎜)１%混入
第13層	10YR5/8	黄褐色ローム	締まり強、粘性弱、黒褐色土１%、浮石粒(５～10㎜)１%混入

Ｂ区第８号溝状土坑（ＢＳＶ-８）

第１層	10YR1.7/1	黒色土	締まり強、粘性弱、浮石粒(φ１～２㎜)１%混入
第２層	10YR1.7/1	黒色土	締まり強、粘性弱、浮石粒(φ１～２㎜)１%混入
第３層	10YR1.7/1	黒色土	締まり強、粘性弱、浮石粒(φ２～５㎜)混入
第４層	10YR1.7/1	黒色土	締まり強、粘性弱、浮石粒(φ２～５㎜)１%混入
第５層	10YR2/3	黒褐色土	締まり中、粘性弱、ローム塊(φ10～20㎜)２%、浮石粒(φ２～５㎜)１%混入
第６層	10YR1.7/1	黒色土	締まり強、粘性弱、浮石粒(φ２～５㎜)１%混入
第７層	10YR1.7/1	黒色土	締まり中、粘性弱、浮石粒(φ２～５㎜)２%混入

Ｂ区第９号溝状土坑（ＢＳＶ-９）

第１層	10YR2/2	黒褐色土	締まり強、粘性弱、浮石粒(φ１㎜以下)１%混入
第２層	10YR1.7/1	黒色土	締まり強、粘性弱、ローム塊(φ10㎜)１%、浮石粒(φ１～２㎜)１%混入
第３層	10YR1.7/1	黒色土	締まり中、粘性中、浮石粒(φ１～２㎜)２%混入
第４層	10YR2/1	黒色土	締まり中、粘性中、浮石粒(φ１～５㎜)２%混入

図15　溝状土坑（２）

［時期］出土遺物はなく時期不明であるが、縄文時代と思われる。

Ｂ区第６号溝状土坑（ＢＳＶ－６）（図15）

［位置・確認］Ｄ－84・85グリッドに位置し、標高約100.0ｍの第Ⅳ層面で検出した。平成18年度のトレンチ調査で検出精査された。

［形態・規模］開口部の形状は楕円形で、大きさは長軸が約3.5ｍ、短軸の最大幅は約1.6ｍである。中位から底部にかけては歪な葉巻形で、底面の長軸は約4.3ｍ、短軸幅は最大で約30㎝ある。長軸方向の断面形は両端が大きくオーバーハングしたフラスコ状で、短軸断面はＶ字状であるが、中位から下位にかけて数段屈曲している。検出面からは約2.1ｍの深さがあり、長軸方向はほぼＮ－０°Ｅである。

［堆積土］自然堆積で12層に分けられる。第１～３層と第７・９・12は黒色土である。第４層は浮石粒が混合する褐色土で壁の第Ⅳ層が崩落したものと捉えている。同じく第５層は壁の第Ⅴ～Ⅹ層が崩落したもので、第６・８・10・11層は第ⅩⅠ層の八戸火山灰第ⅰ層が崩落して混合したものである。

［時期］出土遺物はなく時期不明であるが、縄文時代と思われる。

Ｂ区第７号溝状土坑（ＢＳＶ－７）（図15）

［位置・確認］Ｒ－54グリッドに位置し、台地縁辺の斜面落ち際に黒色土のプランで検出した。

［形態・規模］平成18年度の試掘トレンチで遺構の一部を削平してしまったが、開口部の大きさは長軸が約3.6ｍ、短軸の最大幅は約1.4ｍあり、平面形状は長楕円を呈していたものと思われる。底面の長軸は約4.1ｍ、短軸幅は約20㎝である。長軸方向の断面形は両端が鋭角にオーバーハングしたフラスコ状で、短軸断面はＹ字状である。底面は平坦で両端から中央に向かって深くなり、中央部の深さは検出面から約1.9ｍである。長軸方向はＮ－71°－Ｅである。

［堆積土］自然堆積で13層に分けられる。第１～４層までは黒色土を主体にした層で、第５層以下は壁の崩落したブロックないしはそれと流入した黒色土の混合土である。

［時期］出土遺物はなく時期不明であるが、縄文時代と思われる。

Ｂ区第８号溝状土坑（ＢＳＶ－８）（図15）

［位置・確認］Ｓ－56グリッドに位置し、標高約100.5ｍの第Ⅳ層面で検出した。

［形態・規模］開口部の形状は葉巻形で、大きさは長軸が約3.4ｍ、短軸の最大幅は約70㎝である。底面の長軸は約3.8ｍ、短軸は15㎝～20㎝である。長軸方向の断面形は中位で屈曲するフラスコ状で、短軸断面はＶ字状である。底面にはやや起伏があり北側に向かい傾斜している。検出面からの深さは約90㎝で、近接した第７号や第９号より浅いことから削平されている可能性がある。長軸方向はＮ－71°－Ｅである。

［堆積土］自然堆積で７層に分けられる。すべて黒色土が流入したものである。

［出土遺物］第３層中から縄文時代前期と思われる繊維を混入する土器が２点出土した。

［時期］出土遺物から構築時期の特定はできないが、縄文時代と思われる。

Ｂ区第９号溝状土坑（ＢＳＶ－９）（図15）

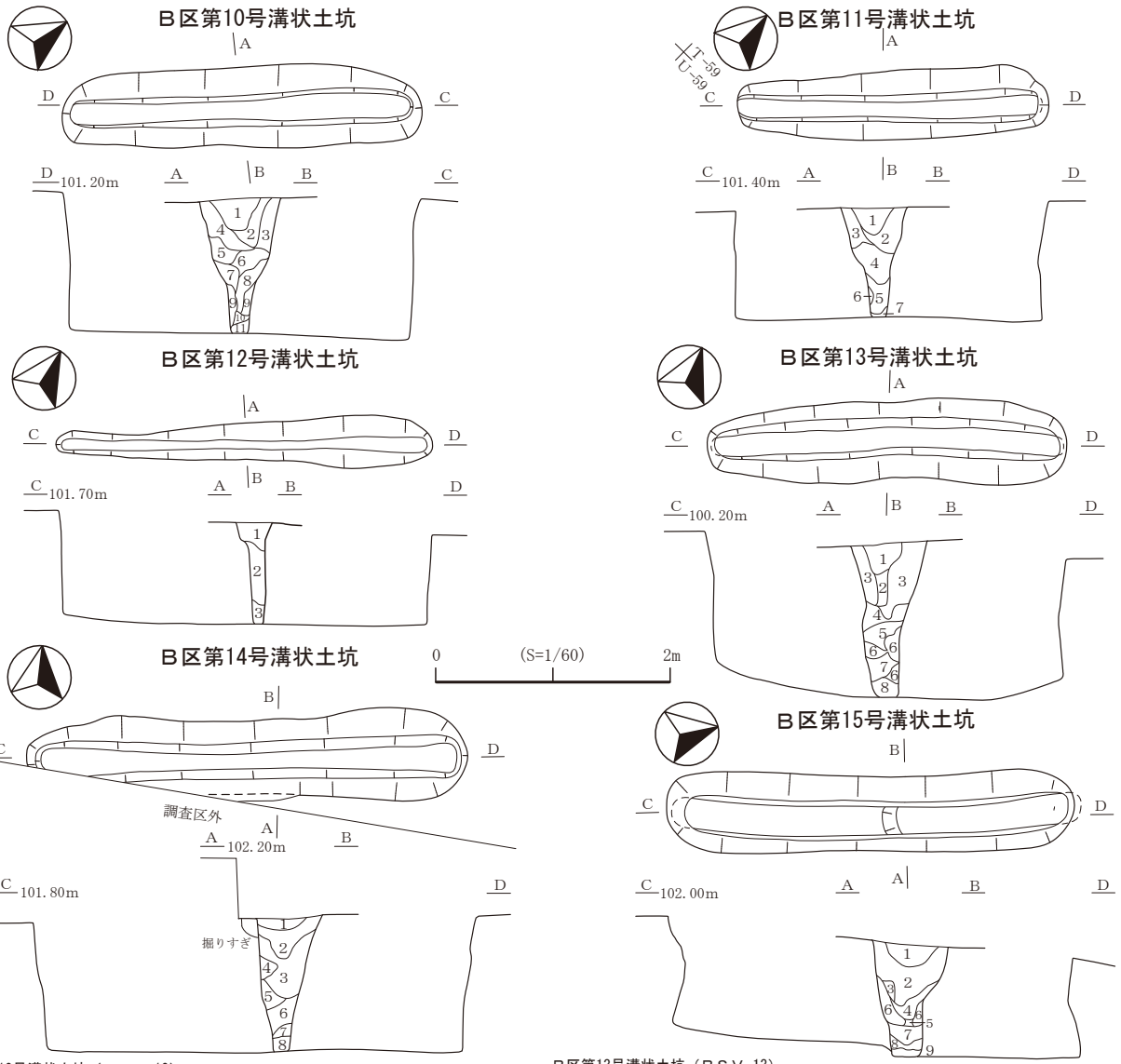
［位置・確認］大部分がＳ－56グリッドに位置し、第８号溝状土坑と近接して検出されている。
［形態・規模］開口部の形状は歪な葉巻形で、大きさは長軸が約3.5m、短軸の最大幅は約70㎝である。底面の長軸は約4.5m、短軸幅は15㎝～ 20㎝である。長軸方向の断面形はオーバーハングしたフラスコ状で、短軸断面は屈曲の緩いＹ字状である。検出面からの深さは約1.2mあり、ほぼ平坦な底面は北側に向かい傾斜している。長軸方向はＮ－34°－Ｅである。
［堆積土］自然堆積で４層に分けられる。すべて黒色土が流入したものである。
［出土遺物］覆土中から縄文時代早期前葉の土器が１点出土した。
［時期］出土遺物から構築時期の特定はできないが、縄文時代と思われる。

Ｂ区第10号溝状土坑（ＢＳＶ－10）（図16）
［位置・確認］Ｓ・Ｔ－59グリッドに位置し、標高約101mの第Ⅳ層面で検出した。
［形態・規模］開口部の形状は葉巻形で、大きさは長軸が約3.1m、短軸の幅は約70㎝である。底面の長軸は約2.9m、短軸は最大で20㎝ある。長軸方向の断面形は箱形で、短軸断面は屈曲の緩いＹ字状である。検出面からの深さは約1.15mあり、底面はほぼ平坦である。長軸方向はＮ－30°－Ｅである。
［堆積土］自然堆積で11層に分けられる。第１～４層までは黒色土を主体にした層で、第５層以下は壁の崩落したブロックないしはそれと流入した黒色土の混合土である。
［時期］出土遺物はなく時期不明であるが、縄文時代と思われる。

Ｂ区第11号溝状土坑（ＢＳＶ－11）（図16）
［位置・確認］Ｔ－59グリッドに位置し、第10号溝状土坑と近接して検出されている。
［形態・規模］開口部の形状は葉巻形で、大きさは長軸が約2.7m、短軸の幅は約60㎝である。底面の長軸は約2.6m、短軸は10㎝～ 15㎝ある。長軸方向の断面形はほぼ箱形で、短軸断面は屈曲の緩いＹ字状である。検出面からの深さは１mあり、底面はほぼ平坦である。長軸方向はＮ－46°－Ｅである。
［堆積土］自然堆積で７層に分けられる。第４層以下には黄褐色のブロックおよび細粒が混入する。
［時期］出土遺物はなく時期不明であるが、縄文時代と思われる。

Ｂ区第12号溝状土坑（ＢＳＶ－12）（図16）
［位置・確認］Ｑ－71グリッドに位置し、標高約101.5m地点の第Ⅳ層面で検出した。
［形態・規模］開口部の形状は歪な葉巻形で、大きさは長軸が約3.2m、短軸幅は18㎝～ 45㎝で北側に広い。底面の長軸は約3.1m、短軸幅は最大で12㎝である。長軸方向の断面形は箱形で、短軸断面は筒状であるが、形状や深さから上部を削平されているものと思われる。検出面からの深さは86㎝で、底面はほぼ平坦である。長軸方向はＮ－57°－Ｅである。
［堆積土］自然堆積で３層に分けられる。すべて黒色土が流入したものである。
［時期］出土遺物はなく時期不明であるが、縄文時代と思われる。

Ｂ区第13号溝状土坑（ＢＳＶ－13）（図16）
［位置・確認］Ｎ－76グリッドに位置し、標高約100m地点の第Ⅳ層面で検出した。



Ｂ区第10号溝状土坑（ＢＳＶ-10）

第１層	10YR2/1 黒色土	締まり中、粘性強、ローム粒（φ１㎜）１％、浮石粒（φ１㎜）１％混入
第２層	10YR2/1 黒色土	締まりやや強、粘性中、ローム粒（φ１～２㎜）１％浮石粒（φ１㎜）１％混入
第３層	10YR2/2 黒褐色土	締まり強、粘性中、ローム粒（φ１～８㎜）５％、浮石粒（φ１㎜）１％混入
第４層	10YR2/2 黒褐色土	締まりやや強、粘性中、ローム粒（φ１～５㎜）１％・ローム塊（φ５～15㎜）２％、浮石粒（φ１㎜）１％
第５層	10YR3/3 暗褐色土	締まり強、粘性やや強、黄褐色土粒・塊（φ１～50㎜）斑に30％、浮石粒（φ１～２㎜）１％混入
第６層	10YR3/3 暗褐色土	締まり中、粘性やや強、黄褐色土粒・塊（φ１～30㎜）３％、浮石粒（φ１～３㎜）１％混入
第７層	10YR3/3 暗褐色土	締まり中、粘性やや強、黄褐色土粒・塊（φ１～100㎜）30％、浮石粒（φ１～５㎜）１％混入
第８層	10YR4/4 褐色土	締まり中、粘性中、黄褐色土粒（φ１～５㎜）10％、暗褐色土塊（φ10～50㎜）２％混入
第９層	10YR5/6 黄褐色ローム	締まり強、粘性中、暗褐色土粒塊（φ１～30㎜）、浮石粒（φ１～２㎜）１％混入
第10層	10YR5/6 黄褐色ローム	締まりやや弱、粘性やや弱
第11層	10YR5/6 黄褐色ローム	締まり中、粘性弱

Ｂ区第11号溝状土坑（ＢＳＶ-11）

第１層	10YR2/2 黒褐色土	締まり強、粘性弱、中撰浮石粒、ローム粒（φ１～２㎜）１％、浮石粒（φ２～５㎜）１％混入
第２層	10YR2/2 黒褐色土	締まり強、粘性弱、中撰浮石粒、ローム粒（φ２～５㎜）１％混入
第３層	10YR2/2 黒褐色土	締まり強、粘性弱、中撰浮石粒、ローム粒（φ１～２㎜）１％混入
第４層	10YR2/2 黒褐色土	締まり強、粘性弱、ローム塊（φ80～180㎜）５％、浮石混入
第５層	10YR2/2 黒褐色土	締まり強、粘性弱、ローム粒（φ２～５㎜）２％混入
第６層	10YR5/6 黄褐色ローム	締まり中、粘性弱、黒褐色土粒（φ５～10㎜）１％
第７層	10YR2/2 黒褐色土	締まり弱、粘性弱、ローム塊（φ10～20㎜）２％混入

Ｂ区第12号溝状土坑（ＢＳＶ-12）

第１層	10YR2/3 黒褐色土	締まり強、粘性弱、ローム塊（φ30～80㎜）１％混入
第２層	10YR2/3 黒褐色土	締まり強、粘性弱、ローム粒（φ５～10㎜）１％混入
第３層	10YR2/2 黒褐色土	締まり強、粘性弱、ローム塊（φ10～20㎜）２％混入

Ｂ区第13号溝状土坑（ＢＳＶ-13）

第１層	10YR2/2 黒褐色土	締まりやや弱、粘性中、ローム粒（φ１㎜）１％混入
第２層	10YR2/2 黒褐色土	締まり中、粘性中、ローム粒（φ１～３㎜）１％、浮石粒（φ１㎜）１％混入
第３層	10YR2/2 黒褐色土	締まり中、粘性中、暗褐色土が斑に５％、ローム粒（φ１～10㎜）５％、浮石粒（φ１㎜）１％混入
第４層	10YR3/3 暗褐色土	締まりやや強、粘性やや弱、黄褐色土、ローム粒（φ１～５㎜）５％、浮石粒（φ１㎜）１％混入
第５層	10YR3/2 黒褐色土	締まり弱、粘性やや強、ローム粒・塊（φ１～20㎜）10％、浮石粒（φ１㎜）１％混入
第６層	10YR5/8～6/8 黄褐色～明黄褐色ローム	締まり強、粘性強、黒褐色土塊（φ10～30㎜）が斑に10％混入
第７層	10YR2/2 黒褐色土	締まり強、粘性やや弱、ローム塊（φ30～150㎜）30％
第８層	10YR2/2 黒褐色土	締まり中、粘性中、ローム粒・塊（φ１～20㎜）10％

Ｂ区第14号溝状土坑（ＢＳＶ-14）

第１層	10YR1.7/1 黒色土	締まり弱、粘性中
第２層	10YR2/2 黒褐色土	締まり中、粘性中、浮石粒（φ２～５㎜）１％混入
第３層	10YR1.7/1 黒色土	締まり中、粘性弱、浮石粒（φ２～10㎜）２％混入
第４層	10YR2/2 黒褐色土	締まり強、粘性弱、ローム粒（φ２～20㎜）３％混入
第５層	10YR2/2 黒褐色土	締まり強、粘性弱、ローム塊（φ40～110㎜）30％混入
第６層	10YR2/3 黒褐色土	締まり中、粘性中、ローム塊（φ10～30㎜）２％、浮石粒（φ２～５㎜）２％混入
第７層	10YR2/3 黒褐色土	締まり強、粘性中
第８層	10YR1.7/1 黒色土	締まり中、粘性中

Ｂ区第15号溝状土坑（ＢＳＶ-15）

第１層	10YR2/1 黒色土	締まりやや強、粘性やや強、浮石粒（φ１～５㎜）２％混入
第２層	10YR3/2 黒褐色土	締まり中、粘性中、浮石粒（φ１～40㎜）10％混入
第３層	10YR2/2 黒褐色土	締まりやや弱、粘性中、浮石粒・塊（φ１～60㎜）30％混入
第４層	10YR6/8 明黄褐色浮石	締まり弱、粘性弱、黒褐色土塊（φ10～60㎜）30％
第５層	10YR3/2 黒褐色土	締まり弱、粘性弱、浮石粒（φ１～２㎜）20％混入
第６層	10YR6/8 明黄褐色ローム	締まり強、粘性弱、黒褐色土塊（φ10～30㎜）５％
第７層	10YR2/2 黒褐色土	締まりやや弱、粘性中、ローム粒・塊（φ１～30㎜）５％混入
第８層	10YR6/8 明黄褐色ローム	締まり弱、粘性やや強、黒褐色土粒（φ１㎜）１％
第９層	10YR3/2 黒褐色土	締まりやや強、粘性やや強、ローム粒（φ１㎜）斑に40％混入

図16　溝状土坑（３）

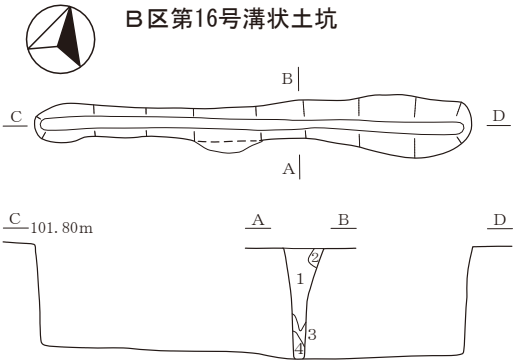
［形態・規模］開口部の形状は歪な葉巻形で、大きさは長軸が約3.1m、短軸の幅は最大70㎝である。底面の長軸は約３m、短軸幅は最大で20㎝弱である。長軸方向の断面形はほぼ箱形であるが、中位で緩く折れる。短軸断面は不整なＶ字状である。検出面からの深さは約1.4mで、底面はほぼ平坦で、中央に向かい緩やかに湾曲している。長軸方向はＮ－64°－Ｅである。
［堆積土］自然堆積で８層に分けられる。第１～３層までは黒色土を主体にした層で、第４層以下は壁の崩落したブロックないしはそれと流入した黒色土の混合土である。
［時期］出土遺物はなく時期不明であるが、縄文時代と思われる。

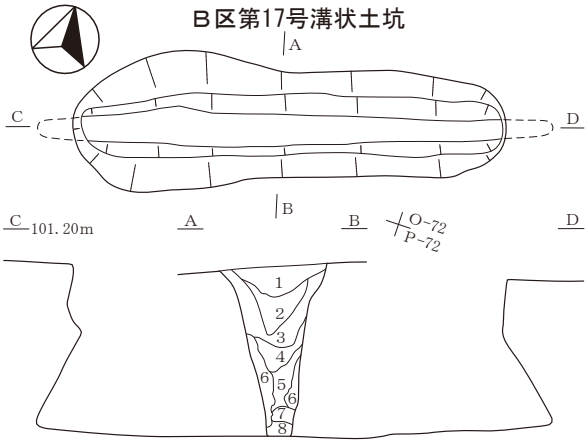
Ｂ区第14号溝状土坑（ＢＳＶ－14）（図16）
［位置・確認］調査区南側境界のＵ－61・62グリッドに位置し、標高約101.5mの第Ⅳ層面で検出した。
［形態・規模］一部調査区の外に出るが、形状は歪な葉巻形である。開口部の大きさは長軸が約3.8m、短軸の幅は最大80㎝である。底面の長軸は約3.6m、短軸幅は12㎝～ 25㎝で両端部がやや膨らむ。長軸方向の断面形は外側にやや開く箱形で、短軸断面はＶ字状である。検出面からの深さは約1.2mで、底面は平坦である。長軸方向はＮ－83°－Ｅである。
［堆積土］自然堆積で８層に分けられる。第２層以下には黄褐色のブロックおよび細粒が混入する。
［時期］出土遺物はなく時期不明であるが、縄文時代と思われる。

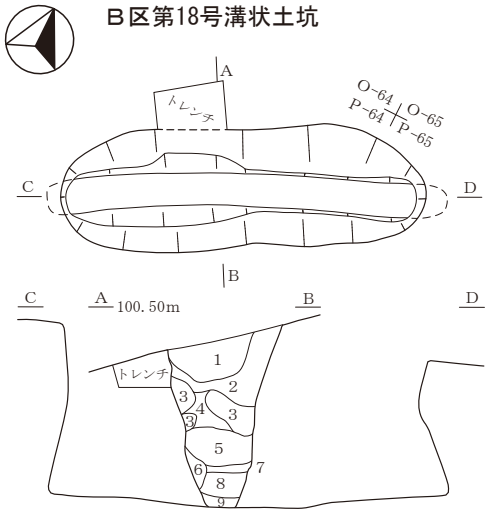
Ｂ区第15号溝状土坑（ＢＳＶ－15）（図16）
［位置・確認］Ｑ・Ｐ－69グリッドに位置し、標高約101.5m地点の第Ⅳ層面で検出した。
［形態・規模］開口部の形状は葉巻形で、大きさは長軸が約3.5m、短軸の幅は最大で約70㎝である。底面の長軸は約3.6m、短軸幅は最大で25㎝である。長軸方向の断面形は、中位で屈曲するフラスコ状である。短軸断面は不整なＵ字状である。検出面からの深さは約１mである。底面はほぼ平坦で、中央部から北側が10㎝程の深さで一段低く掘られている。長軸方向はＮ－12°－Ｅである。
［堆積土］自然堆積で９層に分けられる。第４・６・８層は壁となる第Ⅵ～Ⅷ層の崩落土である。
［時期］出土遺物はなく時期不明であるが、縄文時代と思われる。

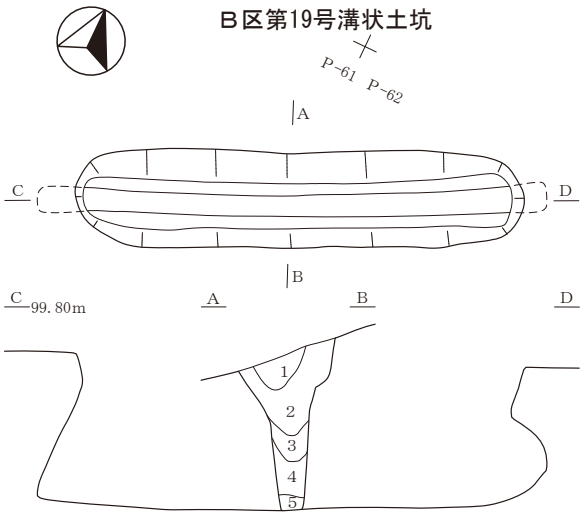
Ｂ区第16号溝状土坑（ＢＳＶ－16）（図17）
［位置・確認］Ｓ－72・73グリッドに位置し、標高約101.7m地点の第Ⅳ層面で検出した。
［形態・規模］開口部の形状は歪んだ棒状で、大きさは長軸が約3.5m、短軸幅は最大で約50㎝である。底面の長軸は約3.4m、短軸幅は８㎝～ 10㎝である。長軸方向の断面形はやや開く箱形で、短軸断面はＶ字状である。検出面からの深さは約90㎝で、底面は平坦である。長軸方向はＮ－72°－Ｅである。
［堆積土］自然堆積で４層に分けられる。すべて黒色土が流入したものである。
［時期］出土遺物はなく時期不明であるが、縄文時代と思われる。

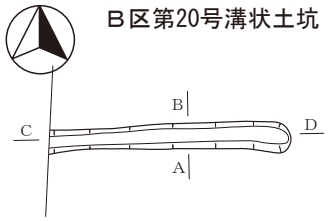
Ｂ区第17号溝状土坑（ＢＳＶ－17）（図17）
［位置・確認］Ｏ－71・72グリッドに位置し、標高約101m地点のほぼ第Ⅴ層面で検出した。
［形態・規模］開口部の形状は歪んだ葉巻形で、大きさは長軸が約3.5m、短軸幅は最大で1.1mある。

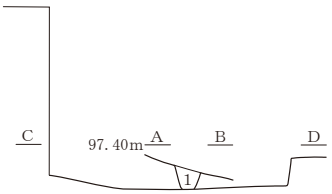












Ｂ区第16号溝状土坑（ＢＳＶ-16）

第１層	10YR1.7/1	黒色土	粘性弱、浮石粒（φ２～５㎜）２％混入
第２層	10YR1.7/1	黒色土	粘性弱、ローム塊（φ35㎜）20％混入
第３層	10YR2/2	黒褐色土	粘性弱、浮石粒（φ５～10㎜）３％混入
第４層	10YR1.7/1	黒色土	粘性中、浮石粒（φ３～10㎜）２％混入

Ｂ区第17号溝状土坑（ＢＳＶ-17）

第１層	10YR2/2	黒褐色土	締まり強、粘性中、中撰浮石粒、浮石粒（φ１～３㎜）１％混入
第２層	10YR2/2	黒褐色土	締まり中、粘性中、浮石粒（φ１～３㎜）１％
第３層	10YR2/2～3/3	黒褐色～暗褐色土	締まりやや強、粘性中、浮石粒（φ１～５㎜）５％混入
第４層	10YR2/2	黒褐色土	締まり中、粘性中、ローム塊（φ10～40㎜）20％、浮石粒（φ１～10㎜）３％混入
第５層	10YR2/2	黒褐色土	締まりやや弱、粘性やや弱、浮石粒（φ１～30㎜）５％混入
第６層	10YR5/6	黄褐色ローム	締まり強、粘性中、浮石粒（φ１～５㎜）20％黒色土混入、層下部に明黄褐色粘質土塊（φ50㎜）混入
第７層	10YR2/2	黒褐色土	締まりやや弱、粘性中、浮石粒（φ１㎜）１％
第８層	10YR2/2	黒褐色土	締まり強、粘性中、ローム粒（φ１～10㎜）５％、浮石粒（φ１㎜）１％混入

Ｂ区第18号溝状土坑（ＢＳＶ-18）

第１層	10YR2/3	黒褐色土	締まり強、粘性弱、浮石粒（φ２～５㎜）１％
第２層	10YR2/2	黒褐色土	締まり中、粘性弱、浮石粒（φ５～20㎜）３％、壁際に黄褐色土が縦位の帯状に５％混入
第３層	10YR5/6～5/8	黄褐色ローム塊	締まり強、粘性弱、根撹乱による黒色～黒褐色～褐色土混入
第４層	10YR1.7/1	黒色土	締まり強、粘性弱、ローム塊（φ20～70㎜）10％浮石粒（φ２～５㎜）２％混入
第５層	10YR2/2	黒褐色土	締まり強、粘性弱、ローム塊（φ10～20㎜）３％浮石粒（φ２～５㎜）２％混入
第６層	10YR7/6	明黄褐色ローム	締まり強、粘性中、黒褐色土５％混入
第７層	10YR2/2	黒褐色土	締まり強、粘性弱、ローム塊（φ40～50㎜）２％浮石粒（φ２～５㎜）１％混入
第８層	10YR5/6	黄褐色ローム	締まり強、粘性中、ローム塊（φ30～50㎜）１％層下部に黒褐色土が帯状に５％混入
第９層	10YR6/8	明黄褐色ローム	締まり中、粘性弱

Ｂ区第19号溝状土坑（ＢＳＶ-19）

第１層	10YR2/1	黒色土	締まりやや強、粘性弱、浮石粒（φ１～５㎜）２％混入
第２層	10YR2/3	黒褐色土	締まり中、粘性中、黒褐色土との混合、ローム粒（φ１～５㎜）３％、浮石粒（φ１～15㎜）10％混入
第３層	10YR2/3	黒褐色土	締まり弱、粘性弱、ローム塊（φ10～20㎜）30％浮石粒（φ１～10㎜）１％混入
第４層	10YR5/6	黄褐色ローム	締まり弱、粘性弱、浮石粒（φ１～３㎜）10％、八戸火山灰塊・高舘火山灰塊（φ15㎜）10％、層下部に黒色土塊（φ50㎜）５％混入
第５層	10YR2/3	黒褐色土	締まり弱、粘性中、浮石粒（φ１～８㎜）７％

Ｂ区第20号溝状土坑（ＢＳＶ-20）

第１層	10YR2/1	黒色土	締まり弱、粘性弱、浮石粒（φ１～２㎜）２％

図17　溝状土坑（４）

底面の長軸は約4.1m、短軸幅は15㎝～ 30㎝である。長軸方向の断面形は、中位で屈曲し両端部が大きくオーバーハングするフラスコ状である。短軸断面はＶ字状である。検出面からの深さは約1.4mであり、底面はほぼ平坦である。長軸方向はＮ－71°－Ｅである。
［堆積土］自然堆積で８層に分けられる。黒色土と褐色土を主体にし第６層は壁の崩落土である。
［時期］出土遺物はなく時期不明であるが、縄文時代と思われる。

Ｂ区第18号溝状土坑（ＢＳＶ－18）（図17）
［位置・確認］Ｐ－64グリッドに位置し、斜面落ち際の標高約101ｍ地点で第Ⅳ層面で検出した。
［形態・規模］開口部の形状は長楕円形で、大きさは長軸が約2.9m、短軸幅は最大で１ｍある。底面の長軸は約3.2m、短軸幅は最大で25㎝ある。長軸方向の断面形は、中位で屈曲し両端部がオーバーハングするフラスコ状である。短軸断面は不整なＶ字状である。検出面からの深さは約1.4mあり、底面は平坦で中央部がやや深い。長軸方向はＮ－63°－Ｅである。
［堆積土］自然堆積で９層に分けられる。第３・６・８層は壁の崩落土（第Ⅵ～Ⅷ層）である。
［時期］出土遺物はなく時期不明であるが、縄文時代と思われる。

Ｂ区第19号溝状土坑（ＢＳＶ－19）（図17）
［位置・確認］Ｐ－61・62グリッドに位置し、斜面落ち際の標高約99.5ｍ地点の第Ⅳ層面で検出した。
［形態・規模］開口部の形状は葉巻形で、大きさは長軸が約3.6m、短軸幅は最大で80㎝ある。底面の長軸は約4.1m、短軸幅は15㎝～ 25㎝で両端部が膨らむ。長軸方向の断面形は、上位および中位で屈曲しオーバーハングするフラスコ状で、東側は袋状となる。短軸断面はＹ字状である。検出面からの深さは約1.3mあり、底面はほぼ平坦である。長軸方向はＮ－65°－Ｅである。
［堆積土］自然堆積で５層に分けられる。第３層は壁となる第Ⅳ層ないしは第Ⅴ層のブロックが混合したもので、第４層は第Ⅵ～Ⅷ層の崩落土である。
［時期］出土遺物はなく時期不明であるが、縄文時代と思われる。

Ｂ区第20号溝状土坑（ＢＳＶ－20）（図17）
［位置・確認］Ｎ－64グリッドに位置する。急斜面に拡げたトレンチで検出したが、粗掘り作業中には気づかず、第Ⅳ層面まで下げてから黒色土のスリット状プランで確認された。
［形態・規模］急斜面での検出であり全体形を確認することはしなかったが、検出した部分の長さで約1.9mあり、短軸幅は約20㎝ある。長軸方向はほぼＷ－０°Ｅである。
［堆積土］黒色土の単一層で、トレンチ壁面を見ても自然堆積層と遺構覆土の判別ができなかった。
［時期］出土遺物はなく時期不明であるが、縄文時代と思われる。　（小田川）

第３節　野外炉（図18）

調査区西側斜面部の遺物包含層内から１基検出した。
［位置・確認］標高約97ｍの小川に近接した斜面地につくられており、Ｕ－36グリッドに位置する。遺物包含層中の第Ⅳ層面で検出されたことから、竪穴住居跡の存在も考慮したが、周辺に住居の柱穴

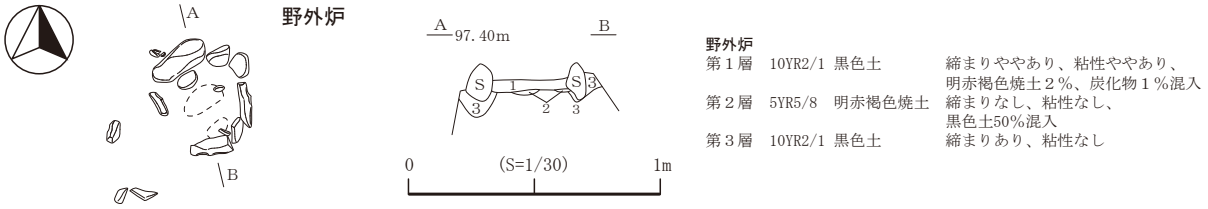


図18　野外炉

などが検出されなかったことから野外炉とした。

［形態・規模］炉は石囲炉で、大きさが10cm～ 25cmの扁平な礫を40cm×50cmの範囲で「コ」の字状に配置している。西側の斜面下方が空いた状態での検出であり、周辺に礫も散らばっていたことから、掘り方は確認できなかったが方形に囲われていた可能性もある。

［焼土］石囲いの中心部には楕円形の焼成面が確認されたが、焼成層は薄く、また礫面の被熱痕跡も弱いことから使用頻度は低かったものと思われる。

［出土遺物］石囲いの内から４点の土器破片が出土した。このうちの底部１点が周辺の土器と接合した。すべて斜縄文が施文されている。

［時期］炉内出土土器から縄文時代中期頃のものと思われるが、断定できない。

第４節　集石遺構　（図19）

集石遺構としたものは６基あり、すべて調査区西側の遺物包含層の範囲内で検出した。遺物包含層からは土器と石器のほか多量の礫が出土しているが、そのなかでも特に集合状態にあるものを認定した。これらには形状を意識して配置されている様子は見受けられず、集石の下にも土坑等の遺構は検出されなかった。すべて被熱した自然礫と破砕した礫片であるが、集石の周囲の土壌が焼成を受けた痕跡は確認できなく炭化物も顕著ではなかったが、焼土跡と関連があった可能性もある。これらの内、第２号集石遺構以外の帰属時期は特定できない。

第１号集石遺構　（図19）

［位置と層位］W－36グリッドに位置し、遺物包含層の第Ⅱ層相当中から検出した。

［礫の状況と範囲］20cm弱～ 30cm位の角礫が８個ほど、60cm×70cmの範囲に置かれ、その内側を主に 10cm未満の破砕片が散在する。

第２号集石遺構　（図19）

［位置と層位］W－31グリッドに位置し、遺物包含層の第Ⅳ層のほぼ直上から検出した。

［礫の状況と範囲］30cmを超える２つの被熱礫を中心に、80cm程の範囲に破砕片と土器片が散在する。

［時期］台石（図42－137）の脇から同一レベルで出土している長七谷地Ⅲ群土器から、縄文時代前期初頭の可能性がある。

第３号集石遺構　（図19）

［位置と層位］W－35グリッドに位置し、遺物包含層の第Ⅱ層相当中から検出した。

［礫の状況と範囲］20cm位の２つの被熱礫をはさみ、約1.1m×1.5mの範囲に破砕片が散在する。

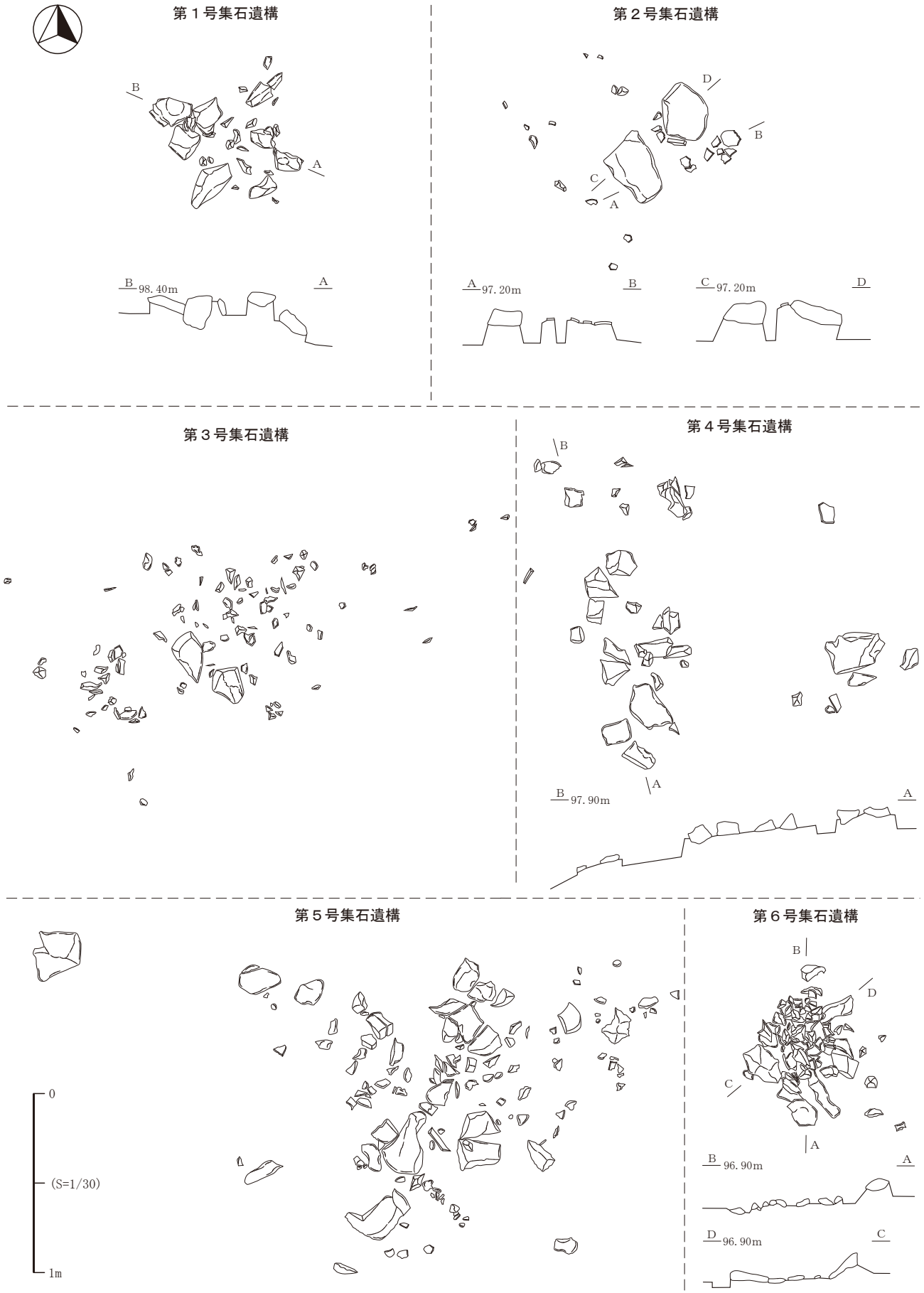

第１号集石遺構
B
A
B 98.40m
A
第２号集石遺構
D
B
C
A
A 97.20m
B
C 97.20m
D
第３号集石遺構
第４号集石遺構
B
A
B 97.90m
A
第５号集石遺構
0
(S=1/30)
1m
第６号集石遺構
B
D
C
A
B 96.90m
A
D 96.90m
C

図19　集石遺構

第４号集石遺構　(図19)

[位置と層位] Ｕ－37グリッドに位置し、遺物包含層のほぼ第Ⅳ層直上から検出した。

[礫の状況と範囲] 被熱した15cm～ 25cm位の角礫が十数個､同一レベルで約60cm×1.7ｍの範囲にあり、東側に約１ｍ程離れて同一石材と思われる30cmを超える被熱礫がある。他に比べて破砕片は少ない。

第５号集石遺構　(図19)

[位置と層位] Ｘ－37グリッドに位置し、遺物包含層の第Ⅱ～Ⅲ層にかけて検出した。

[礫の状況と範囲] 同一石材の破砕した角礫が、約２ｍの範囲に集中する。礫の大きさは20cmを超えるものが多く、被熱による破砕はもとより、意図的に破壊され捨てられた可能性も考えられる。

第６号集石遺構　(図19)

[位置と層位] Ｗ－30グリッドに位置し、遺物包含層の第Ⅳ層直上から検出した。

[礫の状況と範囲] 15cm～最大25cm程の礫が７～９個ほど約60cm×70cmの範囲に置かれ、その上に多数の礫および破砕片がまとめられてる。礫はすべて強く被熱しており､おそらく同一石材と思われる。

(小田川)

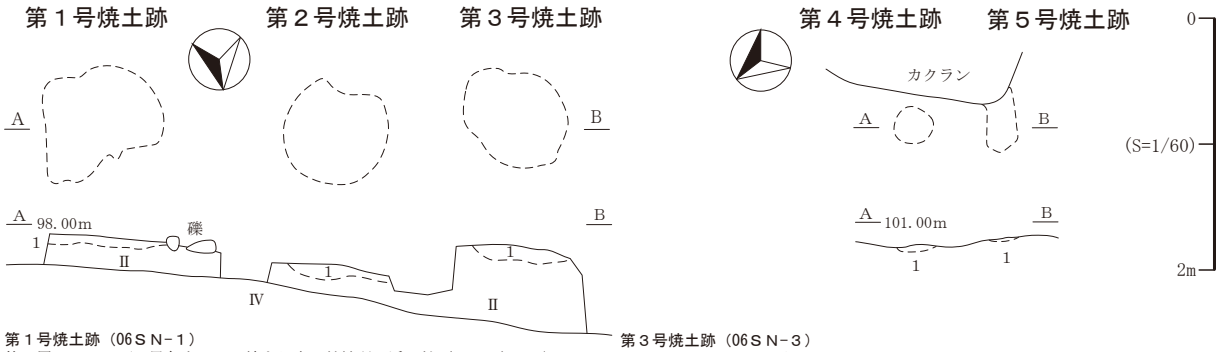
第５節　焼土跡　(ＳＮ－１～５)(図20)

本調査では５基が検出されている。以下にまとめて記述し、個々の規模等については別表に示す。

[検出位置と層位] 各焼土のうち第１～３号までの３基は、調査区西側斜面部のＸ－34・35グリッドに位置し、遺物包含層の第Ⅱ層相当中から並んで検出されている。第４・５号は調査区東側の産業廃棄物集積地のＳ－80グリッドに位置し、第Ⅲ層面から検出している。

[規模形状と焼成層] 周辺の土壌とは異なる赤色に変色した範囲を捉えた。第１～３号は赤褐色でブロック状の焼土が斑に拡がるもので、第４・５号は地面が赤色に変化したものである。範囲の形状は不整形および不整楕円形・円形があり、規模は、第１号の約100cm×70cm不整形を最大に、最小は第４号の約30cm径の円形である。焼成層の色調は橙色～明褐色で、第４・５号はレンズ状の焼成層であり、焚き火の痕跡が直に遺存しているものと判断されるが、第１～３号は焼土塊が斑に周囲の土壌にくい込んだ状態にあり、二次的な痕跡の可能性が高い。

[出土遺物と時期] 各焼土に直接伴う出土遺物はなく時期は不明である。　(平山)



第１号焼土跡（06ＳＮ-１）
第１層　10YR1.7/1 黒色土　締まり中、粘性弱、浮石粒（φ１㎜）１%、焼土粒・塊（φ１～40㎜）10%混入

第２号焼土跡（06ＳＮ-２）
第１層　10YR1.7/1 黒色土　締まり中、粘性弱、浮石粒（φ１～10㎜）３%、焼土粒・塊（φ１～20㎜）10%混入

第３号焼土跡（06ＳＮ-３）
第１層　10YR2/1　黒色土　締まり中、粘性弱、焼土粒・塊(φ１～70㎜)30%

第４号焼土跡（07ＳＮ-３）
第１層　7.5YR5/8　明褐色焼土　締まり強、粘性弱、にぶい黄褐色土２%

第５号焼土跡（07ＳＮ-２）
第１層　５YR6/6　橙色焼土　締まり強、粘性弱

図20　焼土跡

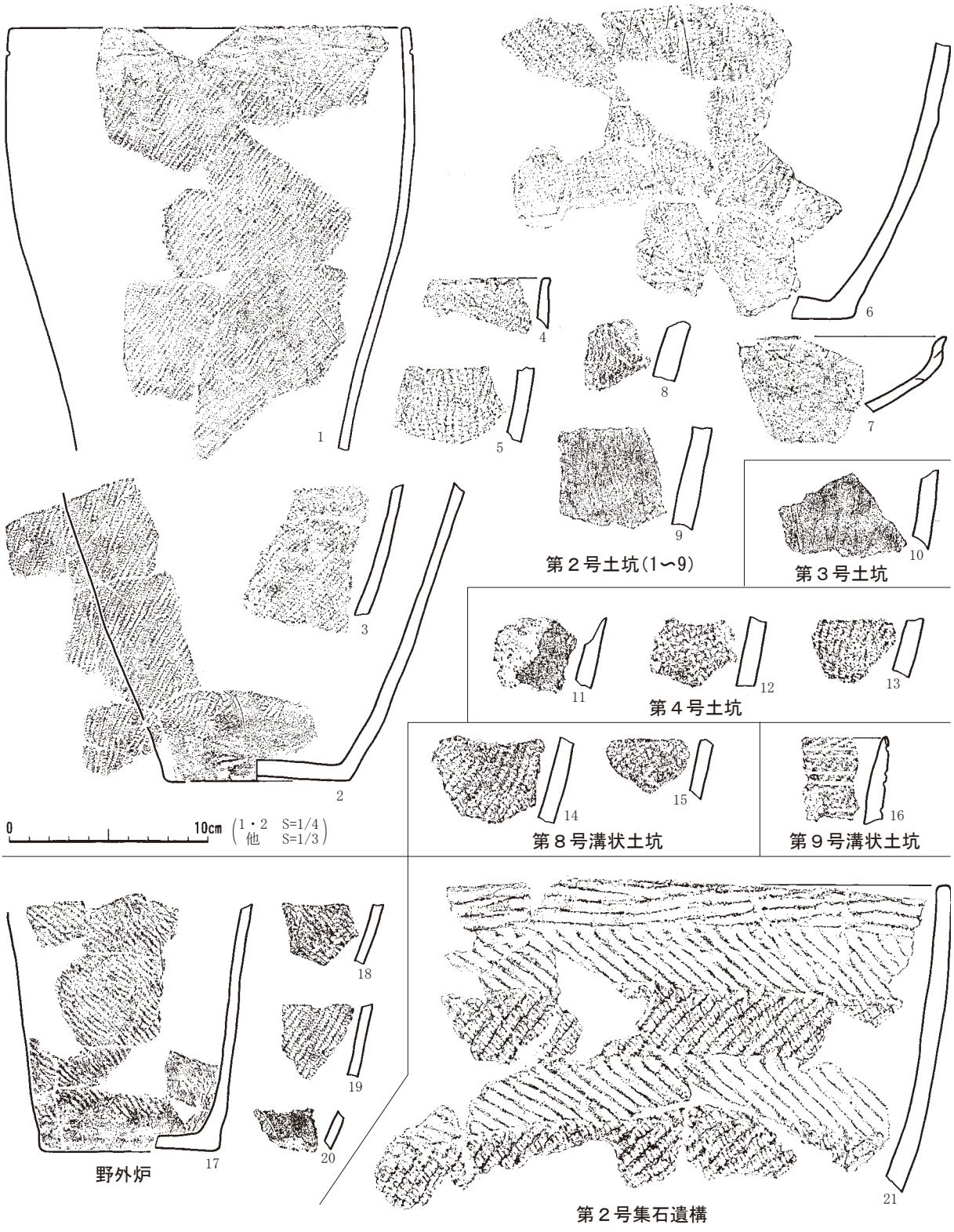


図21　横沢山（１）遺跡遺構内出土遺物

焼土跡一覧

遺構名	グリッド	平面形	検出面	長軸(cm)	短軸(cm)	厚さ(cm)	備　考	年代
第１号焼土跡	Ｘ－３５	不整形	第Ⅱ層	102	68	12	焼土はブロック状	不明
第２号焼土跡	Ｘ－３５	不整円形	第Ⅱ層	83	72	13	焼土はブロック状	不明
第３号焼土跡	Ｘ－３４	不整楕円形	第Ⅱ層	88	67	17	焼土はブロック状	不明
第４号焼土跡	Ｓ－８０	円形	第Ⅲ層	32	30	6	焼成層はレンズ状	不明
第５号焼土跡	Ｓ－８０	不整形	第Ⅲ層	42	24	3	攪乱を受けている･焼成層はレンズ状	不明

第６節　炭窯（図22）

荒屋敷久保（１）遺跡で検出された古代の炭窯と同様な遺構を５基検出した。この内４基は、西側端部の小川に近接した低地から検出されており、遺物包含層を掘り込んで構築されている。川向かいの荒屋敷久保（１）遺跡で検出された製鉄炉に関連したものと捉えている。

第１号炭窯（図22）

［位置・確認］Ｗ・Ｘ－32・33グリッドに位置する。緩斜面地の第Ⅳ層面で検出した。

［形態・規模］隅丸長方形を基調とする。遺構の西側端部を欠くが長軸約７ｍ、短軸は約1.4ｍある。

［堆積土］黒色土の単一層で、層中に炭化材の細片を多量に混入する。

第２号炭窯（図22）

［位置・確認］Ｖ・Ｗ－32・33グリッドに位置する。緩斜面地の第Ⅳ層面で検出した。

［形態・規模］隅丸長方形を基調とする。遺構の西側端部を欠くが長軸約7.5ｍ、短軸は約1.5ｍある。底面と壁の一部に焼土が検出されている。

［堆積土］黒色土の単一層で、層の底面付近に炭化材の細片を多量に混入する。

第３号炭窯（図22）

［位置・確認］Ｕ・Ｖ－31 ～ 33グリッドまで位置し、小川に近接している。第Ⅳ層面で検出した。

［形態・規模］隅丸長方形で、長軸約10.5ｍ、短軸は約1.6ｍである。精査中に底面から水が染みだすほどの地点にあり、焼成作業の機能からみて不適当地と思われるが、貼り床を施し構築されている。

［堆積土］黒色土を主体とする層で、第３層には炭化材の細片を多量に混入する。第４層は粘土を主にした貼り床土である。

第４号炭窯（図22）

［位置・確認］Ｘ－31グリッドに位置し、第２号土坑と重複し本遺構が新しい。第Ⅳ層面で検出した。

［形態・規模］隅丸長方形で一部調査区外に伸びる。検出した部分で、長軸約４ｍ、短軸は最大で85㎝ある。検出面からの深さは20㎝程であるが、調査区壁面の土層からは、少なくとも70㎝、またはそれ以上の深さがあったものと思われる。

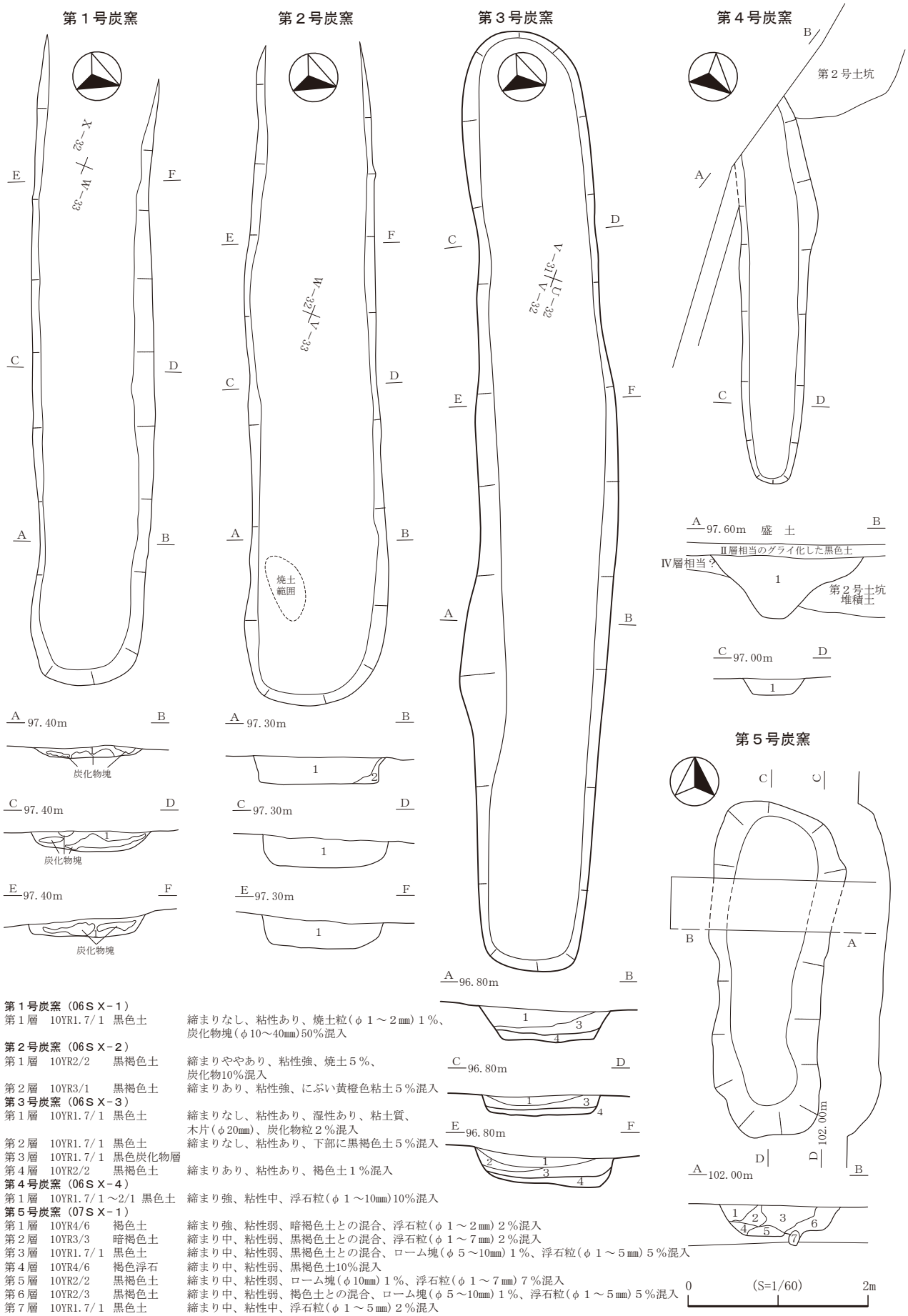
［堆積土］黒色土の単一層で炭化材の細片を混入するが、上記の３基ほど多量ではない。

第５号炭窯（図22）

［位置・確認］丘陵平坦部のＳ－65グリッドに位置し上記の４基とは離れている。規模は小さく炭化材や焼成土もないが形態的に似ることから、未使用の炭窯の可能性から含めた。しかし、土層の状態は他のものとは異なり、調査区内に掘られた植え込み痕または風倒木痕の可能性も捨てきれない。

［形態・規模］歪な隅丸長方形である。長軸約3.7ｍ、短軸は最大で約1.5ｍある。

［堆積土］軽石粒を混入する黒色土と褐色土で、ブロック状の堆積である。　（小田川）



第１号炭窯（06ＳＸ－１）
第１層　10YR1.7/1　黒色土　　締まりなし、粘性あり、焼土粒（φ１～２㎜）１％、炭化物塊（φ10～40㎜）50％混入

第２号炭窯（06ＳＸ－２）
第１層　10YR2/2　黒褐色土　　締まりややあり、粘性強、焼土５％、炭化物10％混入
第２層　10YR3/1　黒褐色土　　締まりあり、粘性強、にぶい黄橙色粘土５％混入

第３号炭窯（06ＳＸ－３）
第１層　10YR1.7/1　黒色土　　締まりなし、粘性あり、湿性あり、粘土質、木片（φ20㎜）、炭化物粒２％混入
第２層　10YR1.7/1　黒色土　　締まりなし、粘性あり、下部に黒褐色土５％混入
第３層　10YR1.7/1　黒色炭化物層
第４層　10YR2/2　黒褐色土　　締まりあり、粘性あり、褐色土１％混入

第４号炭窯（06ＳＸ－４）
第１層　10YR1.7/1～2/1 黒色土　　締まり強、粘性中、浮石粒（φ１～10㎜）10％混入

第５号炭窯（07ＳＸ－１）
第１層　10YR4/6　褐色土　　締まり強、粘性弱、暗褐色土との混合、浮石粒（φ１～２㎜）２％混入
第２層　10YR3/3　暗褐色土　　締まり中、粘性弱、黒褐色土との混合、浮石粒（φ１～７㎜）２％混入
第３層　10YR1.7/1　黒色土　　締まり中、粘性弱、黒褐色土との混合、ローム塊（φ５～10㎜）１％、浮石粒（φ１～５㎜）５％混入
第４層　10YR4/6　褐色浮石　　締まり中、粘性弱、黒褐色土10％混入
第５層　10YR2/2　黒褐色土　　締まり中、粘性弱、ローム塊（φ10㎜）１％、浮石粒（φ１～７㎜）７％混入
第６層　10YR2/3　黒褐色土　　締まり中、粘性弱、褐色土との混合、ローム塊（φ５～10㎜）１％、浮石粒（φ１～５㎜）５％混入
第７層　10YR1.7/1　黒色土　　締まり中、粘性中、浮石粒（φ１～５㎜）２％混入

図22　炭窯

第２章　出土遺物

第１節　出土土器　（図23 ～図33）

２カ年の調査で出土した土器の総数は12,750点（遺構内出土は394点）、総重量126,135ｇである。土器の時期は、縄文時代早期前葉から晩期、弥生時代前期と後期まで多時期にわたるが、早期前葉の土器を除き、その大多数は、グリッド40ラインから西側の緩斜面、Ｔ～Ｘ－30 ～ 40の範囲から出土している。第１編第４節にも記述したように、この範囲は後世の地形改変が著しく、盛土の中はもとより各時期の土器が混在して出土する地点が多数見受けられた。盛土の下には影響を受けていない遺物包含層も遺存していたが、その内でも縄文時代早期以降の遺物は混在した出土状況を示すものが多く、標高97ｍ以下の水辺縁辺での混入が特に激しい。緩斜面地で二次堆積したほか、長期にわたりこの地点が使われたことにより、遺物が移動しているものと考えられる。このため包含層を時期別に分けることはできなかった。出土土器は破片で全体形状がわかるものは少ないうえ、そのほとんどがいわゆる粗製土器の破片である。その中でも、器形と文様構成のわかる良好な資料に、県内では希な大木３式土器が出土している。包含層以外ではグリッド50 ～ 80ラインまでの平坦部からも出土しているが、出土状況は散漫で、すべてが細破片である。またＴ・Ｕ－56 ～ 65グリッドの第Ⅳｂ層から早期前葉の土器片が出土しているが、やはり細かく復元にまで至らない。以下に、各時代ごとに大別し記述する。

第Ⅰ群ー縄文時代早期の土器（図23－１～図25－98）

早期前葉の土器（１～ 38）１～ 21は魚骨回転文土器である。施文される魚骨はニシンタイプで、腹椎骨による浅い櫛歯状の条線と２個の突起の圧痕がのこる。施文される縄文はＬＲとＲＬがあり、前者の方が多い。胎土には繊維を含む。22 ～ 30は日計式押型文土器に伴う縄文土器で、魚骨回転文土器と出土層位と範囲がほぼ同じであることから共伴する可能性がある。胎土には繊維を含み、魚骨回転文土器より硬質な感じを受ける。口唇端部には斜位から削ぎ取るような刻みが施され、口縁部には、縄文施文後に数条の沈線が施されている。31・32は底部付近の破片で、丸底ないしは尖底になるものと思われる。33 ～ 38は無文の胴部と底部片である。出土層位から、早期前葉の土器群に含めた。

早期中葉の土器(39 ～ 89)39 ～ 48は物見台式土器である。沈線に沿って貝殻腹縁刺突を施すものと、沈線を主体にし一部に貝殻腹縁刺突を施すもの（44･46･47）がある。49 ～ 61は鳥木沢式土器である。貝殻腹縁刺突を横位羽状に施すもの（49 ～ 52・55・61）と、縦位に施文するものがある。（50・51・55・57･58）の内面には貝殻条痕が施されている。62 ～ 84は吹切沢式土器である。貝殻腹縁押し引き文が施文されるもの（62 ～ 71・73・74・81・82・84）と、貝殻腹縁刺突が施されるもの（72・79・80・）がある。79は鳥木沢式かもしれない。84は５㎜程に切断した貝殻を原体に用いている。83は細かい刺突文が施されるもので、75 ～ 78は無文である。85 ～ 89は底部片で、鳥木沢式および吹切沢式と思われるが、85は縦位の貝殻腹縁刺突が全体に施されており寺ノ沢式が妥当かもしれない。

早期末葉の土器（90 ～ 98）90 ～ 98は早稲田５類に相当する土器である。０段多条を施文するものが多く、90 ～ 92の口縁には縄の側面圧痕が施されている。94 ～ 97は表裏面に同一原体で施文されるものである。98は単軸絡条体第１類の施文である。

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
0
10cm
S=1/3

図23　出土土器（１）

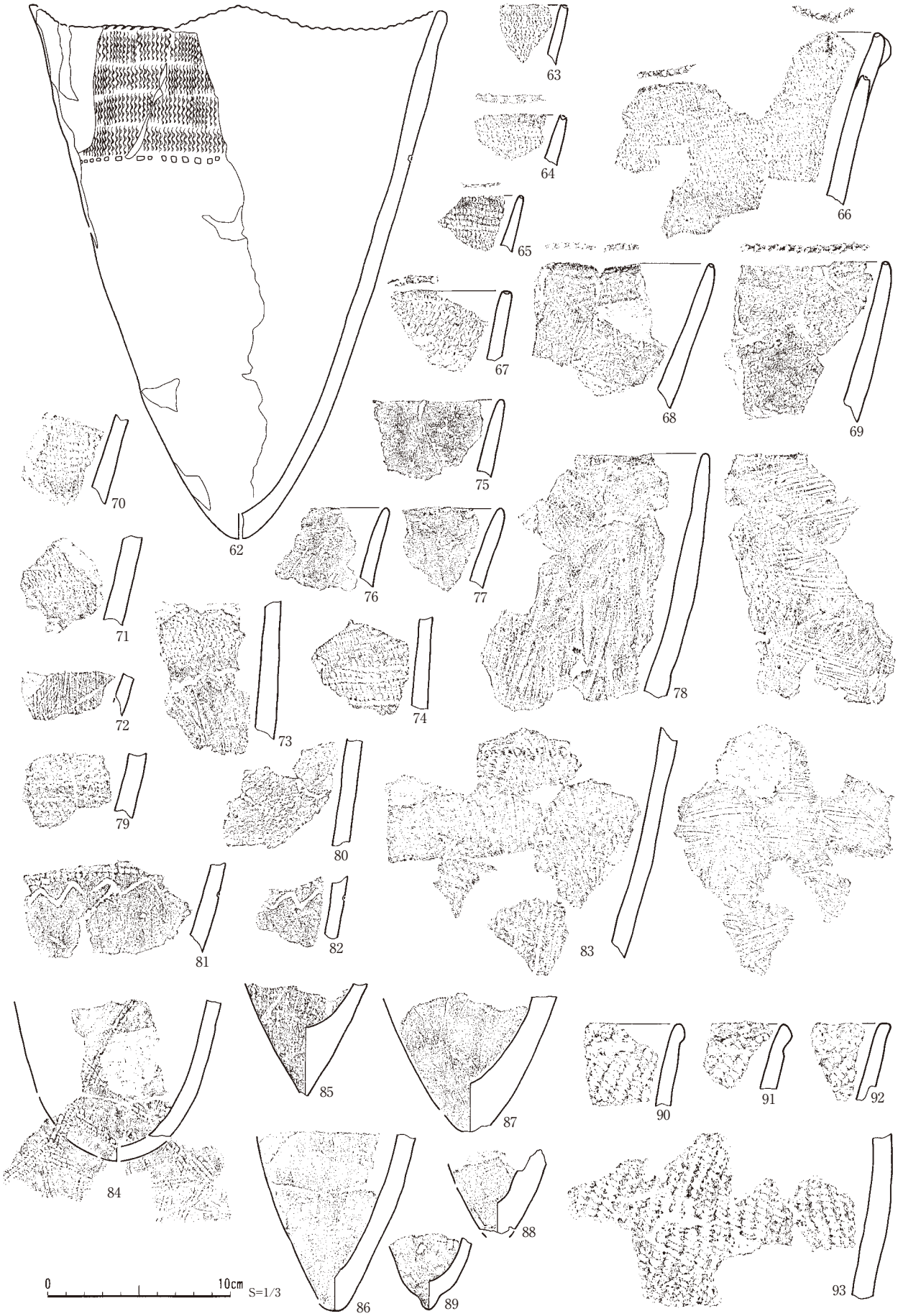

62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
0
10cm
S=1/3

図24　出土土器（２）

94
95
96
98
97
99
100
101
102
103
104
105
106
111
113
107
109
110
112
S=1/3
0
10cm
108
115
114
116
127
117
118
121
128
122
119
120
123
124
125
126

図25　出土土器（３）

第Ⅱ群－縄文時代前期の土器（図25－99 ～図28－153）

前期初頭の土器（99 ～ 113）100は長七谷地Ⅲ群土器で、第２号集石遺構出土土器と同一個体である。口縁部文様帯に節のない横走縄文？が、その下に節のない縄文とＬＲ縄文が羽状に施文される。口縁部の横走縄文と羽状縄文の片方は、条は明瞭であるが節は圧痕として表出されていない。条間の稜をみると、わずかだが節らしき痕跡も見受けられるが確定できない。節を磨り消しているともいわれるが、その痕跡も明瞭に見られずこの原体については不明である。99・101 ～ 109は和野前山第８群Ｅ類・楢館第Ⅱ群１類に相当する土器である。斜縄文が施文されるもので、口唇端部は平坦に面取りされるものが多い。胎土に繊維を含み、質感は堅く緻密である。101･103･105は組縄が施文される。110 ～ 112は組紐が施文されるもので大木１式に相当するものであろうか。113は無節が施文される。

前期前葉の土器（114 ～ 136）114 ～ 136は大木２式に相当する土器である。波状口縁のもの（115･116）と、平口縁のもの（114・117 ～ 120・129 ～ 131）があり、口端が平坦に面取りされているものが多い。また､平坦な口端に縁取るように浅い沈線が施されるもの（114 ～ 116･119）がある。文様は、口唇外面に刻みが施され（114 ～ 118）、口縁部文様帯には単軸絡条体第３類の所謂葺瓦状撚糸文が施文される。胴部には､組紐が施文されるもの（114･124）と､斜縄文と結節回転文が施文されるもの（121･125・126）がある。122は緩い波状口縁で波頂部に刺突をもち、ＬＲ縄文と結節回転文が全面に施文されている。125・126はＲＬ縄文に結節回転文が施文される。128は単軸絡条体第１類が施される小型土器で、大木２式に併行するものとして含めた。129 ～ 132は節のない単軸絡条体第５類所謂網目状撚糸文が施文されるもので、球胴形の器形となる。133・134は胴部に組紐が施文され、その下に山形状沈線が施されている。

前期中葉の土器（137 ～ 153）137 ～ 141・151は大木３式土器である。137・138は比較的太い沈線で弧状文と思われる文様が施されている。139と140は同一個体で、鋸歯状沈線文が二重に施されている。141は細い沈線で、鋸歯状文と曲線文が施されている。151- ａ～ｃは同一個体ある。遺物包含層のＷ－38・39グリッドから写真13－中に示したようにまとまって出土しているほか、水辺のＴ－35グリッドや盛土中からも同一破片が出土している。接合復元がうまくできなかったため、各接合破片を分けて掲載した。胎土は堅く緻密で繊維は含まない。大きさは、口径が約41㎝で、底部は欠くが、推定で約45㎝程の器高があったものと思われる。器形は、口縁がラッパ口状に大きく開き、胴部上半部は緩やかにくびれて胴部中位が張る、特徴的な形である。平口縁で口唇は丸く成形されており、二ヶ一対の突起が貼り付けられている。この突起の頂部と内面側には刺突が施されているほか、二ヶ一対の突起に挟まれた口唇端部にも刺突が施されている。復元の不備から、二ヶ一対の突起と口端部刺突の単位を明確にできないが、３単位の可能性がある。地文には、太い縄と細い縄のＬＲ縄文が施文されているが、胴部下半から底部にかけては施文されていない。口縁部文様帯は無文で刺突列で区画され、刺突列は斜め上方から施されている。さらに、刺突列の上方には、竹管による円形刺突と先の尖った棒状工具による刺突が、一部分だけに付けられている。主文様となる頸部文様帯には、２条の横位平行沈線がめぐらされ、下位の沈線からさらに平行および直行する沈線でクランク状の文様を描いている。クランク状文様の下端には、竹管による円形刺突が施され、さらに円形刺突の内に尖った棒状工具による刺突が付けられている。牧田貝塚出土土器に類似した文様モチーフが見られる。142 ～ 147は大木４式に相当する土器である。142 ～ 144・146は同一個体で底部を欠く。口縁部は外反し頸

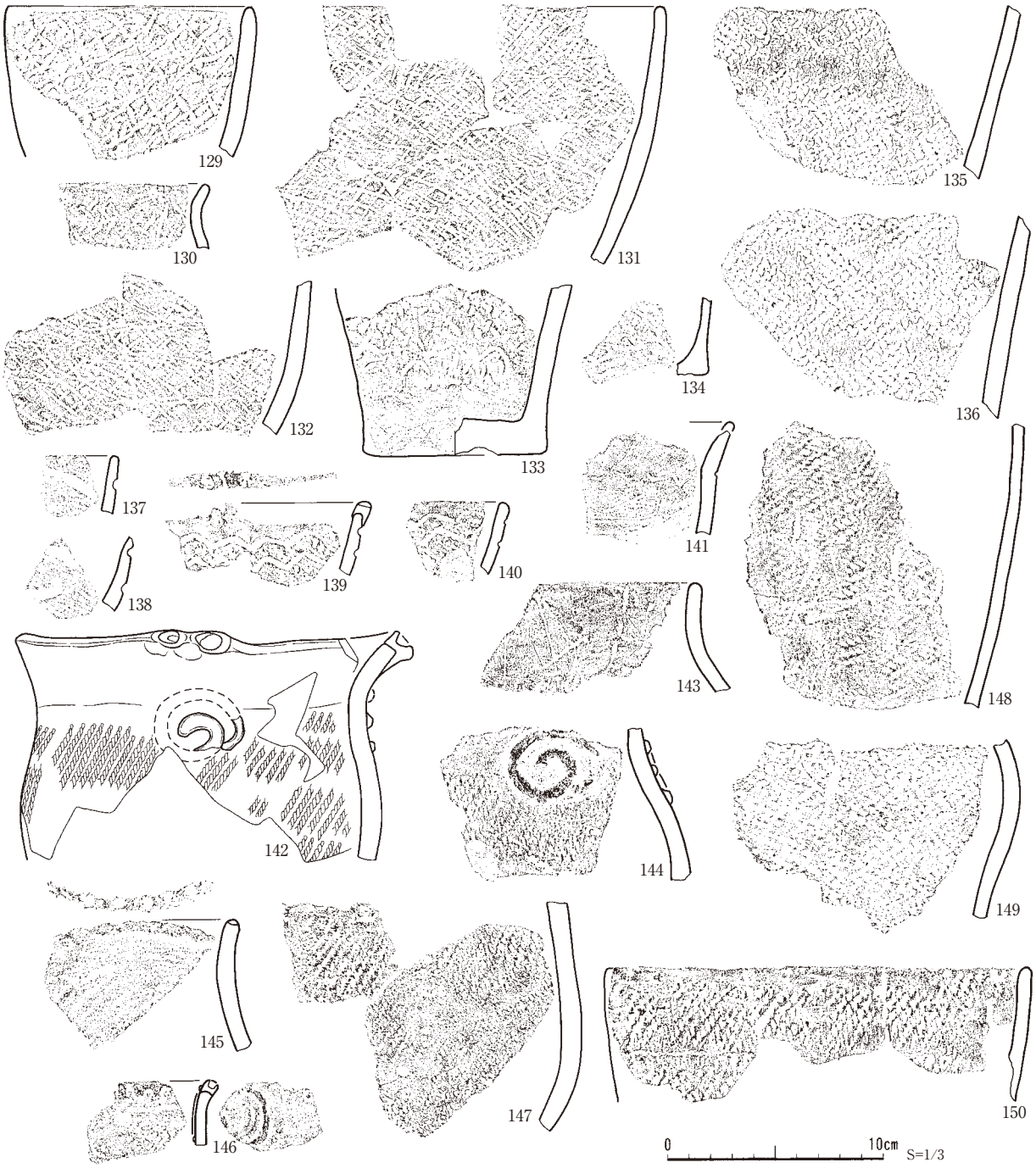


図26　出土土器（４）

部がくびれ胴部が張る、金魚鉢形の器形になると思われる。平口縁で口唇は外傾ぎみに成形されており、口端の一カ所に粘土を貼り付けてさらに刺突を加えた装飾を施している。口縁部は無文で、頸部には渦巻き状の隆帯を施している。地文にはＬＲ縄文が施される。147は小型の土器で、口端に粘土を貼り付けてさらに竹管による刺突を３つ施している。内面には剥落しているが渦巻き状の隆帯を施している。地文縄文はＲＬである。148 ～ 150は胎土と器形および施文文様から、大木３～４式土器に含めた。149は組紐縄文が施文されるもので、大木２式の可能性もあるが器形から本類に含めた。152・153は胎土に繊維を含む土器で、型式不明だが縄文前期に帰属するものと思われる。

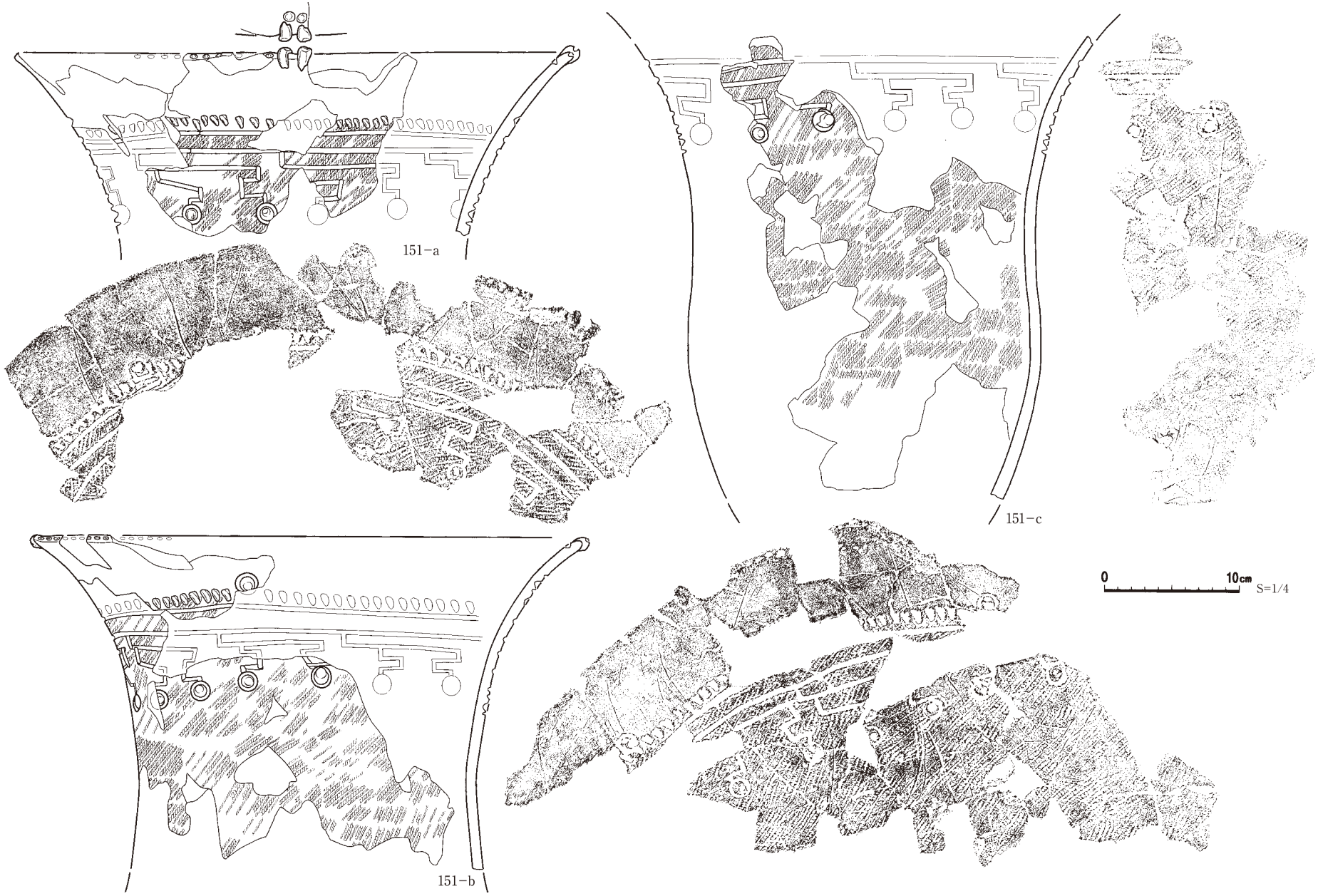


図27　出土土器（５）

第Ⅲ群－縄文時代中期の土器（図28－154 ～図29－174）

中期前葉の土器（154 ～ 160）154は円筒上層ａ式土器である。平口縁で口唇部に連続する隆帯をめぐらし、頸部の隆帯で区画され口頸部文様帯内には撚糸圧痕が施される。155は円筒上層ｂ式土器である。大型の山形状口縁で、垂下する隆帯に区画される口頸部文様帯内に馬蹄形の撚糸圧痕が施される。156は円筒上層ｃ式土器である。口頸部文様帯内に弧状の隆帯を配し、内部に縄の側面圧痕が施されるほか、頸部隆帯の上方に円形刺突が施文されている。

中期中葉の土器（161 ～ 170）161は円筒上層ｄ式ないしはｅ式である。波状口縁で、波状部に弧状とそこから垂下する隆帯を施している。地文に結束第２種の羽状縄文を施文している。162 ～ 168は横位や縦位の沈線文が施される円筒上層ｅ式の破片である。169・170は同一個体で大木式的な感じを受ける。口唇に２条の縄の側面圧痕、口縁部文様に波状の沈線文と曲線文が施される。

中期末葉の土器（171 ～ 174）大木10式に併行する土器と思われる。171は沈線による楕円形文内に縄文が充填施文される。173は磨り消し縄文である。174は内面に鰭状突起が施されている。

第Ⅳ群－縄文時代後期の土器（図29－175 ～図30－189）

後期初頭の土器（175 ～ 187）牛ヶ沢式土器・仮称韮窪式に相当する土器である。175は口縁部無文帯、頸部に縄の側面圧痕が施される。176・177は波状口縁を呈し、口縁部文様帯を縦位の隆帯で区画するものである。181・182は同一個体で、波状口縁の波頂部下に断面三角形状の隆帯（線）による渦巻き文が貼付され､胴部は縦位２条の隆帯（線）を横位の短い隆帯で連結している。さらに隆帯（線）から横位の平行沈線と二重の弧状沈線を施し、その中にＬＲ縄文を充填施文している。183は底部付近に隆帯をめぐらしている。184 ～ 187は同一個体である。平口縁で無文の口縁部は、胴部まで垂下する縦位隆帯で区画されている。縦位隆帯で区画された胴部には沈線で弧状文と波頭文が施され、ＲＬ縄文が充填施文されている。

後期前葉の土器（188・189）十腰内Ⅰ式に相当する土器である。188は緩い波状口縁で沈線で円形文および曲線文が施される。189は単軸絡条体第５類が施された底部で、大型の土器である。

第Ⅴ群－縄文時代晩期の土器（図30－190 ～ 193・図31－214）

晩期中葉の土器（190・191）190は大洞Ｃ2式に相当する台付鉢でほぼ完形で出土した。口唇が内側にほぼ直角に折れる器形で沈線と刺突が施され、口縁には入組み文とＬＲ磨消縄文が施されている。191は無文の鉢形土器で、口唇に装飾突起が付けられる。大洞Ｃ1・Ｃ2式に相当するものと思われる。

晩期末葉の土器（192・193・214）大洞Ａ・Ａ'式に相当土器である。193は変形工字文が施されるもので、台付き鉢の可能性がある。214は壺形土器の頸部で、沈線と刺突が施されている。

第Ⅵ群－弥生時代の土器（図30－194 ～図31－229）

前期の土器（194 ～ 213）194 ～ 213は砂沢式ないしは後続する土器である。台付き鉢（194 ～ 199・203）と、鉢形土器（204 ～ 212）、壺形土器（213）がある。深鉢形土器は第Ⅶ群に示した。工字文が施文されるもの（194・205・206・208）と、変形工字文のもの（195・196・198）、平行沈線のもの（197・199 ～ 204・207・209 ～ 212）がある。199は大型の台部で赤彩の痕跡が残る。213は大型の広口壺である。

中期・後期土器（215 ～ 229）215 ～ 222は念仏間式に相当する土器である。215は平行沈線と二重の鋸歯状沈線が施文され、磨り消し縄文が施されている。216・217は横位の沈線の間に鋸歯状沈線

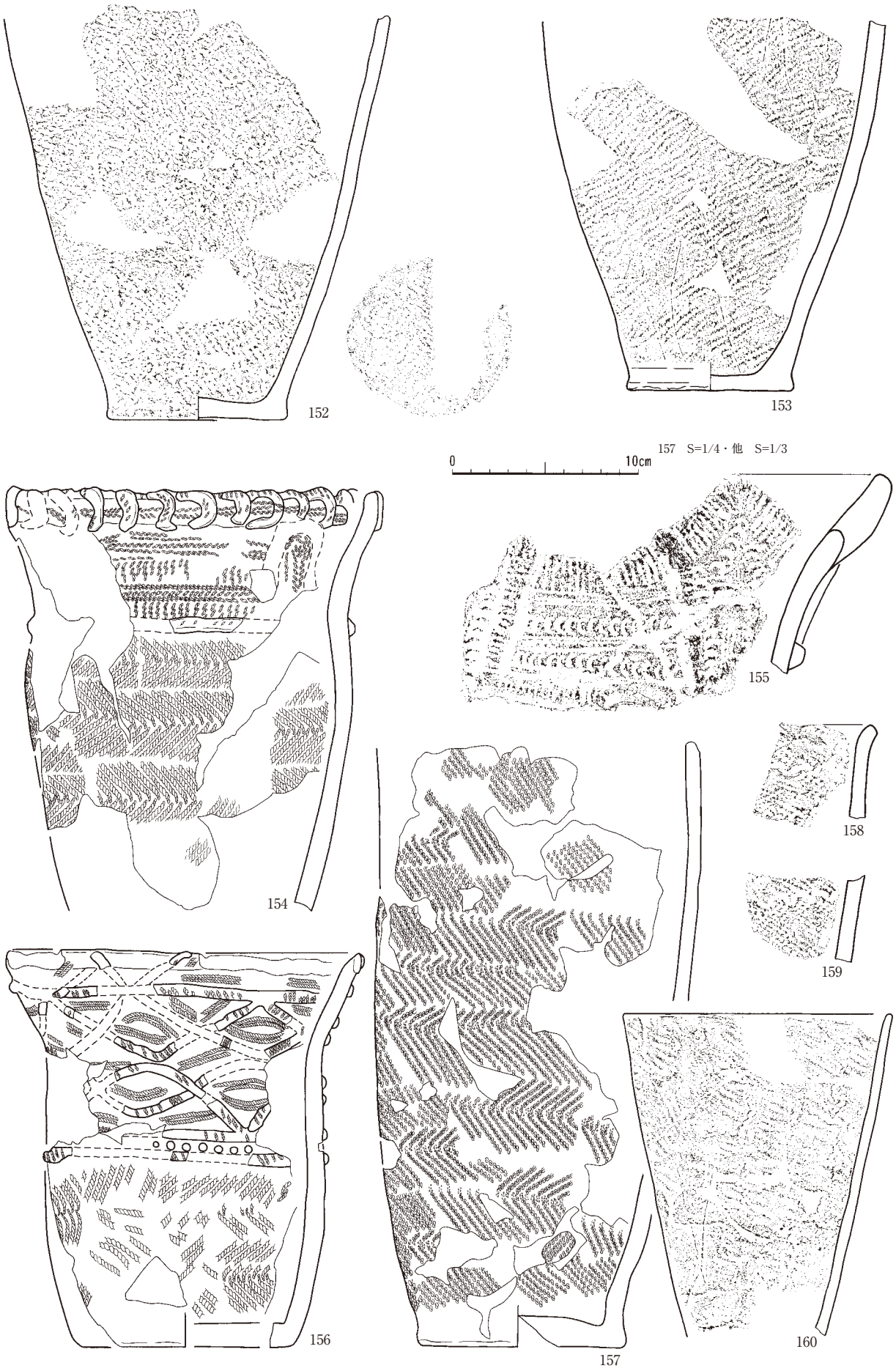


図28　出土土器（６）

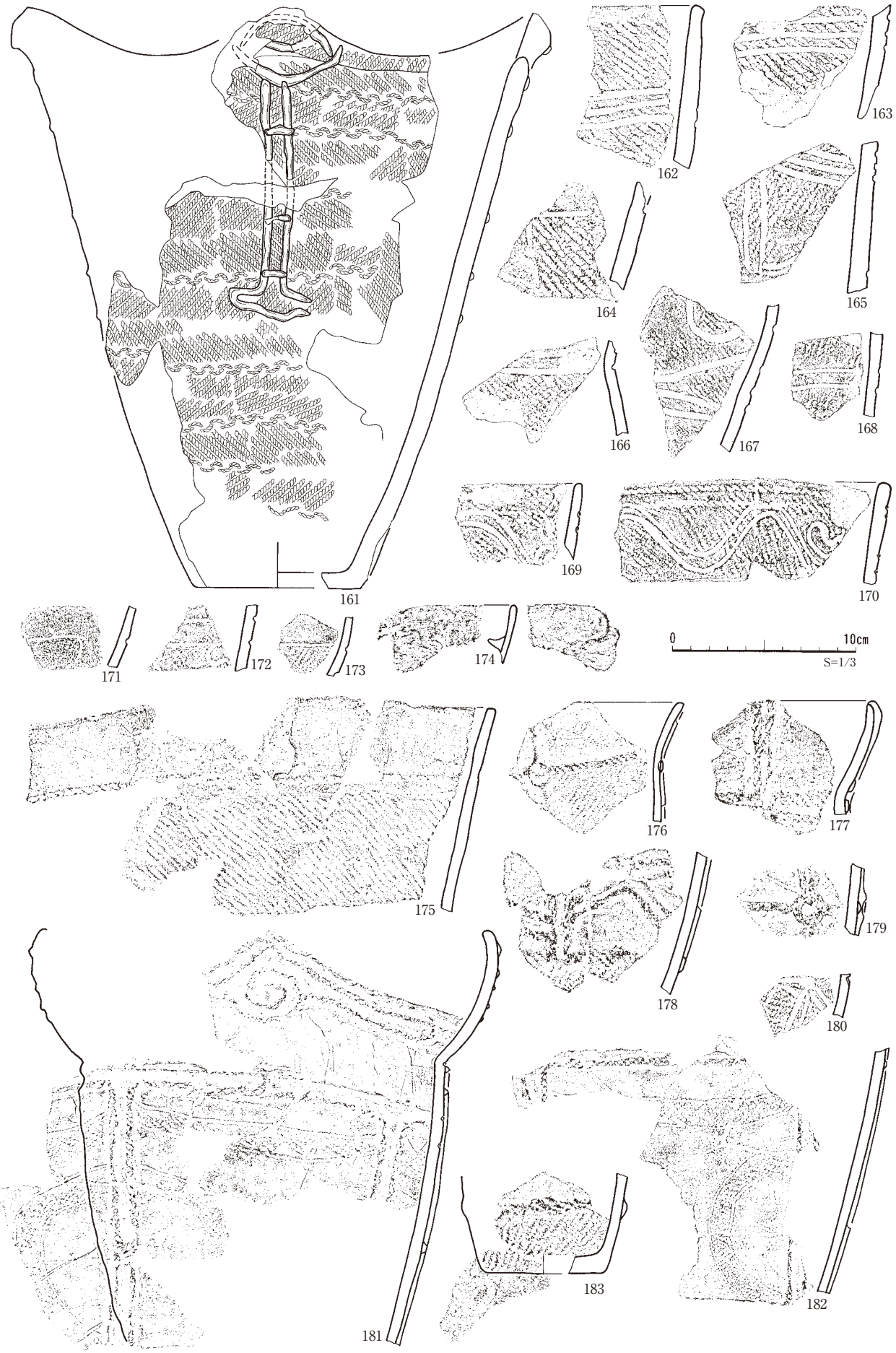

161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
174
0
10cm
S=1/3
175
176
177
178
179
180
181
182
183

図29　出土土器（7）

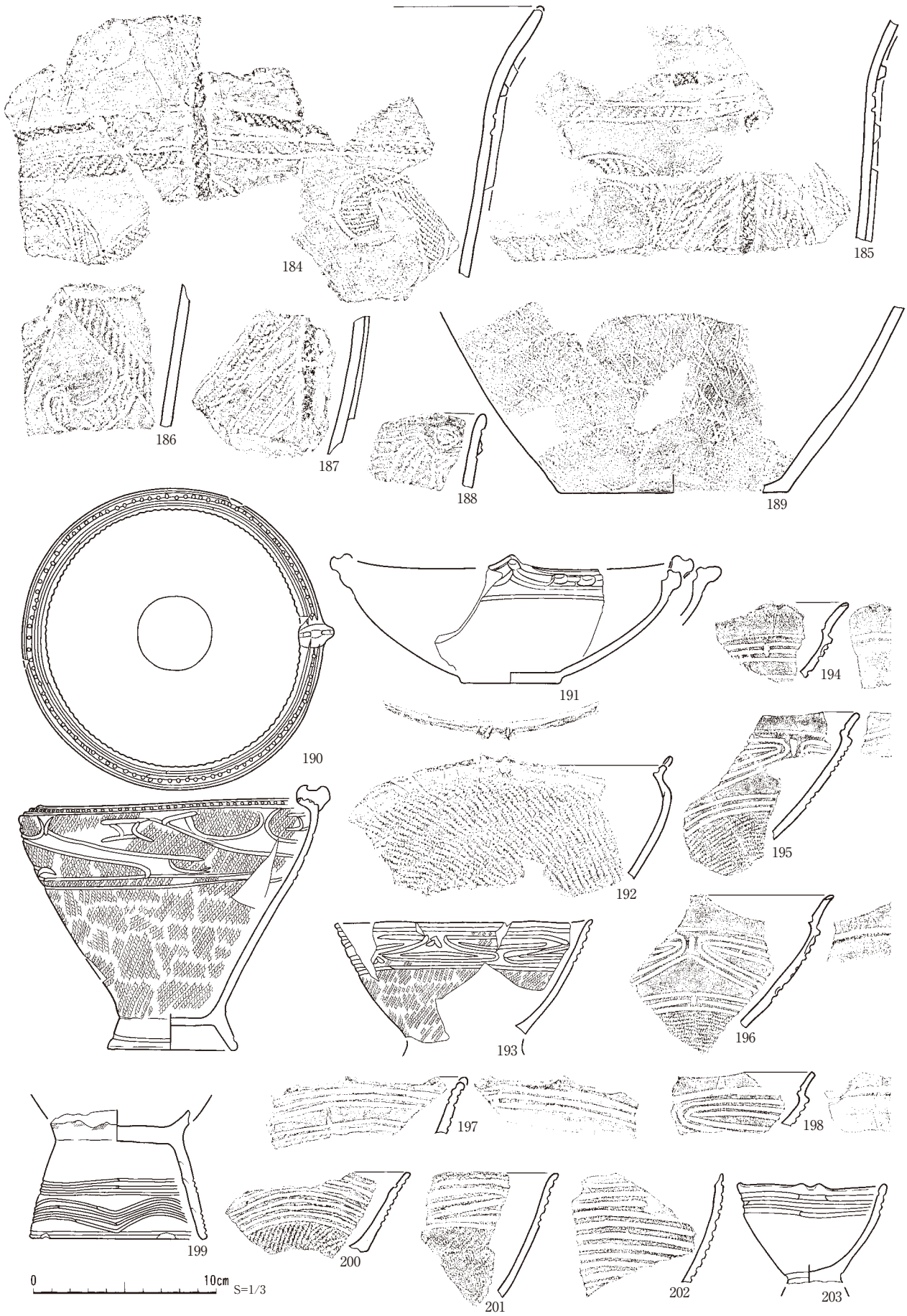

184
185
186
187
188
189
190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200
201
202
203
0
10cm
S=1/3

図30　出土土器（８）

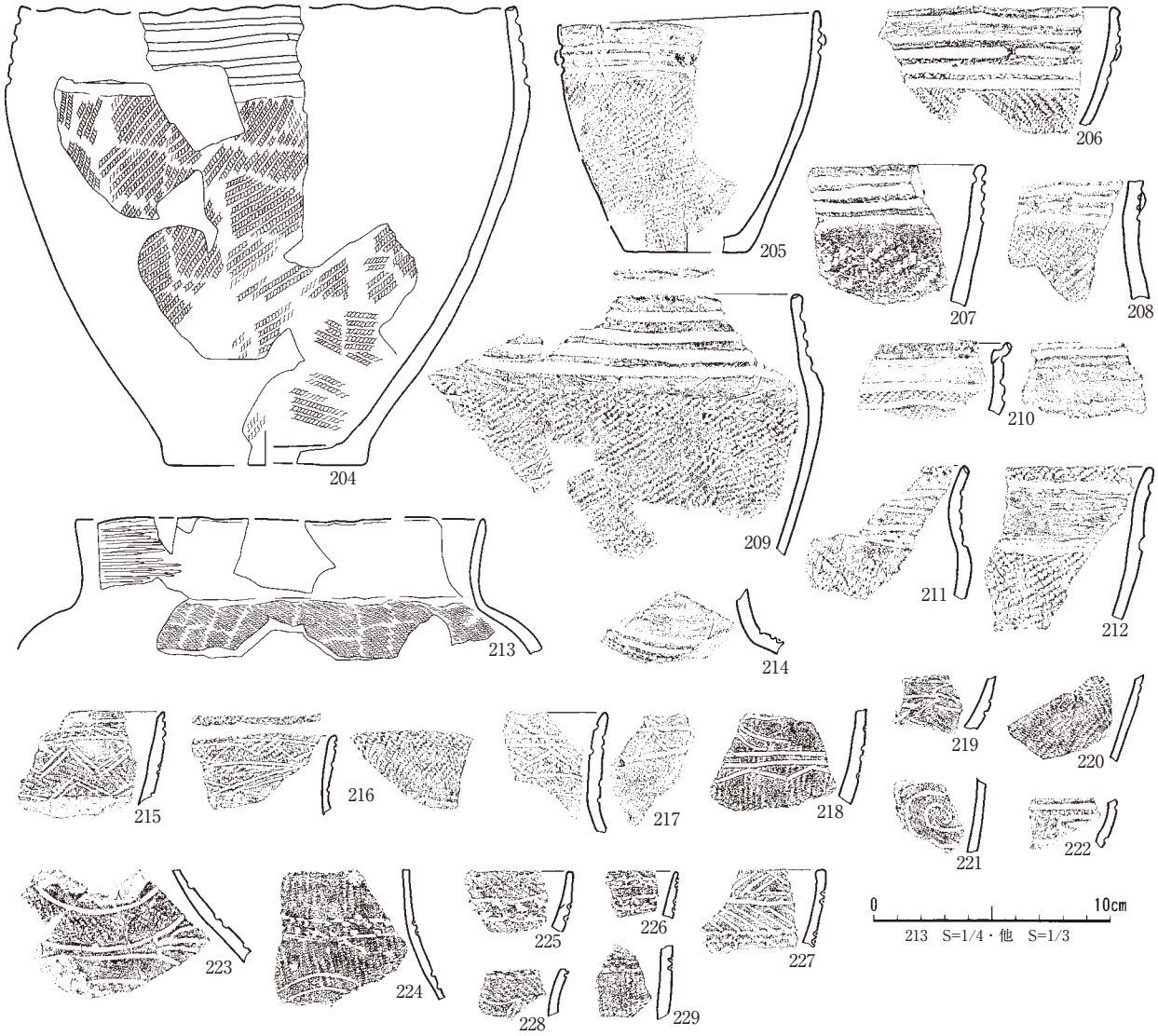


図31　出土土器（９）

が施文されており、217には内面にも施される。219は矢羽根状沈線が施されている。211は蕨状の渦巻き文である。222は平行沈線の間に楕円形文と刺突が施されている。223は頸部の沈線間にＲＬ縄が充填施文されている。224 ～ 229は天王山式に相当する土器である。交互刺突文が施されている。

第Ⅶ群－縄文時代中期～晩期・弥生時代の粗製土器（図32－230 ～図33－252）

出土土器の大多数が斜縄文を施文される、胎土に繊維を含まない所謂粗製土器であり、それらをまとめた。器種は深鉢形で施文原体はＲＬのものがやや多い。230・238は同一個体で、口縁部に縦走するＲＬ縄文が施文されている。234は折り返し口縁である。240は工具で面取りされ外傾する口唇である。243は球状に胴部が膨らむ器形となる。246の底部外面には網代の痕跡が残る。250は無文で工具によるケズリとナデで成形されている。これら230 ～ 250は縄文中期から晩期の範疇で捉えられるものと思われる。251は内側に屈曲する口縁で、口縁外面は工具と指ナデにより成形され地文が磨り消されている。252は口端に指頭圧痕を施した小波状口縁で、口縁外面は指で成形されている。251と252は弥生時代に相当するものと思われる。

230・244　S=1/4・他　S=1/3

図32　出土土器（10）

図33　出土土器（11）

第２節　出土石器（図34 ～ 43）

石器類は遺構内と遺構外から総数120点が出土している。大多数がＢ区西側の遺物包含層からの出土であり、第Ⅰ層～第Ⅳ層まで縄文時代および弥生時代の土器と混在して出土している。剥片石器類は形態から、礫石器類は形態のほか整形痕と使用痕跡別に分けた。以下に各器種ごとに記述し、各石器の出土位置や石材等については観察表に示した。また、遺構内の第２号溝状土坑出土石鏃（図34－８）と第２号土坑出土台石（図42－140）、第２号集石遺構出土台石（図42－137）も遺構外に混ぜて掲載した。

石鏃（１～19）遺構内出土の１点を含め19点出土している。基部形態から次のように分けられる。

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
0
5cm
S=1/2

図34　出土石器（１）

無茎鏃（１～12）明らかに凹基と分けられるもの（1・４）、平基鏃と分けられるもの（２・６・７）と５のように緩い抉りで判断に困るものがある。１～３は基部に若干の違いはあるが、大きさと平面形状は似通っている。平面的に見て、両側縁が緩やかに湾曲するものと、直線的なもの（６・７）があり、前者には短い五角形鏃に分けてもよいもの（１・５・８）がある。８～10は再調整されているものだろうか、基部の片方が張り出すようなつくりである。11・12は五角形鏃で、11は側縁が対称ではない歪なつくりである。12は鏃身の中位を抉る調整が施されている。

有茎鏃（13～19）すべて、なで肩状の基部の凸基鏃であり、19以外の基部幅は広く、側縁の形状は直線的なものが多い。18の鏃身は細身である。16の基部には僅かだがアスファルトが付着している。

石錐（20～23）４点の出土である。20は横長剥片の一側端部に両面調整で茎状の錐刃部をつくり出している。21～23は尖頭形の錐刃部である。21は両面の周縁調整で形状が整えられている。22・23は錐刃部だけのつくり出しである。

石匙（24～27）４点の出土ですべて縦型石匙である。刃部下端を欠損している24は、松原型石匙に見られる、背面側右側縁の急角度調整、左側縁の深い押圧剥離、腹面右側縁の連続した小剥離調整の特徴から、早期末～前期初頭頃に帰属する。25はつまみ部を両面調整し、背面の右側縁と剥片端部に剥離を施し刃部をつくり出している。26は上下両端を大きく欠く、印象的に本類に含めたが掻器かもしれない。27は縦長の小剥片を素材とし、簡易な調整剥離でつまみと刃部をつくり出している。

石篦（28）１点出土している。背面の刃部側に礫面を残すもので粗い調整で短冊形に整形されている。側縁には階段状剥離が目立つ。

楔形石器（29～33）９点出土し内５点を図示した。29は両側縁に礫面を残し、大きさからみて両極技法で割られたものであり、上下両端に打撃による階段状剥離が明瞭である。32は直接打撃による礫面を残す剥片素材で、周縁の敲打痕と剥離の状態から本類に含めた。31・33は使用により破砕・剪断したものである。

スクレイパー類（34～54）削器および掻器などとして使用されたと思われるものをまとめた。22点出土し内19点を図示した。34～36・42・43・45は両面の周縁または両面の側縁調整が施されるものである。34は素材の打点側を欠損する。35は薄い小剥片の素材である。36は背面側に急角度調整が施される。45は横長剥片の端部に交互剥離調整が施されるもので錐の可能性もある。37～41・44・46～52は背面調整が施されるものである。背面の両側縁調整のもの（37・40）。背面の周縁調整のもの（38・39・41）。背面の一側縁ないしは端部調整のもの（49～52）がある。38・39・41・50～52は急角度調整剥離から？器の機能が想定され、43・49などは削器として機能したものと思われる。
53は打点側に階段状剥離が見られる。側面形状から楔形石器の可能性もあるが、剥片を剥ぎ取る際の打面調整などの剥離かもしれない。54は腹面の一部に簡易に調整剥離が施されるものである。

剥片　スクレイパーを含む定型石器の他に剥片と破砕片が52点出土している。概ね大きさは53や54のような小剥片で形状も不整形であり、末端が強く湾曲するものも多い。図示しないが、これら剥片の内には、極微細な剥離や剥片端部（エッジ）に細かく折れた、所謂使用剥片と考えられるものが20点ある。各種定型石器の数に比べ剥片や破砕片の数量は極端に少なく、この場所での石器製作は考えにくい。使用剥片の割合も多いことから、石器製作ではなく、何らかの用途で使用するために剥片が持ち込まれたものと思われる。

図35　出土石器（２）

磨製石斧（55 ～ 61）７点出土している。55は両側縁に擦り切り痕を残す小型の磨製石斧である。研磨は入念で鏑や側縁部の稜が残る。56は再調整品だろうか、片面だけに調整剥離が施されている。研磨は両面に見られるが顕著ではない。57 ～ 59は基部の破片である。57は研磨されているが、58・59は敲打痕だけで、製作途中に壊れたものと思われる。60・61は基端部を欠損する。60は剥離後に研磨されているが研磨は弱い。61は剥離と敲打痕が残る。

打製石斧（62）１点出土している。背面に礫面をそのまま残す横長剥片を素材とし、腹面調整により成形されている。素材自体が楕円形であり、厚さを取るための調整かもしれない。

剥離礫（63・64）小円礫に剥離調整が施されているもので、後述の礫器に含めてもよいかもしれないが、剥離技法と素材の大きさから分けた。63は扁平な小円礫を両極技法で打撃している。一辺が階段状に大きく剥離しており、対辺側には打撃のダメージが点状に認められる。64も扁平な楕円形礫を両極技法で打割している。長軸方向で打ち割った後に、短軸方向からも打撃されており、錯向する階段状の剥離が残る。さらに、打撃後に両面を入念に研磨している。素材となる礫を、楔形石器として製作または使用したものと思われるが、その後に石斧にするため研磨した可能性もある。

磨石（65 ～ 81、105 ～ 126）磨石には、特殊磨石とか三角柱状磨石と称される素材礫の稜線部に狭長な機能面をもつものと、礫の表面全体ないしは一部がツルツルに摩耗したものがある。前者は23点出土しており、その内17点を図示した。後者は24点出土し、内16点を図示した。

65 ～ 81は三角柱状磨石の類で、素材には約14㎝～ 16㎝の大きさで重量が１kg前後の礫が用いられている。機能面は幅の広いものが多く、機能面の側縁に剥離を多くもつもの（68・69・74 ～ 77・79）と、剥離をもたない、ないしは少ないもの（65 ～ 67・70 ～ 73・78・80・81）がある。機能面には、器体の自然面との感触の差からみて、ツルツルの感触のもの（65･66・68・70）とザラザラの感触のもの（67・69・74 ～ 80）のものがある。さらに、71 ～ 73の機能面は、長軸方向のほぼ真ん中から左右にツルツルの面とザラザラの面に分かれ、ザラザラの面側には剥離が多く、ツルツルの面側には剥離が無い。72は同一機能面での感触の違いが特に強く、ツルツルの面は変色し若干の光沢も見られる。また、65・67・70・80は複合機能をもつもので、礫の端部に敲打痕を有している。

105 ～ 126は摩耗した器面をもつもので、扁平な楕円形礫が多い。器面全体が均一に摩耗しているだけで明確な使用痕跡は見られない。大多数が、転石による自然な摩耗であると思われるが、何らかに使用するため海浜等から持ち込まれたものと思われる。116 ～ 120の小礫はまとまって第Ⅳｂ層から出土している。124は複合的に使われており、一側面に敲打痕が残っている。

半円状扁平打製石器（82・83）素材の形状と剥離調整から２点を分けた。82は周縁の剥離だけで、打製石斧や礫器でもよいのかもしれない。83は周縁調整されるもので、機能する部位は直線的に加工されており、狭長な機能面が形成されている。機能面の感触は器面より粗くザラついている。

敲き石（84 ～ 104）22点出土している。礫の器面に敲打痕跡が残るもので、凹み石に分けられるものも数点あるが含めた。使われる礫は楕円形礫および球状礫と棒状の礫である。84 ～ 89は稜や側面が使われるもので、三角柱状磨石に類似する。90 ～ 98は礫の端部が使われるもので、楕円形と球状礫のものが多い。敲打痕は明瞭で、90・92・94 ～ 97は敲打面がほぼ平坦で使用頻度が高かったものと思われる。99 ～ 104は礫の器面に敲打痕が残るものである。敲打の痕跡は浅いものが多く、敲くというより、敲かれるタイプのものと思われる。この内でも102や104は、本来は凹み石に分けるものだろう。

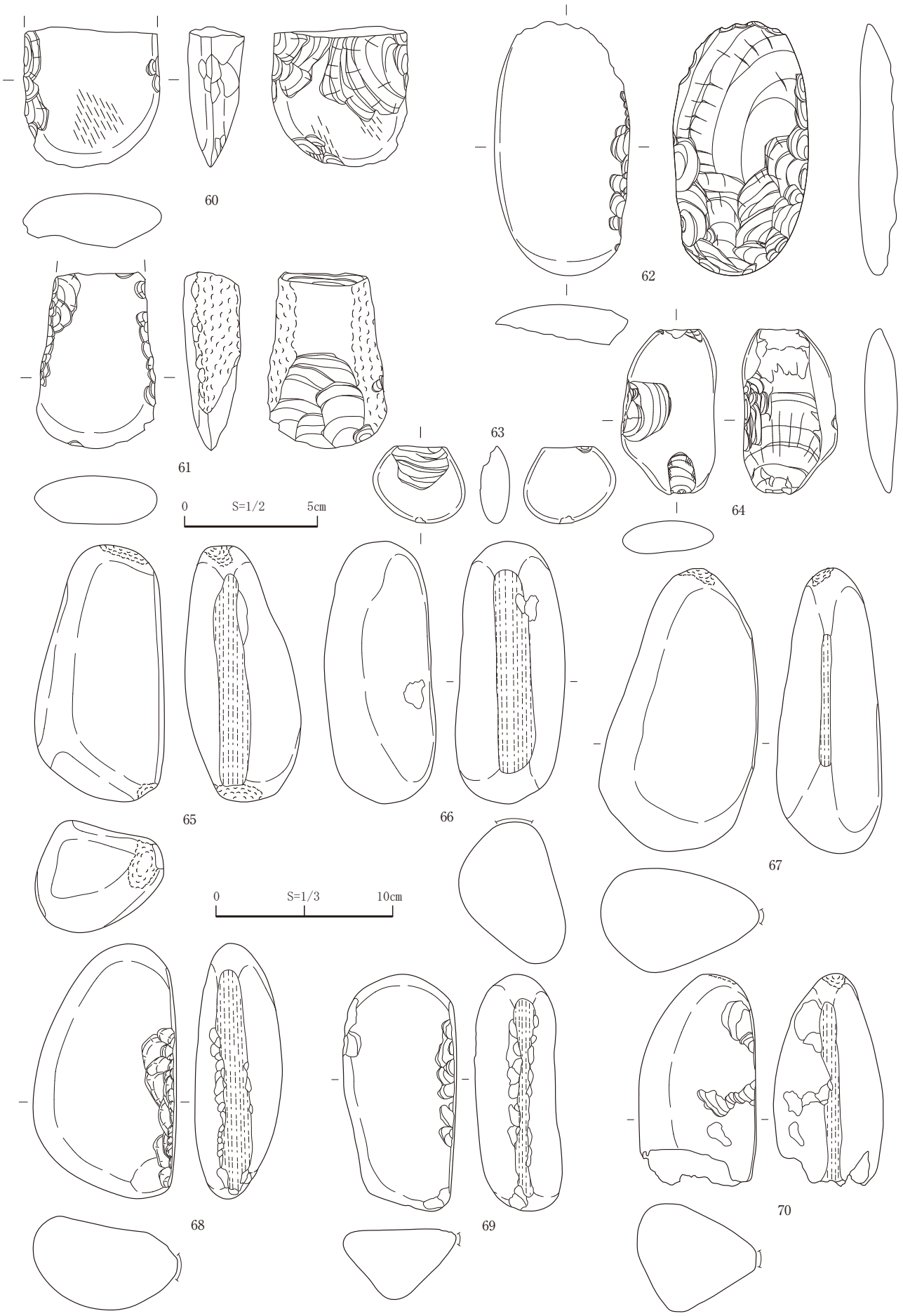


図36　出土石器（３）

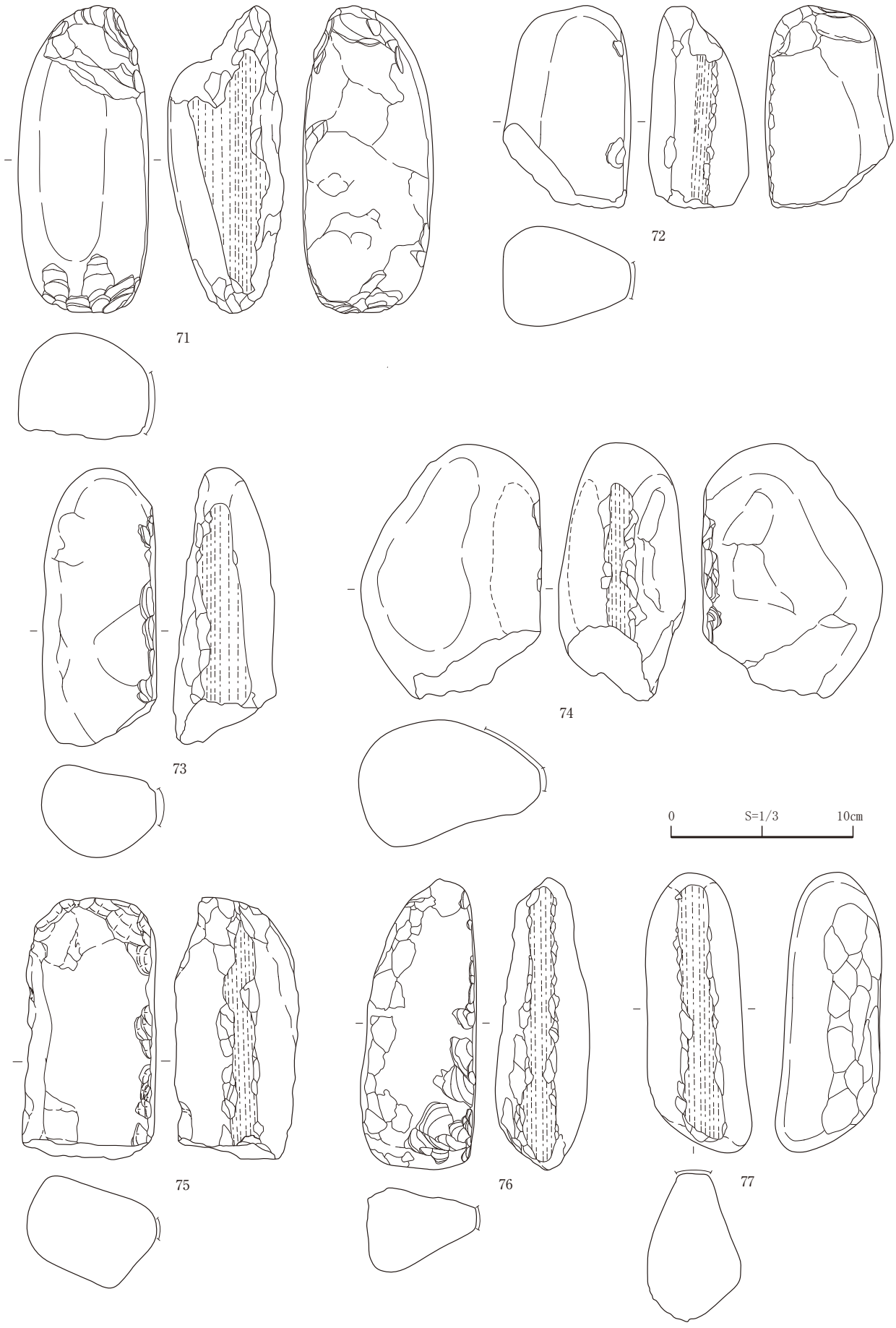


図37　出土石器（４）

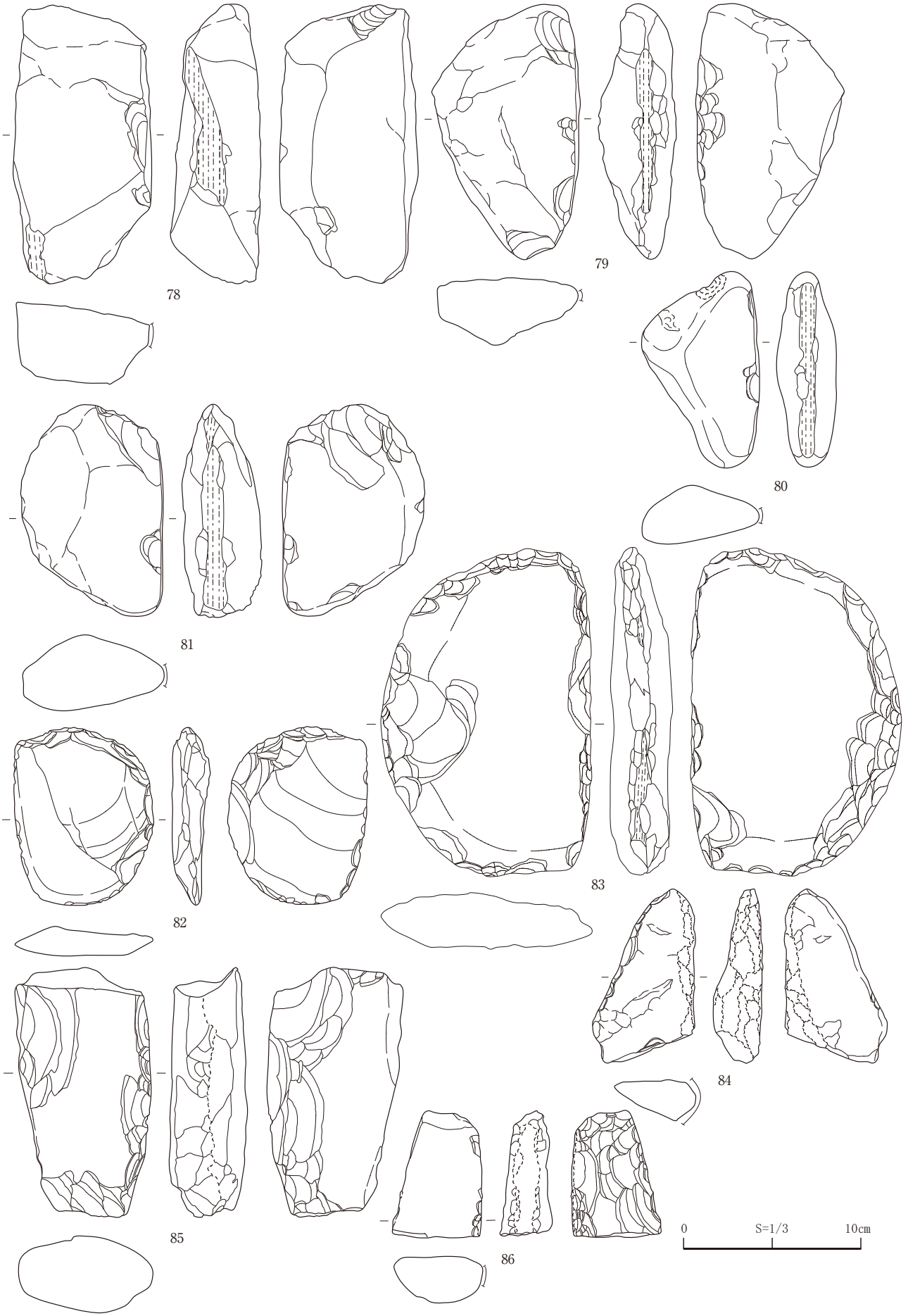


図38　出土石器（５）

図39　出土石器（６）

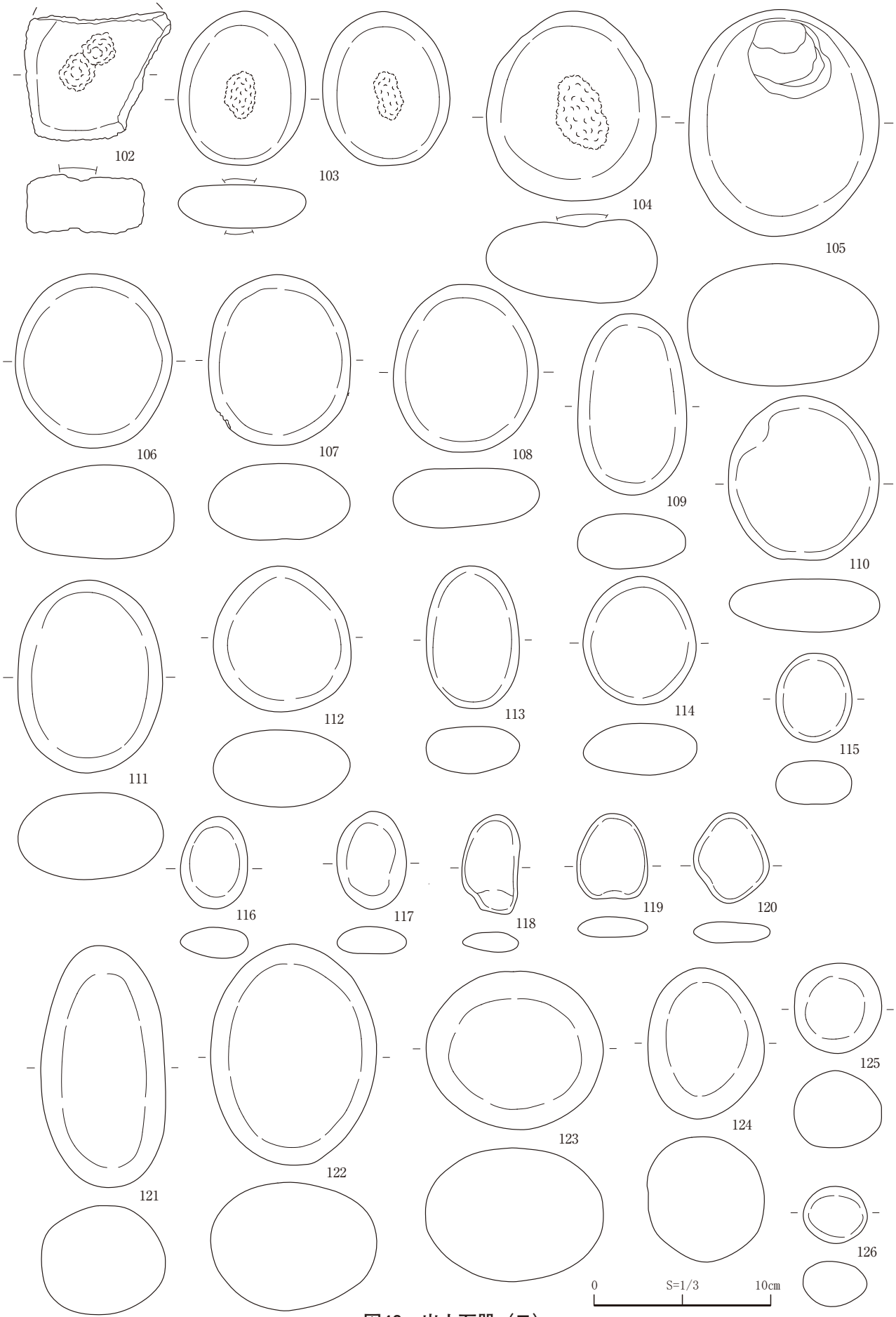

102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
0
S=1/3
10cm

図40　出土石器（７）

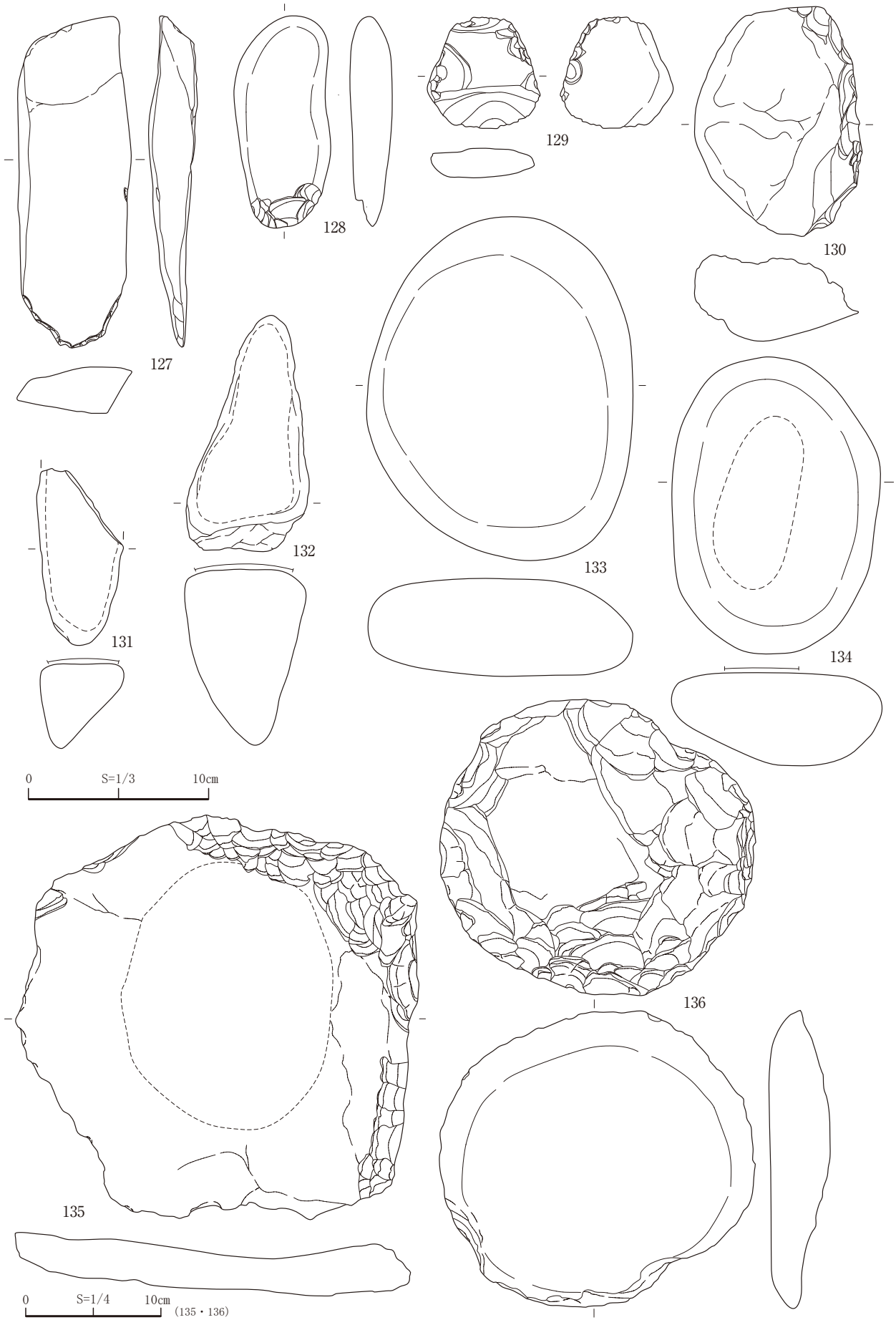

127
128
129
130
131
132
133
134
136
135
0 S=1/3 10cm
0 S=1/4 10cm
(135・136)

図41　出土石器（８）

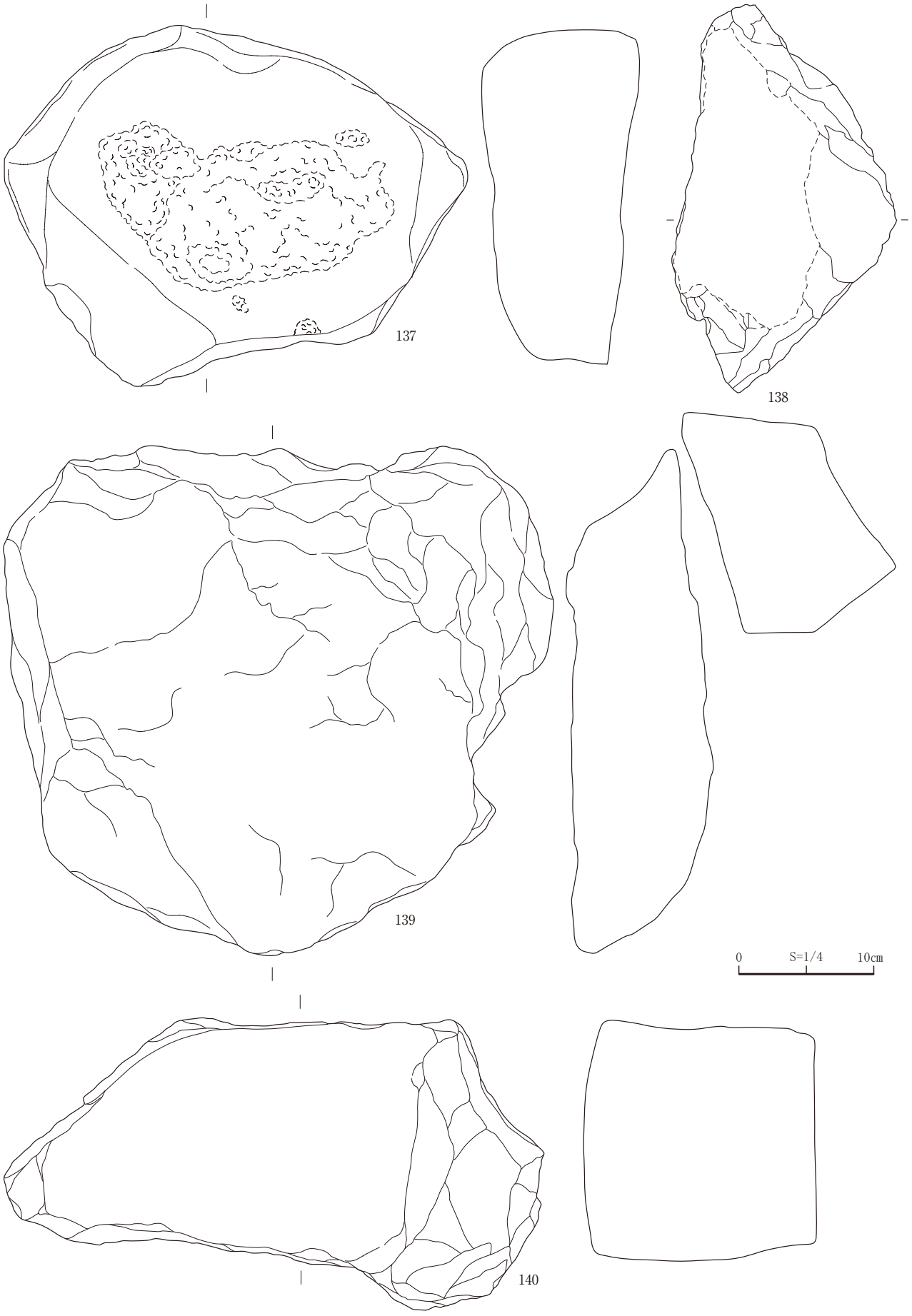


図42　出土石器（９）

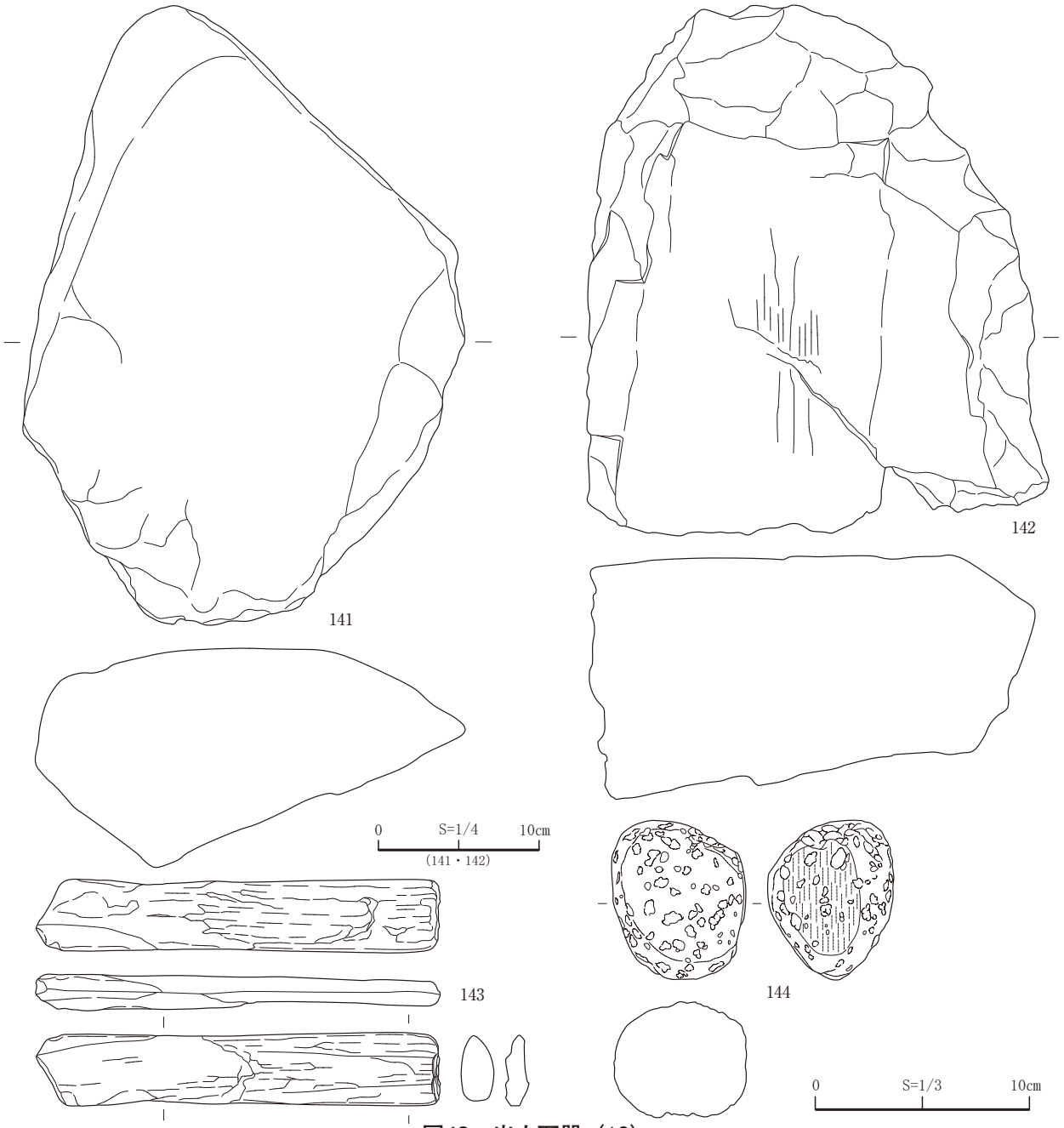


図43　出土石器（10）

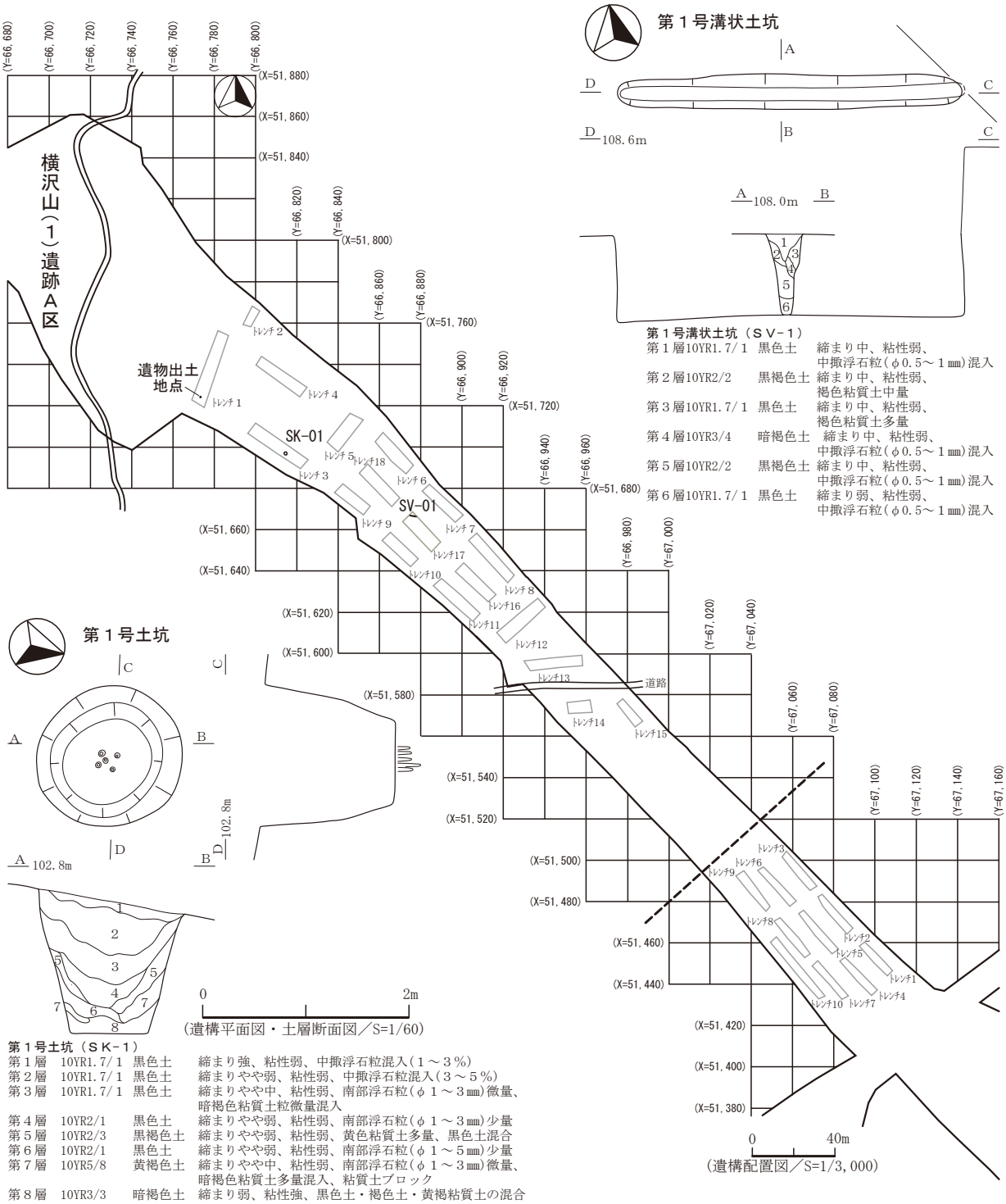
礫器（127 ～ 130）素材の礫に調整剥離が施されるもので４点出土している。127・128は細長い扁平礫の一端部に剥離が施されている。130は厚みのある礫の一側縁に粗い片面調整剥離が施されている。

台石（46 ～ 49）礫の平坦な一面が使われているもので12点出土している。131・132は小さい礫の一面が磨りにより摩耗変色している。135は器面の中央部が変色し周辺よりザラついた面となっている。138 ～ 142も図示した面に磨りによる摩耗が見られる。137は敲打により器面中央部が粗く凹んでいる。136は周縁を剥離調整して円形に整形されているものである。器面に顕著な使用痕跡は見られないが、本類に含めた。石核ないしは何らかの未製品の可能性もある。

石刀（143）１点出土している。素材は粘板岩で、一方の側縁は平坦に対する側縁は鋭角になるように、器体よりも顕著に研磨されている。

軽石製品（144）１点出土している。球状形軽石の一端が擦りにより平坦となっている。

第４編　横沢山(２)遺跡



第１号溝状土坑（ＳＶ－１）

第１層	10YR1.7/1	黒色土	締まり中、粘性弱、中撰浮石粒(φ0.5～１㎜)混入
第２層	10YR2/2	黒褐色土	締まり中、粘性弱、褐色粘質土中量
第３層	10YR1.7/1	黒色土	締まり中、粘性弱、褐色粘質土多量
第４層	10YR3/4	暗褐色土	締まり中、粘性弱、中撰浮石粒(φ0.5～１㎜)混入
第５層	10YR2/2	黒褐色土	締まり中、粘性弱、中撰浮石粒(φ0.5～１㎜)混入
第６層	10YR1.7/1	黒色土	締まり弱、粘性弱、中撰浮石粒(φ0.5～１㎜)混入

第１号土坑（ＳＫ－１）

第１層	10YR1.7/1	黒色土	締まり強、粘性弱、中撰浮石粒混入(１～３％)
第２層	10YR1.7/1	黒色土	締まりやや弱、粘性弱、中撰浮石粒混入(３～５％)
第３層	10YR1.7/1	黒色土	締まりやや中、粘性弱、南部浮石粒(φ１～３㎜)微量、暗褐色粘質土粒微量混入
第４層	10YR2/1	黒色土	締まりやや弱、粘性弱、南部浮石粒(φ１～３㎜)少量
第５層	10YR2/3	黒褐色土	締まりやや弱、粘性弱、黄色粘質土多量、黒色土混合
第６層	10YR2/1	黒色土	締まりやや弱、粘性弱、南部浮石粒(φ１～５㎜)少量
第７層	10YR5/8	黄褐色土	締まりやや中、粘性弱、南部浮石粒(φ１～３㎜)微量、暗褐色粘質土多量混入、粘質土ブロック
第８層	10YR3/3	暗褐色土	締まり弱、粘性強、黒色土・褐色土・黄褐粘質土の混合

図44　横沢山(２)遺跡遺構配置図・検出遺構図

第１章　検出遺構と出土遺物

第１節　遺構（図44）

調査対象面積約26,000㎡に対し、平成18年度に町道側に10本、翌年に林道より西側に18本のトレンチを設定して調査を行い、平成19年度に縄文時代の土坑と溝状土坑を各１基検出した。

第１号土坑（ＳＫ－１）（図44）

［位置・確認］松館川に向かう緩斜面地のトレンチ３で検出した。標高約102.5ｍの第Ⅳ層面に中掫浮石が斑に拡がる楕円形のプランで確認した。

［形態・規模］開口部は約1.4ｍのほぼ円形で、底面は80㎝×90㎝の楕円形である。周壁は底面から開くように立ち上がり、深さは最大で約1.4ｍある。底面は平坦で中央部に逆茂木痕と推定される円形及の小 Pit が５個設けられている。Pit の深さは底面から14㎝～ 25㎝あり、打ち込まれたものと思われる。

［堆積土］レンズ状の堆積を示す自然堆積で、黒色土を主体に８層に分けられる。第１・２層中には中掫浮石粒が混入する。第５～８層は第Ⅴ層の周壁が崩落土と黒色土が混合した層である。

［時期］堆積土上位の中掫浮石から縄文時代前期初頭にはほぼ埋没しており、それ以前の所産である。

第１号溝状土坑（ＳＶ－１）（図44）

［位置・確認］調査区中央部のトレンチ17の、標高約107.7ｍの第Ⅴ層面に棒状のプランで検出した。

［形態・規模］開口部は棒状で、大きさは長軸が約3.35ｍ、短軸の最大幅は約35㎝である。底面の長さも開口部とほほ同じで、幅は15㎝弱である。断面形は長軸箱形で、短軸Ⅴ字状である。検出面からの深さは約80㎝であるが、第Ⅱ層中からの掘り込みで、本来は１ｍ以上の深さがあったと思われる。長軸方向はＮ－98°－Ｅである。

［堆積土］自然堆積で６層に分けられる。すべて黒色土を主体とし上位層に中掫浮石粒が多い。

［時期］出土遺物はなく時期不明であるが、縄文時代の所産と思われる。

第２節　遺物（図45）

トレンチ１の第Ⅳ層下位から礫石器が１点だけ出土した。扁平な棒状礫の一方に、打ち割るように両面から剥離調整されており、エッジ部分は敲打により潰れている。石質は砂岩である。

（小田川）

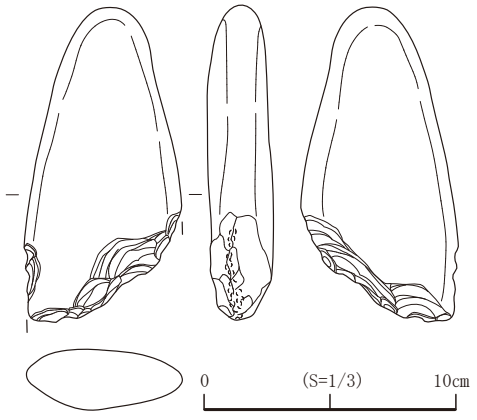


図45　出土遺物

出土遺物観察表

荒屋敷久保（２）遺跡

遺構外出土土器

図番号	出土位置	層位	器種	部位	外面施文文様等	内面調整	胎土	備考
図10－１	Ｉ－15	Ⅱ層	鉢形	口縁～胴部	沈線(平行・Ｚ字状)・貼瘤	ナデ	砂	Ｐ－１・３・４、・内面煤付着
図10－２	Ｉ－15	Ⅱ層	鉢形	口縁部	沈線(平行)・貼瘤	ナデ	砂	Ｐ－10、内面煤付着
図10－３	Ｉ－15	Ⅱ層	鉢形	胴部	沈線(平行)・器面摩滅縄不明	ナデ	砂	Ｐ－11
図10－４	Ｉ－15	Ⅱ層	鉢形	胴部	沈線(平行)・器面摩滅縄不明	ナデ	砂	Ｐ－11
図10－５	Ｉ－15･16	Ⅱ層	鉢形	胴部	沈線(平行)・器面摩滅縄不明	ナデ	砂	Ｐ－７・８・13
図10－６	Ｉ－16	Ⅱ層	鉢形	胴部	沈線(平行)	ナデ	砂	Ｐ－14
図10－７	Ｉ－15	Ⅱ層	鉢形	胴部	沈線(平行)・器面摩滅縄不明		砂	Ｐ－12
図10－８	Ｉ－15	Ⅱ層	鉢形	胴部	沈線(平行)		砂	Ｐ－12
図10－９	Ｉ－15	Ⅱ層	鉢形	胴部	器面摩滅縄不明	ナデ	砂	Ｐ－12
図10－10	Ｉ－15	Ⅱ層	鉢形	胴部	器面摩滅縄不明		砂	Ｐ－９

横沢山（１）遺跡

遺構内出土土器

図番号	出土位置	層位	器種	部位	外面施文文様等	内面調整	胎土	備考
図21－１	第２号土坑	底面直上	深鉢形	口縁～胴	口端平・口縁無・沈線・ＲＬ(縦)	ミガキ	砂	
図21－２	第２号土坑	覆土	深鉢形	胴～底部	ＲＬ(縦)		砂・極少酸化鉄	底径12.5cm
図21－３	第２号土坑	覆土	深鉢形	胴部	ＲＬ(縦)	ミガキ	砂	
図21－４	第２号土坑	覆土	深鉢形	口縁部	ＬＲ(縦)	ミガキ	砂	
図21－５	第２号土坑	覆土	深鉢形	胴部	ＲＬ(斜)		砂	
図21－６	第２号土坑	覆土	深鉢形	胴～底部	ＲＬ(横・斜)		砂・極少酸化鉄	
図21－７	第２号土坑	覆土	深鉢形	口縁部	無文・ナデ	ナデ	細砂・酸化鉄	
図21－８	第２号土坑	覆土	深鉢形	胴部	貝殻腹縁押引き(刺突の様にも見える)		砂多	
図21－９	第２号土坑	覆土	深鉢形	胴部	無文・ナデ(ケズリ？)	ミガキ？	細砂	
図21－10	第３号土坑	覆土	深鉢形	胴部	無文・ナデ(ケズリ？)	ミガキ？	細砂	
図21－11	第４号土坑	覆土２層	深鉢形	胴部	無文・ナデ(ケズリ？)	ナデ	細砂	
図21－12	第４号土坑	覆土２層	深鉢形	胴部	組紐		粗い砂・繊維多	大木２式
図21－13	第４号土坑	覆土２層	深鉢形	胴部	ＬＲ(横)		砂多・繊維少	
図21－14	第８号溝状土坑	覆土	深鉢形	胴部	ＬＲ(横)	ナデ？	砂・繊維多・酸化鉄	
図21－15	第８号溝状土坑	覆土	深鉢形	胴部	ＬＲＬ(横)		砂少・繊維多	
図21－16	第９号溝状土坑	覆土３層	深鉢形	口縁部	口唇外刻み・沈線・ＬＲ(横)		砂少・繊維多	
図21－17	野外炉	石囲内	深鉢形	胴～底部	Ｌ(縦)	ミガキ	砂	
図21－18	野外炉	石囲内	深鉢形	胴部	Ｌ(縦)	ミガキ	砂	
図21－19	野外炉	石囲内	深鉢形	胴部	ＲＬ(縦)	ミガキ	砂	
図21－20	野外炉	石囲内	深鉢形	胴部	無文・ナデ(ケズリ？)	ナデ	細砂	
図21－21	第２号集石遺構	集石内	深鉢形	胴部	節無原体(斜)・０段多条ＬＲ(羽状)	ミガキ	砂・繊維	図21－100同一個体

遺構外出土土器

図番号	出土位置	層位	器種	部位	外面施文文様等	内面調整	胎土	備考
図23－１	Ｔ－63	Ⅳｂ層	深鉢形	口縁部	魚骨回転文	ナデ	砂少・繊維多	Ｐ－930
図23－２	Ｔ－62・Ｏ－64	Ⅳｂ層	深鉢形	頸部？	魚骨回転文・ＲＬ(横)		砂多・繊維少	Ｐ－582・1182
図23－３	Ｏ－61	Ⅰ層	深鉢形	口縁部	魚骨回転文		砂少・繊維多	Ｐ番無し
図23－４	Ｕ－60	Ⅳｂ層	深鉢形	口縁部	魚骨回転文		砂・繊維	Ｐ－561
図23－５	Ｏ－61	Ⅰ層	深鉢形	口縁部	魚骨回転文		砂・繊維	Ｐ番無し
図23－６	Ｕ－60	Ⅳｂ層	深鉢形	口縁部	魚骨回転文		砂・繊維	Ｐ番無し
図23－７	Ｔ－65	Ⅳｂ層	深鉢形	口縁部	魚骨回転文		砂少・繊維多	Ｐ－915
図23－８	Ｏ－49	Ⅱ層	深鉢形	口縁部	魚骨回転文		砂多・繊維少	Ｐ番無し
図23－９	Ｓ－64	Ⅳｂ層	深鉢形	口縁部	魚骨回転文		砂少・繊維多	Ｐ－993
図23－10	Ｑ－60	Ⅳｂ層	深鉢形	口縁部	魚骨回転文		砂多・繊維少	Ｐ－220
図23－11	Ｎ－61	Ⅳｂ層	深鉢形	頸部？	魚骨回転文・ＬＲ(横)		砂少・繊維多	Ｐ－247
図23－12	Ｕ－50	Ⅳｂ層	深鉢形	頸部？	魚骨回転文・ＬＲ(横)		砂多・繊維少	Ｐ番無し
図23－13	Ｓ－60	Ⅳｂ層	深鉢形	頸部？	魚骨回転文・ＬＲ(横)		砂少・繊維多	Ｐ－1091
図23－14	Ｒ－59	Ⅲ層	深鉢形	頸部？	魚骨回転文・ＬＲ(横)		砂少・繊維多	Ｐ－209
図23－15	Ｒ－59	Ⅲ層	鉢形	頸部？	魚骨回転文・ＬＲ(横)		砂・繊維	Ｐ－210
図23－16	Ｕ－60	Ⅳｂ層	深鉢形	頸部？	魚骨回転文・ＬＲ(横)・端部結縛		砂少・繊維多	Ｐ番無し
図23－17	Ｏ－49	Ⅳｂ層	深鉢形	頸部？	魚骨回転文・ＬＲ(横)		砂少・繊維多	Ｐ番無し
図23－18	Ｓ－56	Ⅳｂ層	深鉢形	頸部？	魚骨回転文・ＬＲ(横)		砂少・繊維多	Ｐ番無し
図23－19	Ｒ－60	Ⅳｂ層	深鉢形	頸部？	魚骨回転文・ＬＲ(横)		砂少・繊維多	Ｐ－248
図23－20	Ｓ－67	Ⅳｂ層	深鉢形	頸部？	魚骨回転文・ＲＬ(横)		砂少・繊維多	Ｐ－667
図23－21	Ｐ－51	Ⅴ層	深鉢形	頸部？	魚骨回転文・ＲＬ(横)		砂少・繊維多	Ｐ番無し
図23－22	Ｔ－62	Ⅳｂ層	深鉢形	口縁部	口端刻み・沈線・ＲＬ(横？)		砂少・繊維多	Ｐ－585・999
図23－23	Ｕ－61	Ⅳｂ層	深鉢形	口縁部	口端刻み・沈線・ＲＬ(横)		砂・繊維	Ｐ－567
図23－24	Ｔ－60	Ⅱ層	深鉢形	口縁部	口端刻み・沈線・ＲＬ(横)		砂・繊維	Ｐ－461
図23－25	Ｕ－60	Ⅱ層	深鉢形	口縁部	口端刻み・沈線・ＲＬ(横)		砂・繊維	Ｐ番無し
図23－26	Ｔ－60	Ⅳｂ層	深鉢形	口縁部	沈線・ＲＬ(横)		砂少・繊維多	Ｐ－1024
図23－27	Ｕ－60	Ⅱ層	深鉢形	口縁部	沈線・ＲＬ(横？)		砂少・繊維多	Ｐ番無し
図23－28	Ｒ－57	Ⅳｂ層	深鉢形	頸部？	沈線		砂少・繊維多	Ｐ－1118
図23－29	Ｕ－60	表採	深鉢形	胴部	沈線・ＬＲ(横)		砂多・繊維少	Ｐ番無し
図23－30	Ｒ－56	Ⅳｂ層	深鉢形	胴部	ＲＬ(横)・未貫通の穿孔		砂少・繊維多	Ｐ－229
図23－31	Ｐ－58	Ⅳｂ層	深鉢形	底部付近	ＲＬ(横)		砂少・繊維多	Ｐ－22
図23－32	Ｒ－60	Ⅳｂ層	深鉢形	底部付近	ＬＲ(横)		砂少・繊維多	Ｐ－555
図23－33	Ｒ－57	Ⅳｂ層	深鉢形	胴部	無文・斜位ナデ		砂・繊維・酸化鉄	Ｐ－11
図23－34	Ｖ－36	Ⅱ層	深鉢形	胴部	無文		砂・繊維多	Ｐ－730

図番号	出土位置	層位	器種	部位	外面施文文様等	内面調整	胎土	備考
図23－35	R－57	Ⅳb層	深鉢形	胴部	無文		砂・繊維多	P－12
図23－36	Q－60	Ⅳb層	深鉢形	胴部	無文		砂・繊維多	P－551
図23－37	Q－66	Ⅳb層	深鉢形	底部	無文		砂	P－512
図23－38	P－69	Ⅳb層	深鉢形	底部	無文		砂・酸化鉄	P－839
図23－39	Y－39	Ⅳ層	深鉢形	口縁部	口端腹縁刺突・沈線・貝殻腹縁刺突		砂	P－1867
図23－40	V・W－36	Ⅱ層	深鉢形	口縁部	口唇内刻み・沈線・貝殻腹縁刺突		砂	P－959・1106
図23－41	W－36	Ⅱ層	深鉢形	口縁部	口唇内刻み・沈線・貝殻腹縁刺突		砂	P－974
図23－42	X－39	Ⅳ層	深鉢形	口縁部	沈線・貝殻腹縁刺突・工具刺突		砂	P－1865
図23－43	W－38	Ⅳ層	深鉢形	胴部	沈線・貝殻腹縁刺突・工具刺突		砂	P－2064、42同一個体
図23－44	W－38	Ⅱ層	深鉢形	口縁部	口唇内刻み・沈線		砂・金雲母片	P－2003
図23－45	V－41	Ⅱ層	深鉢形	口縁部	沈線・貝殻腹縁刺突		細砂	P番無し
図23－46	W－37	Ⅱ層	深鉢形	胴部	沈線（鋸歯状）・貝殻腹縁刺突		細砂	P－994
図23－47	W－37	Ⅱ層	深鉢形	胴部	沈線（波頭文）・貝殻腹縁刺突		細砂	P－993、46同一個体
図23－48	Y－40	Ⅳ層	深鉢形	胴部	沈線・貝殻腹縁刺突・工具刺突		細砂	P－1868
図23－49	W・X－37	Ⅳ層	深鉢形	口縁部	口端工具刺突・貝殻腹縁刺突（羽状）		細砂	P－2006他
図23－50	W－37	Ⅱ層	深鉢形	口縁部	口端工具刺突・貝殻腹縁刺突（羽状）		細砂	P－2008
図23－51	U－42	Ⅱ層	深鉢形	口縁部	口端工具刺突・貝殻腹縁刺突（羽状）		細砂	P－135
図23－52	U－42	Ⅳ層	深鉢形	口縁部	口端工具刺突・貝殻腹縁刺突（羽状）		砂	P－136・3071
図23－53	W－36	Ⅳ層	深鉢形	口縁部	口端刻み・貝殻腹縁刺突（縦位）・突起貼付		砂多	P－195
図23－54	X－38	Ⅳ層	深鉢形	口縁部	貝殻腹縁刺突（縦位）・突起貼付		砂多	P－1876
図23－55	V－32	Ⅱ層	深鉢形	口縁部	貝殻腹縁刺突（羽状）		砂・酸化鉄	P番無し
図23－56	X－39	Ⅱ層	深鉢形	口縁部	貝殻腹縁刺突（縦位）		砂多	P－1842
図23－57	W－37・38	Ⅳ層	深鉢形	口縁部	口端刻み・貝殻腹縁刺突（縦）・工具刺突		砂	P－2485・3064他
図23－58	V－38	Ⅳ層	深鉢形	口縁部	口端刻み・貝殻腹縁刺突（縦）・工具刺突		砂	P－2060
図23－59	X－39	Ⅳ層	深鉢形	口縁部	口端刻み・貝殻腹縁刺突（縦）・穿孔		砂多	P－1858
図23－60	X－38	Ⅳ層	深鉢形	口縁部	口端刻み・貝殻腹縁刺突（斜位）		砂・酸化鉄	P－3049
図23－61	X－38	Ⅳ層	深鉢形	口縁部	口端と口縁に貝殻腹縁刺突（斜位）		砂多	P－2036
図24－62	W－37・38	Ⅱ層	深鉢形	口縁～底	口端刻み・貝殻腹縁押引き・工具刺突		砂多	P－2013・3007他
図24－63	V－39	Ⅳ層	深鉢形	口縁部	口端工具刺突・貝殻腹縁押引き		砂多	P番無し
図24－64	X－37	Ⅱ層	深鉢形	口縁部	口端工具刺突・貝殻腹縁押引き		砂多	P－3037
図24－65	T－37	Ⅰ層	深鉢形	口縁部	口端工具刺突・貝殻腹縁押引き		砂	P番無し
図24－66	W－39	Ⅱ・Ⅳ層	深鉢形	口縁部	口端工具刺突・貝殻腹縁押引き・突起貼付		砂多	P－1827・2048他
図24－67	W－40	Ⅳ層	深鉢形	口縁部	口端工具刺突・貝殻腹縁押引き		粗い砂	P－1802
図24－68	V・W－40	Ⅱ・Ⅳ層	深鉢形	口縁部	口端工具刺突・貝殻腹縁押引き		砂・繊維？	P－1607・1869他
図24－69	U－40・W－38	Ⅱ層	深鉢形	口縁部	口端工具刺突・貝殻腹縁押引き		砂・繊維？	P－1170、68同一個体
図24－70	X－38	Ⅳ層	深鉢形	口縁部	貝殻腹縁押引き		砂多	P－3051、66同一個体
図24－71	V－37	Ⅱ層	深鉢形	口縁部	貝殻腹縁押引き		砂多	P－556、70同一個体
図24－72	W－35	Ⅱ層	深鉢形	胴部	貝殻腹縁刺突		砂少	P－1109
図24－73	X－37	Ⅱ・Ⅳ層	深鉢形	胴部	貝殻腹縁押引き・ナデ		砂・酸化鉄	P－1017・3034
図24－74	W－35	Ⅱ層	深鉢形	口縁部	貝殻腹縁押引き		砂多	P－3116
図24－75	V－39	Ⅳ層	深鉢形	口縁部	無文		砂	P－2032
図24－76	不明	攪乱	深鉢形	口縁部	無文		砂	P番無し
図24－77	X－38	Ⅳ層	深鉢形	口縁部	無文		砂多	P－1874
図24－78	W－38	Ⅱ層	深鉢形	口縁～胴	無文		砂・酸化鉄	P－3011
図24－79	X－39	Ⅱ層	深鉢形	胴部	貝殻腹縁刺突（横位）		粗い砂	P－1208
図24－80	X－35	Ⅱ層	深鉢形	胴部	貝殻腹縁刺突（斜位）		砂多	P－1757
図24－81	W－37	Ⅱ層	深鉢形	胴部	貝殻腹縁押引き・山形沈線		砂	P－985・995
図24－82	X－37	Ⅳ層	深鉢形	胴部	貝殻腹縁押引き・山形沈線		砂	P－1896、81同一個体
図24－83	W－38	Ⅳ層	深鉢形	胴部	工具刺突・工具ナデ		粗い砂	P－1174・3076他
図24－84	V－37・W－36	Ⅱ・Ⅳ層	深鉢形	底部	貝殻腹縁押引き		砂	P－981・1584他
図24－85	W－48	Ⅳ層	深鉢形	底部	貝殻腹縁刺突（縦位）		砂	P－127
図24－86	X－37	Ⅳ層	深鉢形	底部	無文・ケズリ		砂	P－3067
図24－87	W－36	Ⅳ層	深鉢形	底部	無文・ケズリ		砂	P－2067
図24－88	W－36	Ⅱ層	深鉢形	底部	無文・ナデ		砂	P－979
図24－89	X－39	Ⅳ層	小型	底部	無文・ケズリ		砂	P－1863
図24－90	V－38	Ⅱ層	深鉢形	口縁部	縄側面圧痕・0段多条ＬＲ（横）		繊維多・酸化鉄	P－528
図24－91	V－39	Ⅱ層	深鉢形	口縁部	縄側面圧痕・0段多条ＬＲ（横）		繊維多・酸化鉄	P－1052、90同一個体？
図24－92	V－35	Ⅲ層	深鉢形	口縁部	縄側面圧痕・0段多条ＬＲ（横）		砂・酸化鉄	P－2026
図24－93	V－37・38	Ⅲ層	深鉢形	胴部	0段多条ＬＲ（斜）		繊維多・酸化鉄	P－1599他
図25－94	X－38	Ⅲ層	深鉢形	胴部	外面ＲＬ（斜）・内面ＲＬ（斜）		砂・繊維	P－2039
図25－95	X－38	Ⅳ層	深鉢形	胴部	外面ＲＬ（横）・内面ＲＬ（横）		砂・繊維	P－2045
図25－96	W－38	Ⅳ層	深鉢形	胴部	外面0段多条ＲＬ（横）・内面同ＲＬ（横）		砂・繊維	P－2767
図25－97	X－38	Ⅱ層	深鉢形	胴部	外面1段多条ＲＬ（横）・内面同ＲＬ（横）		砂・繊維	P－826
図25－98	V－37	Ⅱ層	深鉢形	胴部	単軸絡条体第1類		砂・繊維	P－2942
図25－99	U－40	Ⅱ層	深鉢形	口縁部	組縄ＬＲ（横）		砂・繊維	P－1633
図25－100	W－31・32	Ⅱ層	深鉢形	口縁部	節無原体（斜）・0段多条ＬＲ（羽状）	ミガキ	砂・繊維	P番無し
図25－101	W－36	Ⅱ層	深鉢形	口縁部	組縄ＬＲ（横）		砂・繊維	P－735・1102
図25－102	W－41	Ⅱ層	深鉢形	口縁部	組縄ＲＬ（横）		砂・繊維	P－200・213
図25－103	V－40	Ⅱ層	深鉢形	口縁部	ＲＬＲ（横）		砂・繊維	P－1612
図25－104	U－40	Ⅳ層	深鉢形	口縁部	ＬＲ（横）・結節回転		砂・繊維	P－1450
図25－105	V－37	Ⅱ層	深鉢形	口縁部	組縄ＬＲ（横）		砂・繊維	P－1587
図25－106	X－39	Ⅳ層	深鉢形	口縁部	ＲＬＲ（横）		砂・繊維	P－1855
図25－107	U－34	Ⅳ層	深鉢形	胴部	ＲＬ（縦・横）交差施文		砂石英粒	P番無し
図25－108	X－39	Ⅳ層	深鉢形	胴部	ＲＬＲ（横）		砂・繊維	P－1860
図25－109	V－41・U－40	Ⅱ層	深鉢形	胴部	ＬＲ（横）	ナデ	砂多	P－1489
図25－110	U－35	Ⅱ層	深鉢形	胴部	組紐ＬＲ（横）		砂・繊維	P－2865
図25－111	V－41	Ⅳ層	深鉢形	口縁部	組紐ＬＲ（横）		砂・繊維	P番無し
図25－112	U－35	Ⅱ層	深鉢形	胴部	組紐ＬＲ（横）		砂・繊維	P－2874
図25－113	W－32	Ⅱ層	深鉢形	口縁～胴	Ｒ（縦）		砂・繊維・酸化鉄	P－2083
図25－114	U－40・X－39	Ⅱ・Ⅳ層	深鉢形	口縁部	口唇刻み・単軸絡条体第3類・組紐		細砂・繊維少・酸化鉄	P－1850

図番号	出土位置	層位	器種	部位	外面施文文様等	内面調整	胎土	備考
図25－115	T－41	Ⅱ層	深鉢形	口縁部	波頂部刻み・口唇刻み・単軸絡条体第3類		細砂・繊維少・酸化鉄	P番無し
図25－116	U－41	Ⅱ層	深鉢形	口縁部	波頂部刻み・口唇刻み・単軸絡条体第3類		細砂・繊維少・酸化鉄	P－1290
図25－117	X－38	Ⅱ層	深鉢形	口縁部	口唇刻み・単軸絡条体第3類		砂・繊維・酸化鉄	P－844
図25－118	S－69	Ⅱ層	深鉢形	口縁部	口唇刻み・単軸絡条体第3類		細砂・繊維少・酸化鉄	P番無し
図25－119	T－41	Ⅱ層	深鉢形	口縁部	口端沈線・単軸絡条体第3類		細砂・繊維少	P番無し
図25－120	O－60	Ⅲ層	深鉢形	口縁部	単軸絡条体第3類・ＬＲ（横）		砂・繊維	P－242
図25－121	T－35	Ⅰ層	深鉢形	口縁部	単軸絡条体第3類・0段多条ＬＲ（横）		粗い砂	P番無し
図25－122	T・U－35・36他	Ⅱ層	深鉢形	口縁～底	波頂部刺突・結節・ＬＲ（横）		細砂・繊維少	P－494・905・990他
図25－123	X－37	Ⅱ層	深鉢形	胴部	ＲＬ（横）・結節		細砂	P－1032
図25－124	U－42	Ⅱ層	深鉢形	頸部	結節・組紐		細砂・繊維少・酸化鉄	P－147
図25－125	W－41・X－40	Ⅱ層	深鉢形	胴部	ＲＬ（横）・結節（単軸絡条体第3類？）		細砂	P－201・425
図25－126	X－40	Ⅱ層	深鉢形	胴部	工具刺突・工具ナデ	ナデ	細砂	P－280
図25－127	V－41	Ⅱ層	ミニチュア	底部	無文		砂・繊維	P番無し
図25－128	V－39・40	Ⅱ層	深鉢形	底部	Ｌ単軸絡条体第1類		砂・繊維	P－1438・1441
図26－129	T－41	Ⅱ層	深鉢形	口縁部	単軸絡条体第5類（節無し原体）		細砂・繊維少・酸化鉄	P番無し
図26－130	X－32	Ⅱ層	深鉢形	口縁部	単軸絡条体第5類（節無し原体）		細砂・繊維少	P－2301
図26－131	V－42	Ⅱ層	深鉢形	口縁部	単軸絡条体第5類（節無し原体）		細砂・繊維少	P－72・80他、
図26－132	U－42・T－39	Ⅱ層・盛土	深鉢形	胴部	単軸絡条体第5類（節無し原体）		細砂・繊維少	P－181、131同一個体
図26－133	V－40・W－41	Ⅱ・Ⅳ層	深鉢形	底部	組紐・山形沈線・ナデ		細砂・繊維少	P－451　底径8.6cm
図26－134	U－41	Ⅱ層	深鉢形	底部	組紐・山形沈線		細砂・繊維少	P－1496
図26－135	X－41	Ⅱ層	深鉢形	胴部	組紐		粗い砂	P－275
図26－136	S－41	盛土	深鉢形	胴部	組紐		粗い砂・繊維？	P番無し、135同一個体？
図26－137	V－39	Ⅱ層	深鉢形	口縁部	沈線（弧状？竹管状工具）・縄不明瞭		細砂・繊維少	P－1680
図26－138	V－39	Ⅱ層	深鉢形	口縁部	沈線（弧状？竹管状工具）・縄不明瞭		細砂・繊維少	P－1683　137同一個体
図26－139	U－34	Ⅱ層	深鉢形	口縁部	口端突起・沈線（鋸歯状）・地文不明瞭	ナデ	細砂・繊維少	P－2644
図26－140	U－35	Ⅱ層	深鉢形	口縁部	沈線（鋸歯状）・地文不明瞭	ナデ	細砂・繊維少	P－2512、139同一個体
図26－141	T－38	盛土	深鉢形	口縁部	沈線（鋸歯状・曲線）	ナデ	細砂・酸化鉄	P番無し
図26－142	X－40・41	Ⅱ層	金魚鉢形	口縁部	口唇装飾体・隆帯（渦巻き）・ＬＲ（横）			P－274・429
図26－143	W－37	Ⅱ層	金魚鉢形	口縁部	無文・ナデ	ミガキ	砂	P－905
図26－144	X－36	Ⅱ層	金魚鉢形	頸部	隆帯（渦巻き）・ＬＲ（横）		細砂・酸化鉄	P－1131、142同一個体
図26－145	U－41	Ⅱ層	金魚鉢形	口縁部	口端刺突・地文不明瞭（結節？）		細砂・繊維少	P－1296
図26－146	X－40	Ⅱ層	金魚鉢形	胴部	ＬＲ（横）			P－275
図26－147	V－40	Ⅱ層	深鉢形	口縁部	口端隆帯（竹管刺突）・ＲＬ（横）・内面隆帯（渦巻き）		砂	P－1615
図26－148	X－35	Ⅱ層	深鉢形	胴部	ＲＬ（縦）	ナデ	細砂・繊維少	P－319
図26－149	V－42	Ⅱ層	金魚鉢形	胴部	組紐			P－75・76
図26－150	V－38	Ⅱ層	深鉢形	口縁部	ＬＬ（横）直前段反撚り？・結縛結節	ナデ		P－527・1592・1593
図27－151	W－38・39他	Ⅱ層・盛土	深鉢形	口縁～胴部	口端突起・刺突・沈線（平行・クランク状）・円形刺突・ＬＲ異条	ナデ	砂	P－629・2785他、口径41cm
図28－152	W・U－41	Ⅱ層	深鉢形	胴～底部	直前段反撚り		砂・繊維	P－1284・1481他、底径9.2cm
図28－153	V－36・W－38	Ⅱ層・盛土	深鉢形	胴～底部	ＬＲ（横）・底辺部ナデ	ナデ	砂・繊維	P－85・97
図28－154	X－32・33	Ⅱ層	深鉢形	口縁～胴部	隆帯・縄側面圧痕・結束第1種羽状		砂	P－2405・2418他、口径20cm
図28－155	W－31・32	Ⅱ層	深鉢形	口縁部	隆帯・縄馬蹄形圧痕		砂	P－2081
図28－156	W－38・V－38他	Ⅱ層	深鉢形	口縁～底部	隆帯・縄側面圧痕・刺突	ミガキ	砂	P－2757他、口径19cm底径11.2cm
図28－157	W－38	Ⅰ・Ⅱ層	深鉢形	胴～底部	ＲＬＲ結束第1種羽状		砂	P－1077他、底径14.7cm
図28－158	W-33	Ⅱ層	深鉢形	口縁部	ＲＬ（横）・横位結節回転		砂	P－3198
図28－159	V－33	Ⅱ層	深鉢形	胴部	ＲＬ（横・斜）交差施文・横位結節回転		砂	P番無し
図28－160	X－35・39	Ⅱ層	深鉢形	口縁～胴部	Ｌ（縦）・縦位結節回転		砂	P－1338・1705
図29－161	W-33	Ⅱ層	深鉢形	口縁～底部	波状口縁・隆帯・ＲＬ／ＬＲ結束第2種羽状		砂	P－1384、底径約9cm
図29－162	O－65	Ⅱ層	深鉢形	口縁部	横位沈線・ＬＲ（縦）		砂多	P番無し
図29－163	O－65	Ⅱ層	深鉢形	胴部	横位沈線・ＬＲ（縦）		砂多	P番無し
図29－164	O－65	Ⅱ層	深鉢形	胴部	横位沈線・ＬＲ（縦）		砂多	P番無し
図29－165	O－65	Ⅱ層	深鉢形	胴部	横位沈線・ＬＲ（縦）		砂多	P番無し
図29－166	X－37	Ⅱ層	深鉢形	頸部	横位沈線・ＬＲ（縦）		砂	P－1376
図29－167	X－29	盛土	深鉢形	胴部	沈線曲線文・ＲＬ（横）	ミガキ	砂	P番無し
図29－168	W－34	Ⅱ層	深鉢形	胴部	横位沈線・ＬＲ（横）		砂	P－1521
図29－169	X－37	Ⅱ層	深鉢形	口縁部	縄側面圧痕・沈線波状/曲線文ＬＲ（縦）		砂	P－1004
図29－170	U－34・W－35	Ⅱ層	深鉢形	口縁部	縄側面圧痕・沈線波状/曲線文ＬＲ（縦）		砂	P－377、169同一個体
図29－171	W－32	Ⅱ層	深鉢形	胴部	沈線/楕円形文	ミガキ	砂	P番無し
図29－172	W－33	Ⅱ層	深鉢形	胴部	沈線・縄（不明瞭）充填施文		砂	P番無し
図29－173	U－32	Ⅱ層	深鉢形	胴部	沈線・ＲＬ（縦）磨消し縄文	ナデ	砂	P番無し
図29－174	X－37	Ⅱ層	深鉢形	口縁部	無文工具ナデ・内面鰭状突起		細砂・石英粒	P－884
図29－175	U－35・V－34	Ⅱ層	深鉢形	口縁部	口縁部無文・頸部縄側面圧痕・ＬＲ（縦）		砂・酸化鉄	P－2561・2664他
図29－176	W－32	Ⅱ層	深鉢形	口縁部	隆帯/指頭圧痕・ＲＬ（縦）	ミガキ	細砂・金雲母片	P－2114
図29－177	W－38	Ⅱ層	深鉢形	口縁部	波状口縁・隆帯	ミガキ	砂	P－1089・1093
図29－178	W・X－38	Ⅱ層	深鉢形	口縁部	隆帯・ＲＬ（縦）	ミガキ	砂	P－826・2018、177同一個体
図29－179	W－33	Ⅱ層	深鉢形	口縁部	隆帯/刺突		砂・石英粒	P番無し
図29－180	V－33	Ⅱ層	深鉢形	頸部	沈線・刺突・ＬＲ（斜）		細砂	P番無し、　弥生土器？
図29－181	V－36・40	Ⅱ層	深鉢形	口縁～胴部	口縁内湾・渦巻き隆帯・沈線文・ＬＲ充填施文	ミガキ	細砂	P－482・750他
図29－182	V－36	Ⅱ層	深鉢形	胴部	隆帯・沈線弧（状文）・ＬＲ充填施文	ミガキ	細砂	P－743他、181同一個体
図29－183	X－39	Ⅱ層	深鉢形	底部	ＲＬ（縦）・隆帯		粗い砂	P－408・410、底径6.6cm
図30－184	U・V－34～36	Ⅱ層	深鉢形	口縁部	口縁無文・隆帯・沈線（波頭文）・ＲＬ充填施文		砂・酸化鉄	P－740・2468他
図30－185	W－32	Ⅱ層	深鉢形	頸部	隆帯・沈線（曲線/波頭文）・ＲＬ充填施文		砂・酸化鉄	P－2157・2898他、184同一個体
図30－186	U－35	Ⅱ層	深鉢形	胴部	沈線（逆波頭文）・ＲＬ充填施文		砂・酸化鉄	P－2497、184同一個体
図30－187	U－35	Ⅱ層	深鉢形	胴部	沈線（弧状文）・ＲＬ充填施文		砂・酸化鉄	P－2885、184同一個体
図30－188	V－36	Ⅱ層	深鉢形	口縁部	円形隆帯・沈線（円形/曲線文）		細砂多	P－962
図30－189	U－34・W－37	Ⅱ層・盛土	深鉢形	底部	単軸絡条体第5類類		粗い砂多	P－398・910他
図30－190	M－67	Ⅱ層	台付鉢	完形	口唇（沈線/刺突）・入組文・ＬＲ（横）磨消	ミガキ	細砂	P番無し
図30－191	M－68	表採	浅鉢	口縁～底部	無文・口縁（沈線/装飾突起）	ミガキ	細砂	P－1176
図30－192	W－32	Ⅱ層	台付鉢	口縁～胴部	口端突起・口縁磨消し・ＲＬ（横）	ミガキ	細砂	P－2125・2210他
図30－193	N・O－63	Ⅰ・Ⅱ層	台付鉢	口縁～胴部	変形工字文・ＬＲ（横）	ミガキ	細砂	P番無し

図番号	出土位置	層位	器種	部位	外面施文文様等	内面調整	胎土	備考
図30－194	P－68	Ⅱ層	台付鉢	口縁部	工字文	ミガキ	細砂	P－172
図30－195	N－69	Ⅱ層	台付鉢	口縁部	変形工字文・LR(斜)	ミガキ	細砂	P－832・1168
図30－196	O－58	Ⅱ層	台付鉢	口縁部	変形工字文・LR(斜)	ミガキ	細砂	P番無し、195同一個体
図30－197	V－31	Ⅱ層	台付鉢？	口縁部	沈線	ミガキ	細砂・酸化鉄	P－1950
図30－198	Q－67	Ⅱ層	台付鉢	口縁部	変形工字文	ミガキ	細砂	P－765、195同一個体？
図30－199	W－34	Ⅱ層	台付鉢	台部	沈線(横位平行/波状)・LR(斜)・赤彩	ミガキ	細砂	P－1364
図30－200	表採	Ⅰ層	小型鉢	口縁～底部	沈線・LR(横)	ミガキ	細砂・酸化鉄	P番無し
図30－201	N－63	Ⅰ・Ⅱ層	台付鉢？	口縁～胴部	沈線・LR(横)	ミガキ	細砂・酸化鉄	P番無し
図30－202	表採	Ⅰ層	台付鉢？	胴部	沈線		細砂・針状物	P番無し
図30－203	N－67	Ⅱ層	小型台付鉢	台部欠	4波状口縁・無文・沈線	ミガキ	細砂	P番無し
図31－204	N－67	Ⅱ層	鉢形	口縁～底部	口端刺突・LR(横)		砂	P番無し
図31－205	O・P－65・66	Ⅰ・Ⅱ層	鉢形	口縁～底部	工字文・LR(横)		砂	P－1104
図31－206	W－40	Ⅱ層	鉢形	口縁部	工字文・RL(横)磨消し		砂・酸化鉄	P－233
図31－207	N－65	Ⅱ層	鉢形	口縁部	沈線・RL(縦)		粗い砂・酸化鉄	P－1178
図31－208	O－64	攪乱	鉢形	頸部	工字文・LR(横)		砂多	P番無し
図31－209	M－66	Ⅱ層	鉢形	口縁～胴部	口端刻み・沈線・LR(横)・頸部磨消し	ミガキ	砂多・石英粒	P－183
図31－210	V－32	Ⅱ層	鉢形	口縁部	口端外刻み・LR(横)・沈線・口縁磨消し	ミガキ	砂	P－3370
図31－211	V－32	Ⅱ層	鉢形	口縁部	口端外刻み・RL(横)・沈線		砂・酸化鉄	P番無し
図31－212	M－72	Ⅱ層	鉢形	口縁部	LR(横)・沈線・口縁無文帯磨消し		砂・石英粒	P－1124
図31－213	T－41・U－39	Ⅱ層	壺形	口縁～頸部	口縁直立/ミガキ・LR(縦)	ミガキ	細砂	P－1649
図31－214	表採	Ⅰ層	壺形	頸部	沈線・連続刺突		細砂	P番無し
図31－215	T－66	Ⅱ層	深鉢形	口縁部	口唇内傾・沈線(横位/二重鋸歯状)・RL充填		細砂	P－616
図31－216	V－40	Ⅱ層	深鉢形	口縁部	LR(横)・口縁内面LR施文・鋸歯状沈線		細砂	P－1435
図31－217	U－32	Ⅱ層	深鉢形	口縁部	平行沈線間に鋸歯状沈線・内面同施文		細砂	P番無し
図31－218	Q－63	Ⅱ層	深鉢形	胴部	沈線(横位/二重鋸歯状)・RL(斜)		粗い砂	P－130
図31－219	M－63	Ⅱ層	深鉢形	胴部	短沈線(矢羽根状？)・RL(横)		粗い砂	P番無し
図31－220	P－68	Ⅱ層	深鉢形	胴部	RL(縦)・沈線(曲線文)		粗い砂・酸化鉄	P－171
図31－221	P－67	Ⅱ層	深鉢形	胴部	沈線(渦巻き文)・RL充填施文		粗い砂・酸化鉄	P－801
図31－222	排土	不明	深鉢形	胴部	沈線(横位平行/楕円形)・刺突		細砂	P番無し
図31－223	W－35	Ⅱ層	壺形	肩部	沈線(曲線文)・RL充填施文		細砂	P－182
図31－224	P－67	Ⅱ層	壺形	頸部	RL(斜)・沈線・交互刺突	ナデ	細砂	P－791
図31－225	O－64	Ⅱ層	深鉢形	口縁部	RL(横)・沈線・交互刺突		細砂	P番無し
図31－226	P－64	Ⅱ層	深鉢形	口縁部	口端縄施文・沈線・交互刺突		粗い砂	P－1106
図31－227	P－63	Ⅱ層	深鉢形	口縁部	口端縄施文・沈線(鋸歯状/菱形？)・交互刺突		細砂	P－438
図31－228	P－68	Ⅱ層	深鉢形	胴部	RL(横)・沈線・交互刺突		粗い砂・酸化鉄	P－950
図31－229	N－66	Ⅰ層	深鉢形	胴部	RL(斜)・沈線・交互刺突		粗い砂・酸化鉄	P番無し
図32－230	X－35・37・38	Ⅱ層	深鉢形	口縁～底部	口縁縦走縄文RL(斜)・RL(縦)		砂	P－323・828・1024他
図32－231	U－32	Ⅱ層	深鉢形	口縁部	0段多条RL(縦)	ミガキ	砂	P番無し
図32－232	W－33	Ⅱ層	深鉢形	口縁部	LR(横)		砂	P番無し
図32－233	V－33	Ⅱ層	深鉢形	口縁部	RL(縦)	ナデ	砂	P番無し
図32－234	W－33	Ⅱ層	深鉢形	口縁部	RL(縦)		砂	P番無し
図32－235	U－35	Ⅱ層	深鉢形	口縁部	RL(横)	ミガキ	砂	P番無し
図32－236	X－35	Ⅱ層	深鉢形	胴部	RL(縦)		砂	P－1338
図32－237	U－32	Ⅱ層	深鉢形	胴部	LR(横)		砂	P番無し
図32－238	X－35	Ⅱ層	深鉢形	口縁部	口縁縦走縄文RL(斜)・RL(縦)		砂	P－1338、230同一個体
図32－239	X－35	Ⅱ層	深鉢形	口縁部	RL(縦)	ナデ	砂	P－330～339他
図32－240	X－35	Ⅱ層	深鉢形	口縁部	口唇内傾・RL(縦)	ミガキ	砂	P－372
図32－241	V－31	攪乱	深鉢形	底部	LR(斜)・外底面木葉痕		砂	P番無し
図32－242	U－36	Ⅱ層	深鉢形	胴部～底部	RL(縦)		砂・金雲母片	P－1341～1345他
図32－243	V－31	Ⅱ層	深鉢形	胴部	球胴・LR(横)		粗い砂・酸化鉄	P－1956他
図32－244	L－59	Ⅱ層	深鉢形	口縁～胴部	LR(斜)	ナデ	細砂・酸化鉄	P番無し
図33－245	U・V－42	Ⅱ層	深鉢形	胴部～底部	LR(横)		砂	P－65～70・109
図33－246	X－35	Ⅱ層	深鉢形	底部	RL(縦)・外底面網代痕		砂・金雲母片	P－2
図33－247	N・O－63	Ⅰ・Ⅱ層	深鉢形	胴部～底部	ナデ痕強・器面摩滅縄不明		砂	P－1178
図33－248	U・V－34	Ⅱ層	深鉢形	胴部～底部	LR(横・斜)		砂・酸化鉄	P番無し
図33－249	V－33	Ⅱ層	深鉢形	底部	RL(縦)	ナデ	砂	P番無し
図33－250	U－34	Ⅱ層	深鉢形	口縁部	無文(ケズリ・ナデ)	ナデ	砂・金雲母片	P－1363・2631他
図33－251	M－66・67	Ⅱ層	深鉢形	底部欠	口縁内傾/外面ナデ成形・LR(横)		砂	P番無し
図33－252	W－40	Ⅱ層	深鉢形	底部欠	口唇指頭圧痕・RL(斜・横)		砂	P－230・1269

出土石器

図版番号	器種	出土地点	層位	石質	長さ(㎜)	幅(㎜)	厚さ(㎜)	重さ(g)	取上番号	備考
図34－1	石鏃	V－40	Ⅱ	珪質頁岩	17.5	14.9	3.3	0.8	S－262	凹基無茎・小型
図34－2	石鏃	V－39	Ⅱ	珪質頁岩	17.5	14.1	2.2	0.5	S－466	平基無茎・小型・基部左側端部破損
図34－3	石鏃	V－40	Ⅱ	珪質頁岩	19.4	13.0	3.3	0.7	S－216	平基無茎・小型
図34－4	石鏃	W－36	Ⅱ	珪質頁岩	26.1	16.9	3.7	1.1	S－100	凹基無茎
図34－5	石鏃	T－69	Ⅳ	珪質頁岩	28.0	18.0	5.0	1.9	S－69	無茎・先端部焼け爆ぜ破損
図34－6	石鏃	A区トレンチ	Ⅳ	珪質頁岩	26.3	17.4	3.3	1.0	S番無し	凹基無茎
図34－7	石鏃	V－41	Ⅱ	珪質頁岩	28.2	18.6	3.6	1.5	S－210	平基無茎・先端破損欠失
図34－8	石鏃	SV－2	覆土	珪質頁岩	25.5	17.3	5.2	1.6	S－3	凹基無茎・先端摩耗
図34－9	石鏃	U－40	Ⅱ	珪質頁岩	22.7	16.5	4.6	1.2	S－98	凹基無茎・未製品か？
図34－10	石鏃	U－41	Ⅱ	珪質頁岩	23.7	14.7	3.6	0.9	S－205	平基無茎・左側縁破損
図34－11	石鏃	V－31	Ⅱ	珪質頁岩	38.0	14.5	6.2	2.7	S－1399	平基無茎・五角形鏃・一次剥離面残
図34－12	石鏃	R－77	Ⅱ下位	珪質頁岩	39.0	13.0	4.5	1.7	S－14	平基無茎・体部抉り、異形
図34－13	石鏃	O－61	Ⅱ	珪質頁岩	36.0	17.0	3.5	1.5	S番無し	凸基有茎・先端部欠・基部にアスファルト付着
図34－14	石鏃	U－36	Ⅱ	珪質頁岩	29.2	15.5	4.4	1.4	S－866	凸基有茎・なで肩状の基部破損・粗い調整
図34－15	石鏃	L－54	Ⅱ	珪質頁岩	29.5	11.3	4.1	0.9	S番無し	凸基有茎・なで肩状の基部
図34－16	石鏃	X－34	Ⅱ	珪質頁岩	25.1	13.9	4.9	1.1	S－336	凸基有茎・基部破損・基部にアスファルト
図34－17	石鏃	M－67	Ⅱ	珪質頁岩	22.0	11.0	5.5	0.6	S番無し	凸基有茎・小型

図版番号	器種	出土地点	層位	石質	長さ(㎜)	幅(㎜)	厚さ(㎜)	重さ(ｇ)	取上番号	備考
図34－18	石鏃	N－65	Ⅱ	珪質頁岩	27.0	9.0	4.0	0.8	S番無し	凸基有茎・小型細身
図34－19	石鏃	R－59	Ⅱ	珪質頁岩	21.0	17.0	4.1	1.1	S－5	凸基有茎・体部上半破損欠失
図34－20	石錐	V－40	盛土	珪質頁岩	47.7	24.9	7.0	6.0	S番無し	横長剥片素材・側縁を棒状の錐部に両面調整
図34－21	石錐	W－38	Ⅳ	珪質頁岩	34.3	24.1	4.9	3.2	S－1709	錐部三角・オール状・両面調整・錐端部光沢
図34－22	石錐	V－39	Ⅱ	珪質頁岩	19.8	14.1	3.8	0.9	S－285	剥片端部・側縁調整・錐端部摩耗、光沢、側縁潰れ
図34－23	石錐	W－30	Ⅱ	珪質頁岩	18.7	10.6	2.1	0.3	S－1502	小剥片orチップ素材・端部調整・石鏃でも可
図34－24	石匙	X－37	Ⅱ	珪質頁岩	63.1	25.4	9.8	12.9	S－101	縦形・刃部欠失・背面調整用剥離、松原型・早期
図34－25	石匙	U－39	Ⅱ	珪質頁岩	58.1	25.8	9.9	13.9	S－256	縦形・周縁調整・腹面の側縁にも小剥離
図34－26	石匙	U－34	Ⅱ	珪質頁岩	22.1	25.4	8.6	5.7	S－1001	縦形・破損胴部片・片面両側縁急角度調整
図34－27	石匙	V－40	盛土	珪質頁岩	25.8	11.0	4.9	1.0	S番無し	粗い背面周縁調整・腹面調整つまみ部・とりあえず石匙か？
図34－28	石篦	Q－60	Ⅲ	珪質頁岩	96.0	50.0	18.0	83.1	S－10	短冊形・背面に礫面残
図34－29	楔形石器	W－34	Ⅱ	珪質頁岩	29.7	30.1	8.0	7.1	S－730	上下一対の刃部・両側縁に表皮残
図34－30	楔形石器	V－41	Ⅱ	珪質頁岩	29.8	28.3	6.5	5.2	S番無し	上下一対の刃部・一側縁に表皮残
図34－31	楔形石器	V－30	盛土	珪質頁岩	25.8	25.6	6.5	3.4	S番無し	破砕片
図34－32	楔形石器	SX－3	1層	珪質頁岩	41.5	33.5	14.6	24.6	S番無し	ピエスだろう？上端部と右側縁の潰れ
図34－33	楔形石器	V－38	Ⅱ	珪質頁岩	31.4	13.8	8.1	3.6	S－584A	破砕、せん断片・背面に表皮残
図34－34	スクレイパー	P－64	Ⅱ	珪質頁岩	32.0	21.5	6.6	4.3	S－73	両面の両側縁調整・破損・石匙？
図34－35	スクレイパー	S－67	Ⅱ	玉髄質珪質頁岩	16.0	23.0	3.0	1.3	S－54	薄い小剥片素材・両面両側縁調整
図34－36	スクレイパー	T－61	Ⅱ	珪質頁岩	51.5	35.5	15.0	21.6	S－30	背面調整主体・急角度調整・(掻器)
図34－37	スクレイパー	Q－63	Ⅳ	珪質頁岩	27.0	23.0	8.0	4.0	S－60	背面の両側縁調整・端部破損・バルブ残
図34－38	スクレイパー	T－65	Ⅳ	珪質頁岩	38.0	26.5	12.5	11.3	S－68	背面周縁調整・急角度調整・(掻器)
図34－39	スクレイパー	U－39	Ⅱ	珪質頁岩	60.3	47.4	12.0	28.7	S－203	背面周縁調整・調整急角度・掻器
図34－40	石匙	V－37	Ⅳ	珪質頁岩	25.0	22.0	5.4	2.9	S－438	縦形・破損刃部片・破損後使用、腹面に剥離と潰れ
図35－41	スクレイパー	P－66	Ⅳ	珪質頁岩	36.0	41.0	12.5	17.9	S－27	背面周縁調整・急角度調整・(掻器)
図35－42	スクレイパー	W－36	Ⅱ	珪質頁岩	53.3	36.3	11.3	20.5	S－331	縦長剥片素材・下端部の両面に剥離・背面両側縁に粗い調整
図35－43	スクレイパー	U－41	Ⅱ	珪質頁岩	59.0	45.1	12.7	25.3	S－2670	背面両側縁調整・左側縁折りとるような調整
図35－44	スクレイパー	X－34	Ⅱ	珪質頁岩	69.1	25.0	14.4	20.3	S－112	破損品・片面一側縁調整・粗い調整
図35－45	スクレイパー	T－63	Ⅳ	珪質頁岩	53.0	24.5	8.0	6.4	S－71	一側縁に錯交剥離調整・端部細身-錐機能？
図35－46	スクレイパー	X－48	攪乱	珪質頁岩	35.1	21.0	8.9	4.8	S－8	基部破損・粗い両面周縁調整
図35－47	スクレイパー	R－69	Ⅳ	珪質頁岩	20.0	26.0	7.5	3.1	S－43	背面両側縁に小剥離調整・素材剥片端部破損
図35－48	スクレイパー	Q－65	Ⅱ	珪質頁岩	28.5	18.5	7.5	3.6	S－28	破損品・片面調整(腹面)一側縁調整
図35－49	スクレイパー	R－62	Ⅳ	珪質頁岩	94.5	38.0	13.0	33.9	S－23	縦長剥片・背面一側縁調整・(削器)
図35－50	スクレイパー	W－40	Ⅱ	珪質頁岩	35.6	29.3	9.2	7.6	S－218	背面周縁調整・調整急角度・掻器
図35－51	スクレイパー	W－38	Ⅱ	珪質頁岩	32.7	35.5	12.2	14.5	S－48	基部破損・背面周縁調整・調整急角度・掻器
図35－52	スクレイパー	R－60	Ⅱ	珪質頁岩	39.0	36.5	10.5	12.3	S－9	背面一側縁(端部)調整・(削器)
図35－53	楔形石器？	R－67	Ⅱ	珪質頁岩	31.0	25.0	11.0	7.2	S－46	四辺形・上辺部潰れ
図35－54	スクレイパー	P－68	Ⅱ	珪質頁岩	37.0	27.0	7.0	5.3	S－47	腹面側縁の一部に簡易な調整
図35－55	磨製石斧	V－32	Ⅱ	頁岩	49.0	22.0	10.0	17.3	S－2400	小型・両側縁擦り切り痕・鑿
図35－56	磨製石斧	W－44	Ⅰ	頁岩	73.5	38.5	14.5	43.7	S番無し	胴部片・再調整
図35－57	磨製石斧	U－40	Ⅱ	緑色凝灰岩	26.0	27.0	21.0	18.1	S－252	破損、基端部片
図35－58	磨製石斧	U－40	Ⅱ	粗粒玄武岩	72.5	51.0	34.0	157.1	S－281	胴上半部破片・敲打痕、研磨なし未製品・製作途中に破損
図35－59	磨製石斧	U－43	Ⅱ	粗粒玄武岩	38.0	34.0	20.0	38.2	S－5	未製品、基部破片
図36－60	磨製石斧	Q－70	Ⅳ	粗粒玄武岩	53	52	21	79.6	S－53	扁平礫素材、敲打・剥離、刃部破片
図36－61	磨製石斧	表採	表土	粗粒玄武岩	67	46	20	94.9	S番無し	扁平棒状礫、敲打・剥離、基部破損
図36－62	打製石斧	U－36	Ⅱ	粗粒玄武岩	97	51	15	104.1	S－375	片面礫面石斧、早期末～前期初頭
図36－63	剥離礫	R－57	Ⅳ	砂岩	29.0	35.0	11.0	14.8	S－15	扁平小礫素材・両極技法で片側に階段状剥離
図36－64	剥離礫	P－59	Ⅲ	頁岩	63.0	36.0	12.0	40.8	S－11	扁平小礫素材・両極剥離・器面研磨・石錘？ピエス？石斧未製品
図36－65	磨石	T－46	Ⅰ	チャート	145	74	63	862.8	S番無し	三角柱状磨石、両端部に敲き
図36－66	磨石	V－36	Ⅱ	砂岩	149	60	81	1045.0	S－323	三角柱状磨石、側面に弱い磨り、被熱
図36－67	磨石	V－36	Ⅱ	玢岩	161	90	60	1041.9	S－318	三角柱状磨石、弱い磨り、磨面未発達
図36－68	磨石	河床表採		閃緑岩	145	81	48	806.0	S番無し	三角柱状磨石の類、楕円形礫の一辺を使用、磨面の片側に剥離
図36－69	磨石	U－40	Ⅱ	粗粒玄武岩	135	64	45	544.8	S－200	三角柱状磨石、一磨面・側縁剥離、一側縁と端部に敲き
図36－70	磨石	V－40	Ⅳ	粗粒玄武岩	121	67	61	648.6	S－450	三角柱状磨石、破損
図37－71	磨石	W－37	Ⅱ	玢岩	170	71	62	1061.9	S－393	三角柱状磨石、磨面幅広、端部に剥離
図37－72	磨石	X－32	Ⅱ	砂岩	112	70	55	540.3	S－2524	三角柱状磨石、被熱、破損
図37－73	磨石	V－35	Ⅱ	粗粒玄武岩	154	63	56	793.5	S－508	三角柱状磨石、幅広磨面、器面に弱い摩滅、破損
図37－74	磨石	W－40	Ⅱ	玢岩	142	100	69	1094.6	S－78	三角柱状磨石、不整形礫
図37－75	磨石	S－63	Ⅳ	安山岩	144	74	68	907.4	S－36	三角柱状磨石の類、長方形礫の一辺を使用
図37－76	磨石	W－37	Ⅱ	砂岩	161	64	50	714.2	S－397	三角柱状磨石、磨面側縁剥離、被熱
図37－77	磨石	SX－2	覆土	砂岩	155	57	83	1046.4	S－14	三角柱状磨石、磨面側縁剥離、被熱
図38－78	磨石	W－38	Ⅱ	粗粒玄武岩	158	79	48	877.2	S－47	三角柱状磨石、断面四角形礫、端部に敲き
図38－79	磨石	X－37	Ⅱ	緑色凝灰岩(古期)	145	84	44	549.7	S－537	三角柱状磨石、磨面側縁剥離
図38－80	磨石	X－37	Ⅱ	輝緑岩	111	66	34	269.2	S－538	三角柱状磨石、小型、端部敲き
図38－81	磨石	U－36	Ⅱ	粗粒玄武岩	121	80	43	522.1	S－882	三角柱状磨石、磨面側縁剥離、端部に剥離
図38－82	半円状扁平打製石器	V－31	攪乱	ホルンフェルス	102	79	21	183.1	S番無し	とりあえず半扁、周縁調整
図38－83	半円状扁平打製石器	X－37	Ⅱ	緑色凝灰岩(古期)	187	119	36	1102.0	S－389	大型の部類、弱い磨り面
図38－84	敲石	V－40	Ⅱ	砂岩	99	58	28	134.8	S－96	一側縁に広い敲打痕、一側縁に細剥離と弱い潰れ
図38－85	敲石	T－62	Ⅳ	砂岩	142	77	44	670.8	S－61	一側縁に弱い敲打痕
図38－86	敲石	T－61	Ⅱ	砂岩	72	51	28	125.6	S－29	礫両側縁に弱い敲打痕、端部と側縁に剥離
図39－87	敲石	S－77	Ⅲ	頁岩	155	85	77	1022.3	S－12	三角柱状礫の一辺を敲打に使用
図39－88	敲石	R－77	Ⅱ下	粗粒玄武岩	96	64	48	491.8	S－13	楕円形礫の両側縁に敲打痕
図39－89	敲石	O－60	Ⅱ	流紋岩	99	52	35	281.8	S番無し	楕円形礫の一側縁に弱い敲打痕
図39－90	敲石	X－36	Ⅱ	ホルンフェルス	73	63	35	334.9	S－338	やや扁平方形状礫、両端部敲き
図39－91	敲石	X－38	Ⅱ	チャート	110	105	58	915.9	S－63	不整円礫、一端部に敲き
図39－92	敲石	T－36	Ⅱ	チャート	93	98	62	815.6	S－1048	円礫(椀型滓状)、側縁の半分に敲き
図39－93	敲石	W－36	Ⅱ	ホルンフェルス	87	84	50	558.3	S－166	不整円礫、一端部に敲き
図39－94	敲石	X－36	Ⅱ	砂岩	58	47	39	142.5	S－339	円礫、一端部に敲き、使用による三角稜
図39－95	敲石	表採		ホルンフェルス	82	62	52		S番無し	楕円形礫、長軸両端部に敲き
図39－96	敲石	V－36	Ⅱ	チャート	73	46	36	187.7	S－1324	楕円形礫、長軸両端部に敲き
図39－97	敲石	W－40	Ⅱ	ホルンフェルス	72	72	55	532.0	S－77	円礫、周縁敲き

図版番号	器種	出土地点	層位	石質	長さ(㎜)	幅(㎜)	厚さ(㎜)	重さ(g)	取上番号	備考
図39－98	敲石	P－69	Ⅳ	粗粒玄武岩	135	66	35	439.6	S－49	礫の一端部に弱い敲打痕
図39－99	凹み石	X－35	Ⅱ	チャート	116	69	65	773.0	S－105	楕円形礫、一側縁に敲き、極浅い凹み、小型台石
図39－100	凹み石	S－62	Ⅳ	凝灰岩	113	52	45	427.1	S－34	楕円形礫の一器表面に浅い凹み、一端部に弱い敲打
図39－101	凹み石	W－32	Ⅱ	チャート	114	62	68	685.9	S－1716	楕円形礫、側縁の中央部に敲き、極浅い凹み小型台石
図40－102	凹み石	U－36	Ⅱ	凝灰岩	73	83	36	261.6	S－824	破損、両面に凹み
図40－103	凹み石	U－61	Ⅳ	砂岩	88	72	25	219.4	S－65	扁平礫の両面、中央部に弱い敲打痕跡
図40－104	凹み石	P－69	Ⅲ	砂岩	108	96	49	684.0	S－51	扁平円礫の一器表面に凹み、側縁の一部敲打痕
図40－105	磨石	X－34	Ⅱ	玢岩	128	108	70	1407.5	S－333	扁平円礫、器面の摩滅
図40－106	磨石	S－63	Ⅱ	流紋岩	99	89	53	682.5	S－35	厚みのある扁平円礫　、器表面ツルツル
図40－107	磨石	V－30	Ⅳ	チャート	97	80	49	564.5	S－1278	扁平楕円礫、器面の摩滅
図40－108	磨石	Q－70	Ⅳ	安山岩	96	82	34	401.4	S－52	扁平円礫　、器表面ツルツル
図40－109	磨石	X－31	Ⅱ	輝緑岩	103	62	32	337.9	S番無し	扁平楕円礫、器面の摩滅
図40－110	磨石	S－62	Ⅳ	凝灰岩	94	85	30	351.9	S－32	扁平円礫
図40－111	磨石	S－58		ホルンフェルス	110	82	50	655.7	S－49	厚みのある扁平楕円形礫　、器表面ツルツル
図40－112	磨石	V－32	Ⅱ	緑色凝灰岩(古期)	83	78	44	429.0	S－2401	扁平楕円礫、器面の摩滅
図40－113	磨石	X－37	Ⅱ	輝緑岩	81	53	27	204.1	S－207	扁平楕円礫、器面の摩滅
図40－114	磨石	S－52	Ⅲ	砂岩	73	64	29	189.1	S－1	扁平円礫　、器表面ツルツル
図40－115	磨石	U－41	Ⅱ	チャート	51	43	25	89.2	S番無し	扁平円礫、器面の摩滅
図40－116	自然礫	P－61	Ⅳ	片岩	53	38	18	47.2	S－19	86～90まで比較的近い場所でまとまって出土
図40－117	自然礫	P－61	Ⅳ	凝灰岩	56	39	16	50.0	S－20	
図40－118	自然礫	P－62	Ⅳ	流紋岩	57	33	11	26.1	S－21	
図40－119	自然礫	P－62	Ⅳ	流紋岩	49	40	11	34.1	S－22	
図40－120	自然礫	Q－61	Ⅳ	頁岩	51	43	12	33.0	S－17	
図40－121	磨石	U－35	Ⅱ	チャート	137	71	62	871.6	S－1346	楕円礫、器面の摩滅
図40－122	磨石	X－33	Ⅱ	チャート	125	94	73	1204.9	S－337	楕円礫、器面の摩滅
図40－123	磨石	W－35	盛土	安山岩	90	100	76	920.2	S番無し	円礫
図40－124	敲石	U－36	Ⅱ	安山岩	86	66	71	586.6	S－761	一器面に変色、円礫
図40－125	磨石	V－33	Ⅱ	チャート	51	50	44	164.7	S－2426	球状礫、器面摩滅
図40－126	磨石	U－41	Ⅱ	チャート	33	36	26	46.6	S番無し	球状礫、器面摩滅
図41－127	礫器	R－54	Ⅲ	砂岩	185	63	26	327.3	S－3	長方形板状礫、一側縁と薄い端部に調整剥離
図41－128	礫器	W－38	Ⅱ	粗粒玄武岩	118	54	24	239.4	S－57	扁平楕円形礫の長軸一端部に剥離調整
図41－129	礫器	U－39	Ⅱ	チャート	62	63	17	76.0	S－204	周縁に細剥離、一部弱い潰れ
図41－130	礫器	V－44	Ⅱ	緑色凝灰岩(古期)	128	93	48	648.8	S－3	一側縁調整、
図41－131	台石	X－33	Ⅱ	緑色凝灰岩(古期)	99	48	47	239.7	S－1564	三角柱状礫、破損、器面に弱い摩滅
図41－132	台石	X－37	Ⅳ	緑色凝灰岩(古期)	132	69	98	816.5	S－1528	一器面に弱い摩滅・変色
図41－133	台石	W－35	Ⅱ	輝緑岩	192	148	55	2466.2	S－500	扁平礫、
図41－134	台石	U－60	Ⅱ	安山岩	166	116	52	1539.2	S－57	楕円形礫、一器面の中央部摩滅(ツルツル)
図41－135	台石	T－69	Ⅳ	安山岩	298	300	45	4642.9	S－62	大型礫、中央部に摩滅
図41－136	台石	R－60	Ⅱ	砂岩	235	219	45	2864.5	S－6	円形に剥離調整、片側(面)は自然面、大型の礫器？
図42－137	台石	2号集石		砂岩	344	270	116	13,380.0	S－968	図示器面に敲打痕
図42－138	台石	V－37	Ⅱ	チャート	216	126	124	3233.1	S－368	一器面に摩滅
図42－139	台石	W－35	Ⅱ	角礫岩	408	379	109	22,300.0	S－501	図示した器面摩耗
図42－140	台石	SK－2	底面	角礫岩	400	219	172	21,580.0		図示した器面摩耗
図43－141	台石	W－38	Ⅳ	頁岩	385	277	136	19,800.0	S－476	図示した器面摩耗
図43－142	台石	W－36	Ⅳ	安山岩	330	290	152	20,120.0	S－483	図示した器面摩耗・変色
図43－143	石刀	Q－61	Ⅱ	粘板岩	190	35	16	142.9	S－16	粗い研磨
図43－144	軽石製品	W－34	Ⅱ	軽石	75	63	55	51.6	S－793	球形軽石、一部を磨り平坦面

横沢山(2)遺跡

遺構外出土石器

図版番号	器種	出土地点	層位	石質	長さ(㎜)	幅(㎜)	厚さ(㎜)	重さ(g)	取上番号	備考
図44	敲石	トレンチ1	Ⅳ	砂岩	126	63	25	244.7	S－1	礫端部剥離・側縁に敲き・早期？

引用・参考文献

青森県教育委員会　1983『鴨平(1)遺跡』　青森県埋蔵文化財調査報告書第 72集
青森県教育委員会　1984『和野前山遺跡』　青森県埋蔵文化財調査報告書第 82集
青森県教育委員会　1984『韮窪遺跡』　青森県埋蔵文化財調査報告書第 84集
青森県教育委員会　1992『沢堀込遺跡』　青森県埋蔵文化財調査報告書第144集
青森県教育委員会　1993『野場(5)遺跡』　青森県埋蔵文化財調査報告書第150集
青森県教育委員会　1998『見立山遺跡・弥次郎窪遺跡Ⅱ』　青森県埋蔵文化財調査報告書第238集
青森県教育委員会　1999『櫛引遺跡』　青森県埋蔵文化財調査報告書第263集
青森県教育委員会　2003『楢館遺跡』　青森県埋蔵文化財調査報告書第342集
青森県教育委員会　2008『荒屋敷久保(1)遺跡』　青森県埋蔵文化財調査報告書第453集
八戸市教育委員会　1986『八戸新都市区域内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ』「鳥木沢遺跡」　八戸市埋蔵文化財調査報告書第 17集
八戸市教育委員会　1989『赤御堂遺跡発掘調査報告書』　八戸市埋蔵文化財調査報告書第 33集
八戸市教育委員会　2004『牛ヶ沢(4)遺跡Ⅲ』　八戸市埋蔵文化財調査報告書第104集
八戸市教育委員会　2004『田向遺跡Ⅰ』　八戸市埋蔵文化財調査報告書第105集
階上町教育委員会　1989『白座遺跡・野場(3)遺跡』
階上町教育委員会　2007『寺下遺跡・笹畑遺跡発掘調査報告書』
(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1996『牧田貝塚発掘調査報告書』　岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第241集
(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2002『沢田２遺跡発掘調査報告書』　岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第396集
(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2002『新田遺跡発掘調査報告書』　岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第405集
(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2006『大清水上遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第475集
相原　淳一他　1982「特集日計式土器群の成立と解体」『赤い本 創刊号』赤い本同人会
大沼　忠春　1985「魚骨文の新例について」『北海道考古学』第21号
茅野　嘉雄　2002「いわゆる結節回転文から見た円筒下層ａ式について」『専修考古学』第９号

作業状況　（Ｅ→）

作業状況　（ＳＥ→）

基本層序　①　（Ｎ→）

基本層序　②　（Ｓ→）

写真１　荒屋敷久保（２）遺跡　作業状況・基本層序

第１号土坑　土層　（Ｓ→）

第１号土坑　完掘　（Ｎ→）

第３号土坑　土層　（ＮＥ→）

第３号土坑　完掘　（ＮＥ→）

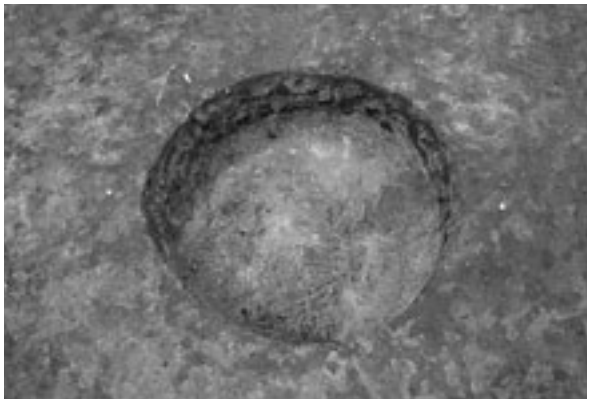
第10号土坑　土層　（ＳＷ→）

第10号土坑　完掘　（ＳＷ→）

第５～８号土坑検出状況　（Ｗ→）

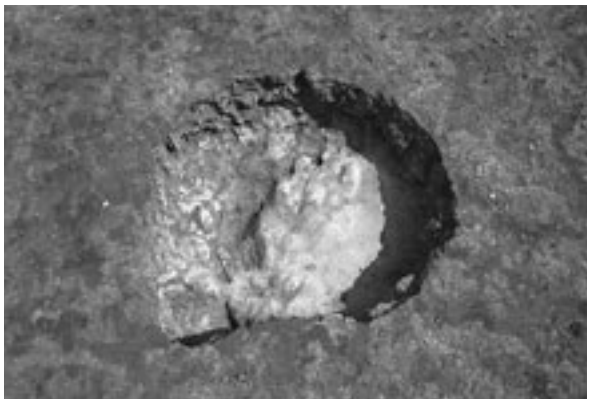
写真２　荒屋敷久保（２）遺跡　土坑（１）

第５号土坑　土層　（S→）



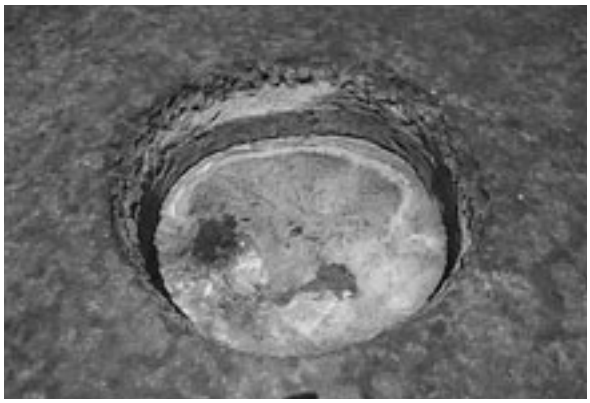
第５号土坑　完掘　（S→）

第６号土坑　土層　（S→）



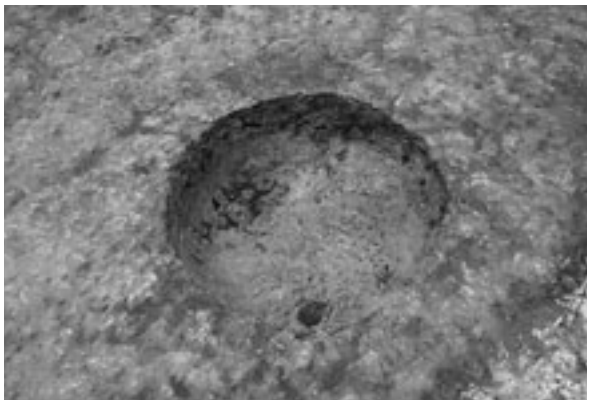
第６号土坑　完掘　（S→）

第７号土坑　土層　（S→）



第７号土坑　完掘　（S→）

第８号土坑　土層　（S→）



第８号土坑　完掘　（S→）

写真３　荒屋敷久保(２)遺跡　土坑(２)

第１号溝状土坑土層　（ＳＷ→）

第２号溝状土坑土層　（ＳＷ→）

第３号溝状土坑土層　（ＳＷ→）

第４号溝状土坑土層　（ＳＷ→）

第５号溝状土坑土層　（Ｗ→）

第６号溝状土坑土層　（Ｗ→）

第７号溝状土坑土層　（ＳＥ→）

第８号溝状土坑土層　（ＮＷ→）

第１号溝跡　完掘　（ＮＥ→）

写真４　荒屋敷久保（２）遺跡　溝状土坑・溝跡

A区トレンチ精査作業状況　（E→）

B区近景･包含層調査状況　（W→）

B区平坦部精査作業状況　（ＥＮ→）

写真５　横沢山（１）遺跡　調査状況

基本層序　①　（W→）

基本層序　③　（W→）

B区第１号土坑土層　（E→）

B区第１号土坑完掘　（E→）

B区第２号土坑土層　（N→）

B区第２号土坑完掘　（NW→）

B区第３号土坑土層　（SW→）

B区第３号土坑完掘　（W→）

写真６　横沢山（１）遺跡　基本層序・土坑（１）

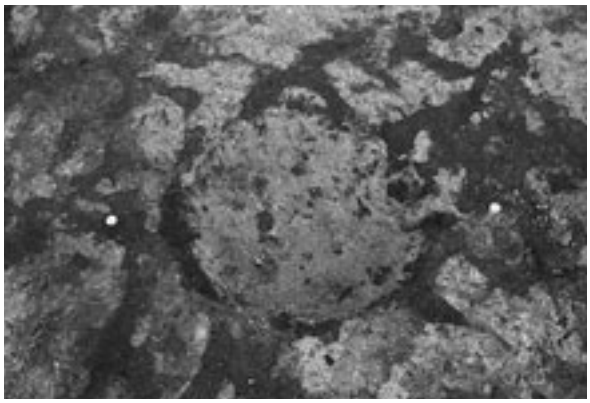
B区第４号土坑土層　（S→）

B区第４号土坑完掘　（S→）

B区第６号土坑土層　（SW→）

B区第６号土坑完掘　（S→）

B区第７号土坑土層　（W→）



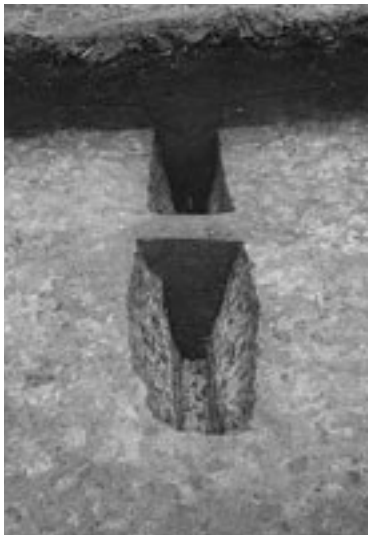
B区第７号土坑完掘　（W→）

B区野外炉土層　（W→）

B区野外炉完掘　（N→）

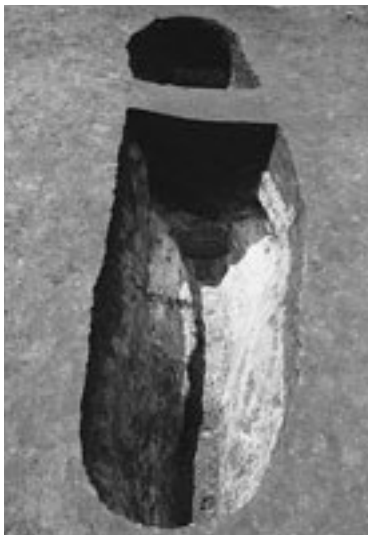
写真７　横沢山（１）遺跡　土坑（２）・野外炉

A区第１号溝状土坑土層　（S→）



A区第２号溝状土坑土層　（S→）

B区第１号溝状土坑完掘　（N→）



B区第２号溝状土坑土層　（N→）

B区第３号･４号溝状土坑完掘　（ＮＥ→）

B区第５号溝状土坑土層　（S→）

B区第６号溝状土坑土層　（E→）

B区第７号溝状土坑土層　（W→）

写真８　横沢山（１）遺跡　溝状土坑（１）

B区第８号溝状土坑土層（ＳＷ→）

B区第９号溝状土坑土層　（Ｓ→）

B区第10号溝状土坑土層　（Ｓ→）

B区第11号溝状土坑土層（ＳＷ→）

B区第12号溝状土坑土層（ＳＷ→）

B区第13号溝状土坑土層（ＳＷ→）

B区第14号溝状土坑土層　（Ｅ→）

B区第15号溝状土坑土層　（Ｓ→）

B区第16号溝状土坑土層　（Ｗ→）

写真９　横沢山（１）遺跡　溝状土坑（２）

B区第17号溝状土坑土層　（W→）

B区第18号溝状土坑土層（ＳＷ→）

B区第19号溝状土坑土層　（W→）

B区第１号炭窯完掘　（Ｅ→）

B区第２号炭窯土層　（Ｅ→）

B区第３号炭窯完掘　（ＮＥ→）

B区第４号炭窯完掘　（ＮＥ→）

B区第２号炭窯精査作業状況　（Ｅ→）

写真10　横沢山（１）遺跡　溝状土坑（３）・炭窯

B区第１号集石遺構　（E→）

B区第２号集石遺構　（ＳＥ→）

B区第３号集石遺構　（E→）

B区第４号集石遺構　（ＳＥ→）

B区第５号集石遺構　（N→）

B区第６号集石遺構　（N→）

写真11　横沢山（１）遺跡　集石遺構

B区包含層調査状況　（ＥＮ→）

B区包含層遺物出土状況　（W→）

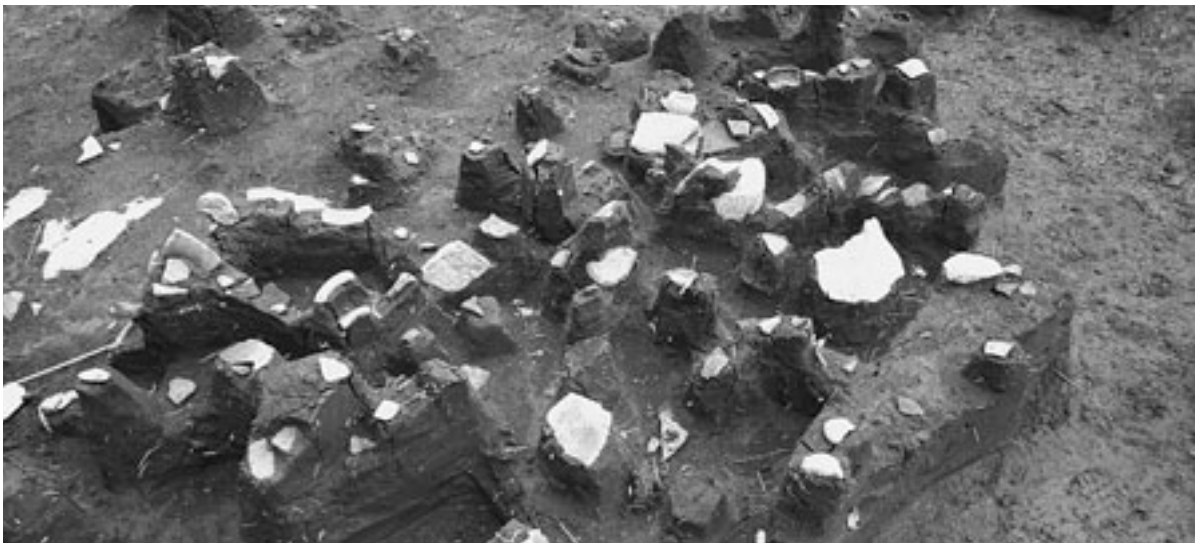
B区包含層調査状況　（Ｅ→）

B区包含層調査状況　（ＳＥ→）

写真12　横沢山（１）遺跡　Ｂ区包含層調査状況

Ｂ区包含層・U-36グリッド遺物出土状況　（ＮＥ→）

Ｂ区包含層・U-37グリッド大木３式土器出土状況　（Ｅ→）



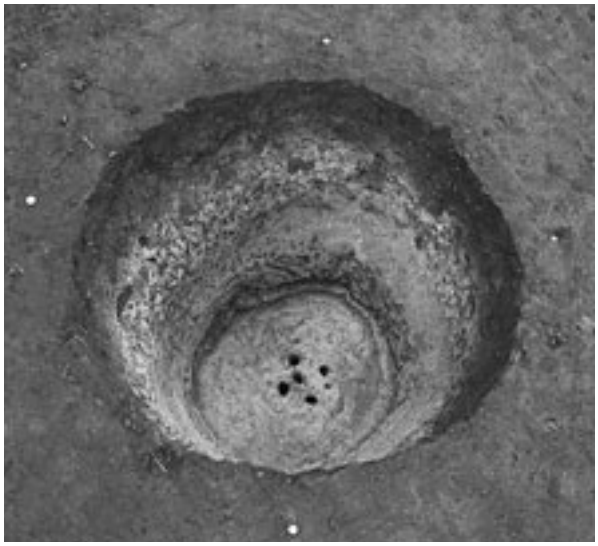
Ｂ区包含層・X-37グリッド遺物出土状況　（W→）

写真13　横沢山（１）遺跡　Ｂ区包含層遺物出土状況

トレンチ11完掘　（ＳＥ→）

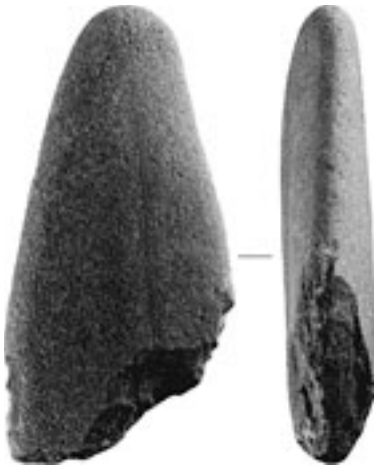
トレンチ８完掘　（ＳＥ→）

第１号土坑　土層　（Ｅ→）



第１号土坑　完掘　（Ｅ→）

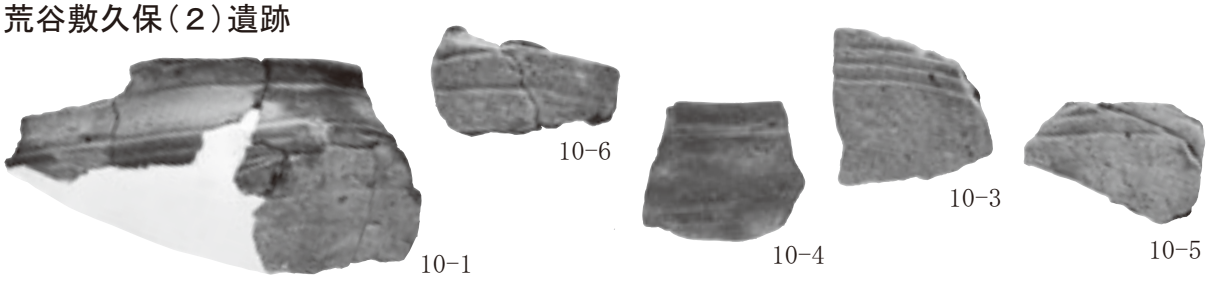
第１号溝状土坑土層　（Ｗ→）



出土遺物

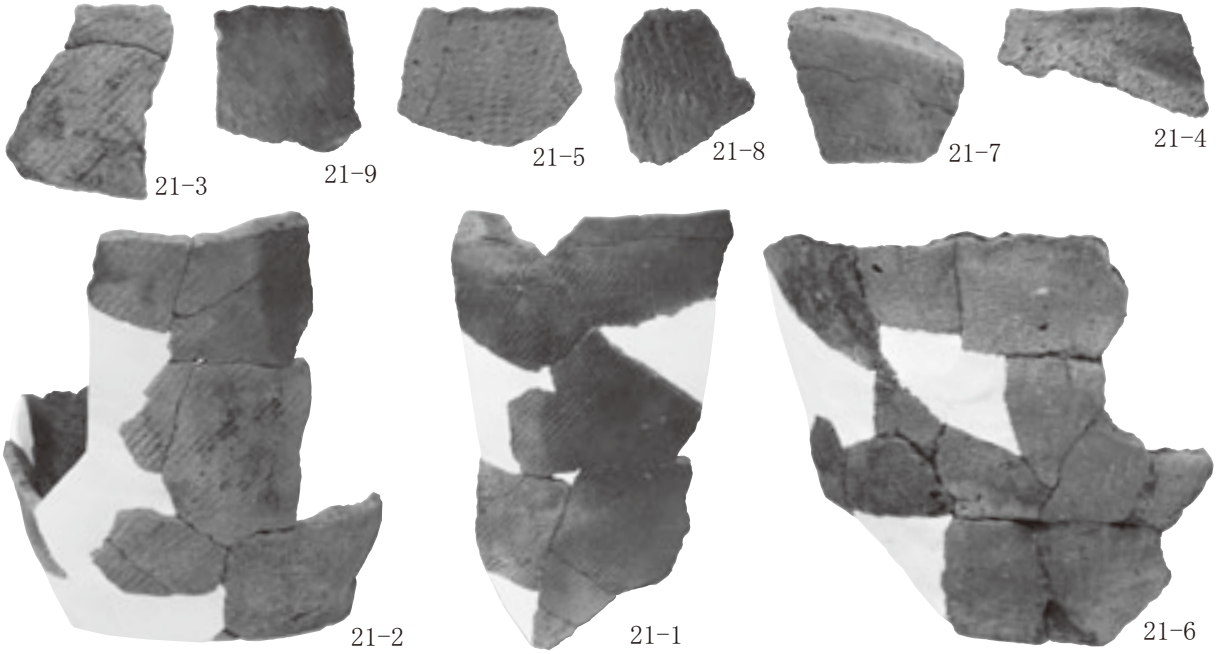
写真14　横沢山（２）遺跡　トレンチ完掘・土坑・溝状土坑・出土遺物

荒谷敷久保（２）遺跡

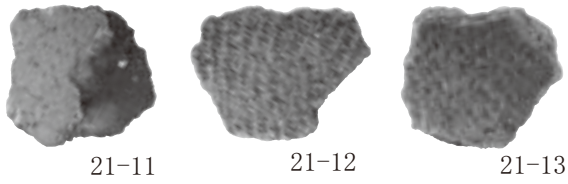


横沢山（１）遺跡

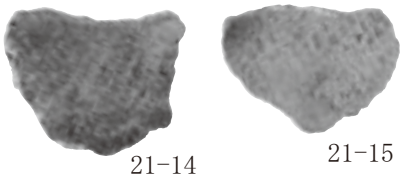
第２号土坑



第４号土坑

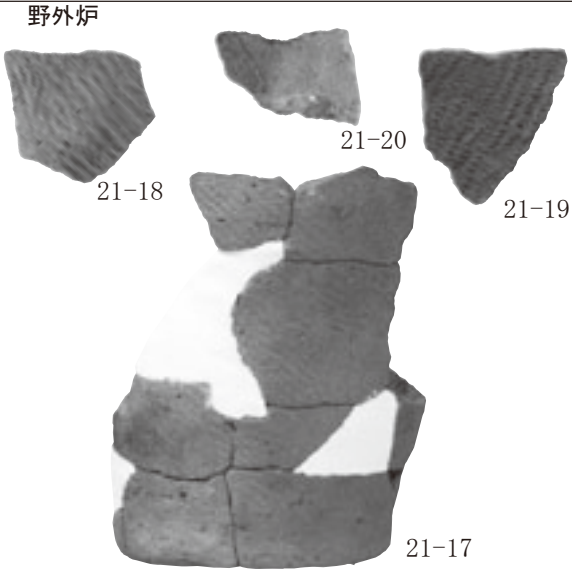


第８号土坑

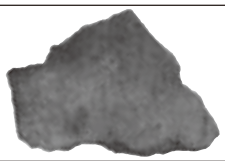


第９号土坑

野外炉



第３号土坑



第２号集石遺構

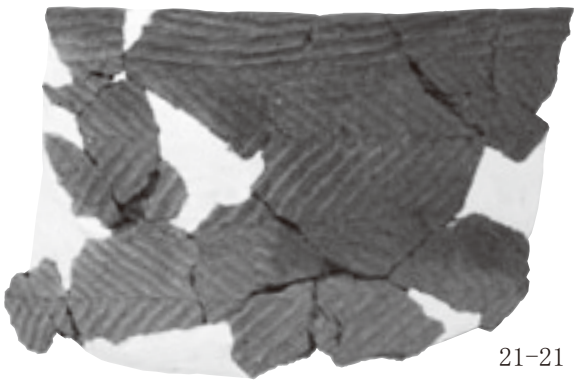


写真15　荒屋敷久保（２）遺跡出土遺物・横沢山（１）遺跡遺構内出土遺物

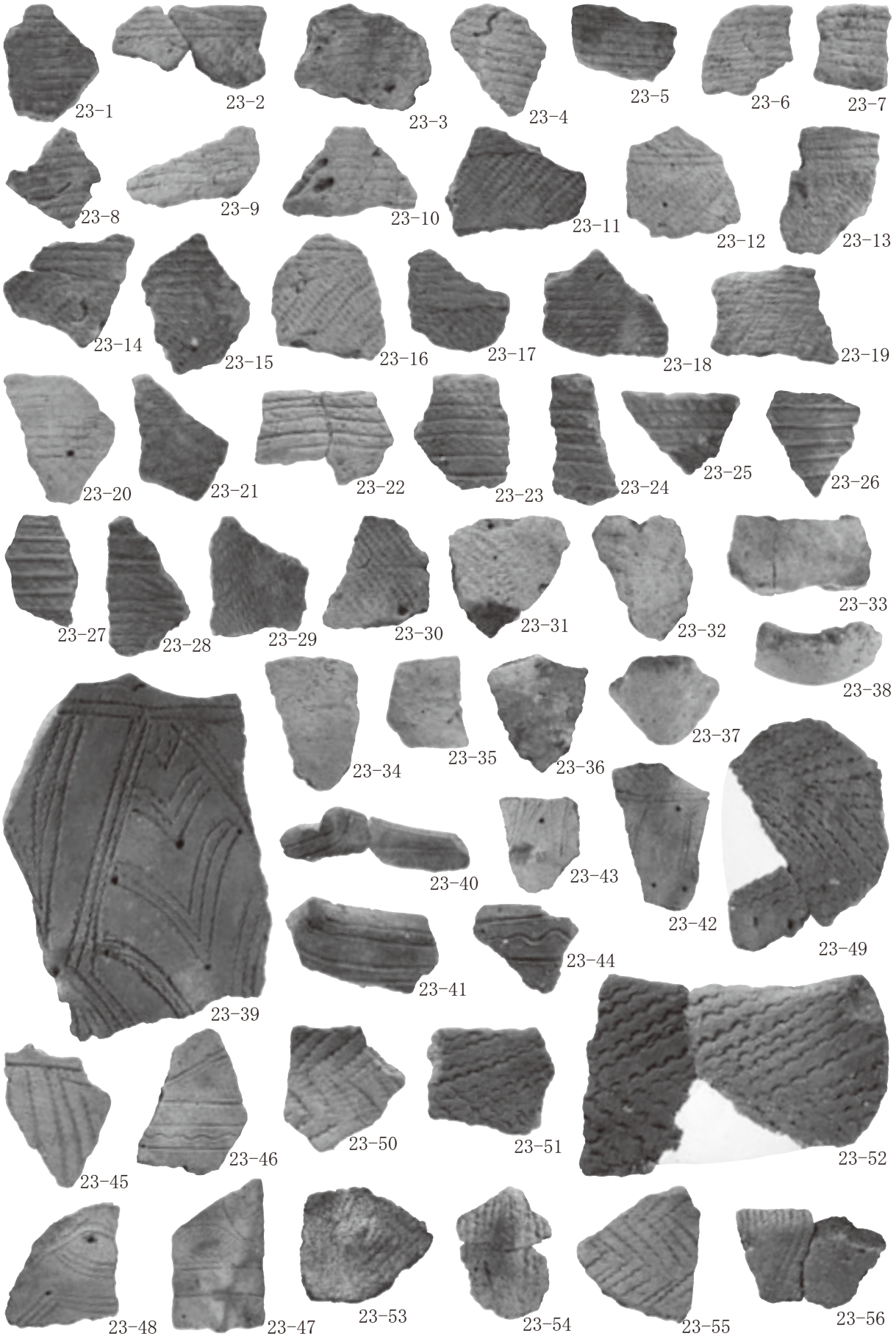


写真16　横沢山（1）遺跡遺構外出土遺物（1）

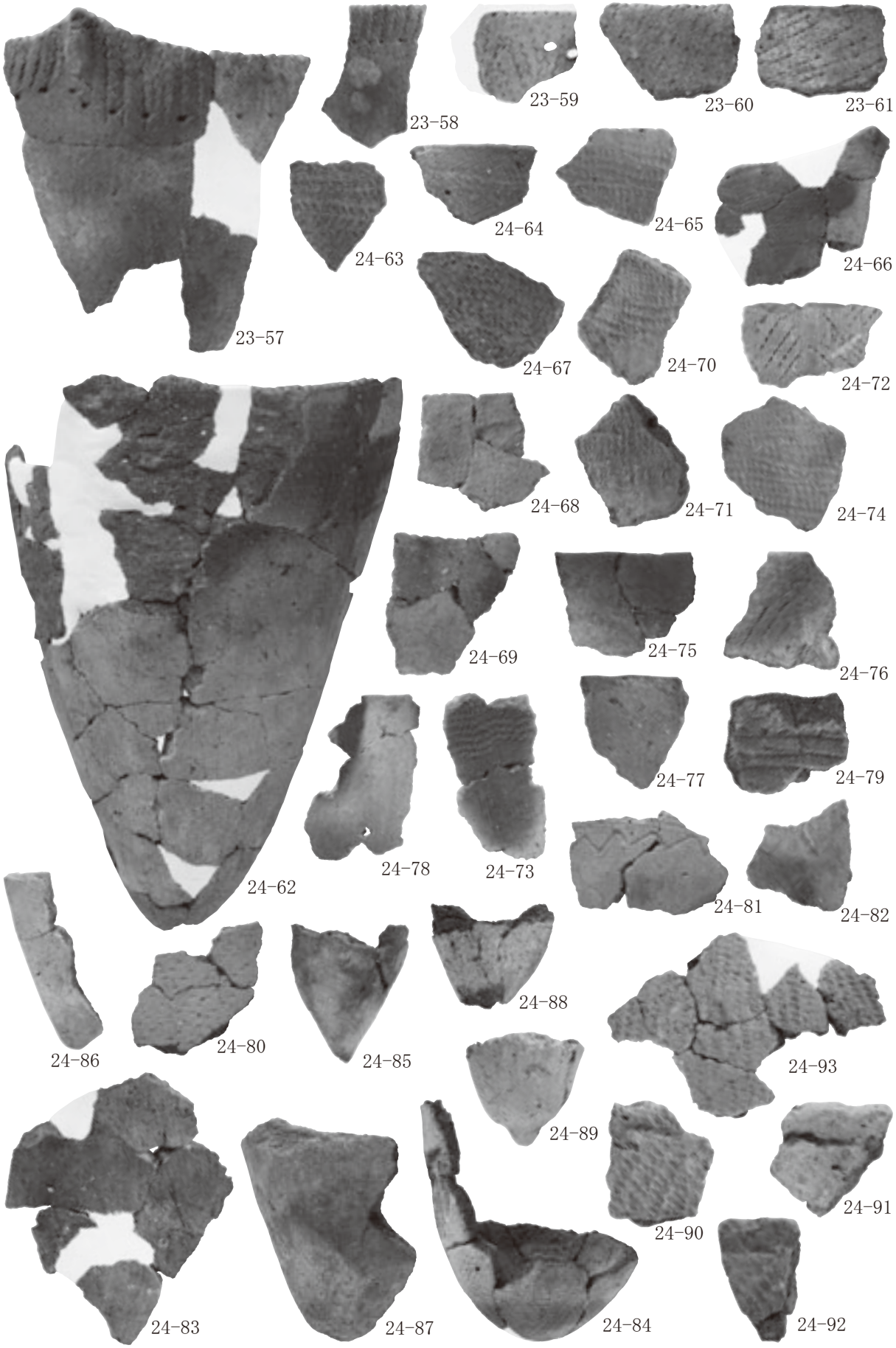


写真17　横沢山（１）遺跡遺構外出土遺物（２）

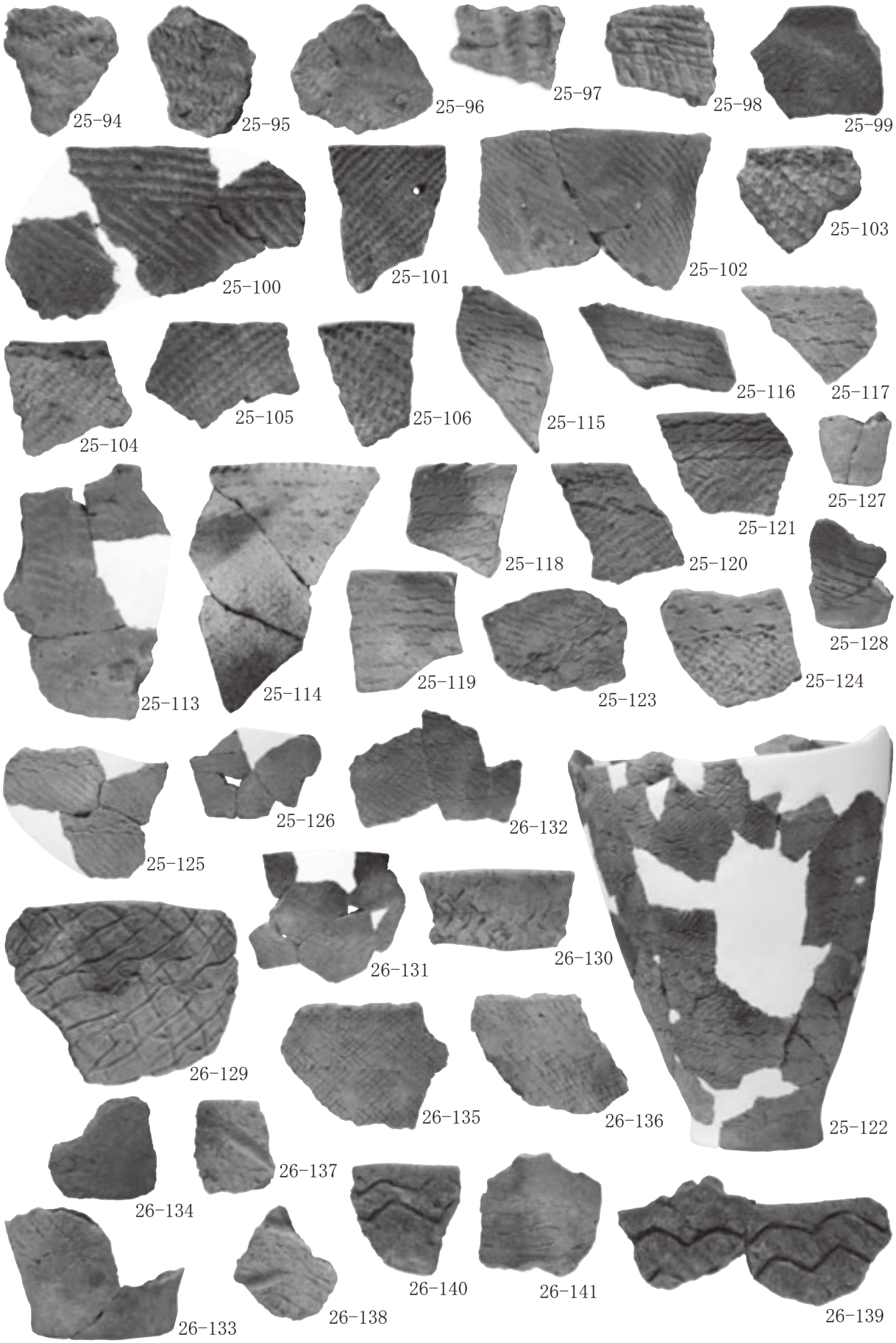


写真18　横沢山（１）遺跡遺構外出土遺物（３）

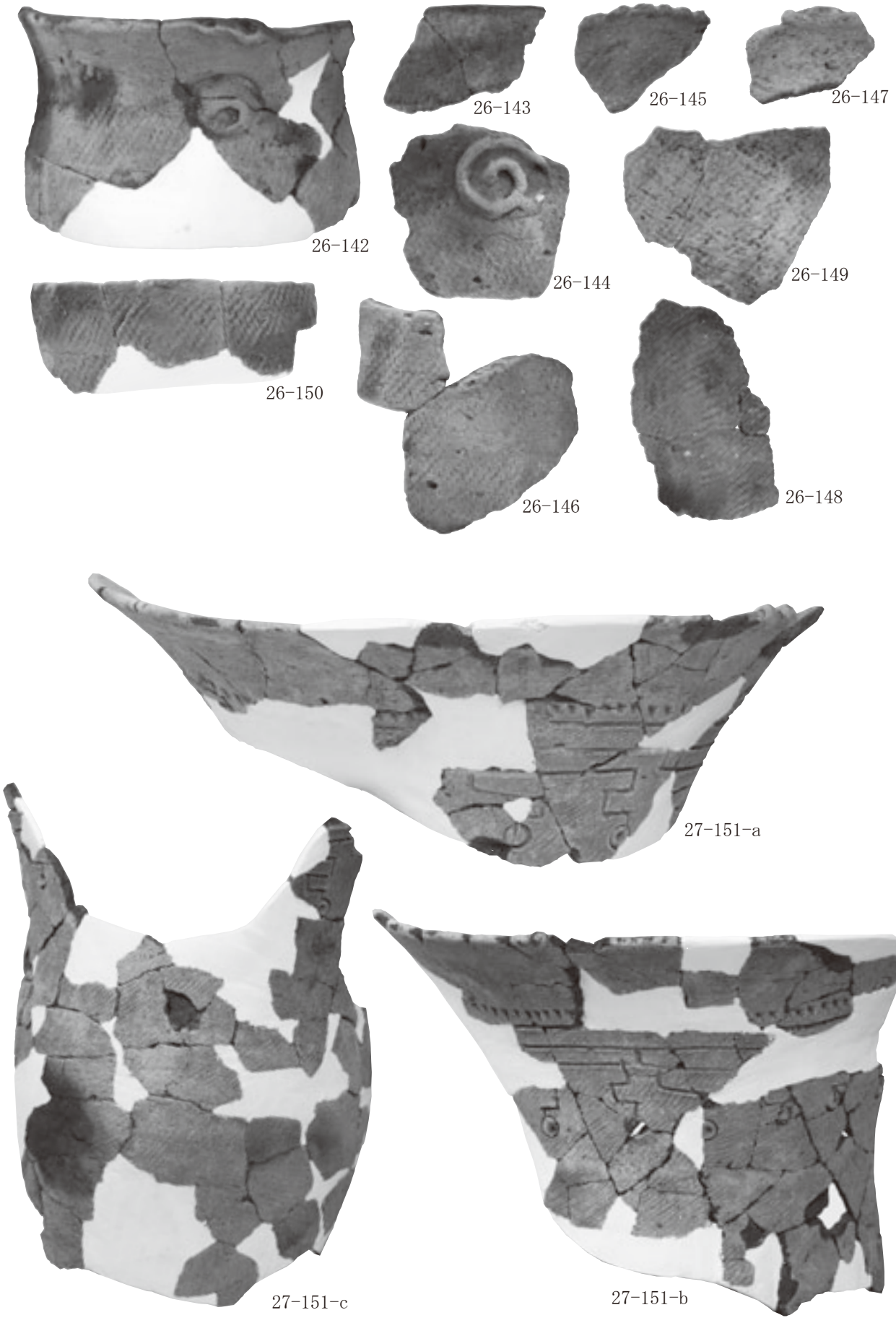


写真19　横沢山（１）遺跡遺構外出土遺物（４）

写真20　横沢山（１）遺跡遺構外出土遺物（５）

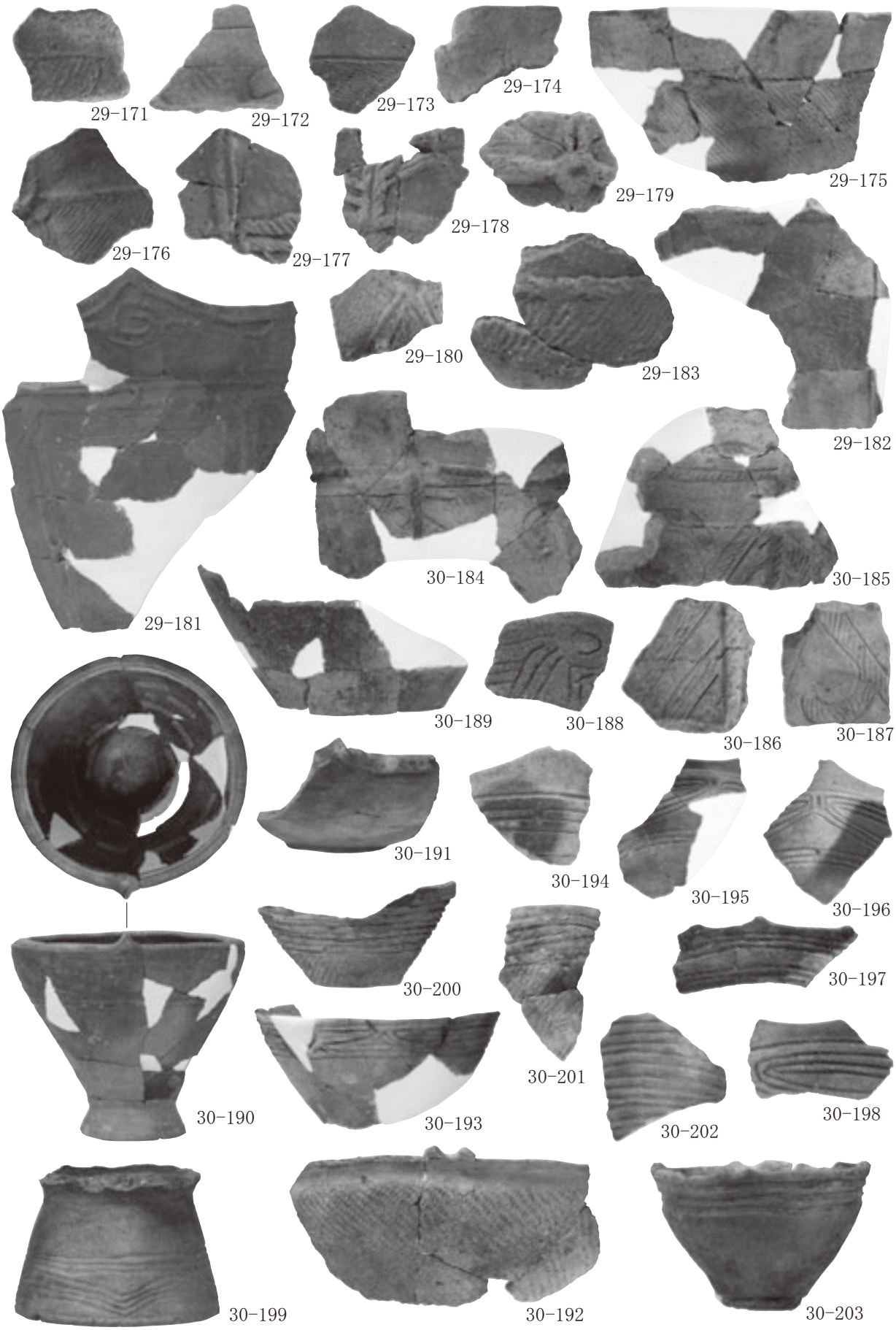


写真21　横沢山（１）遺跡遺構外出土遺物（６）

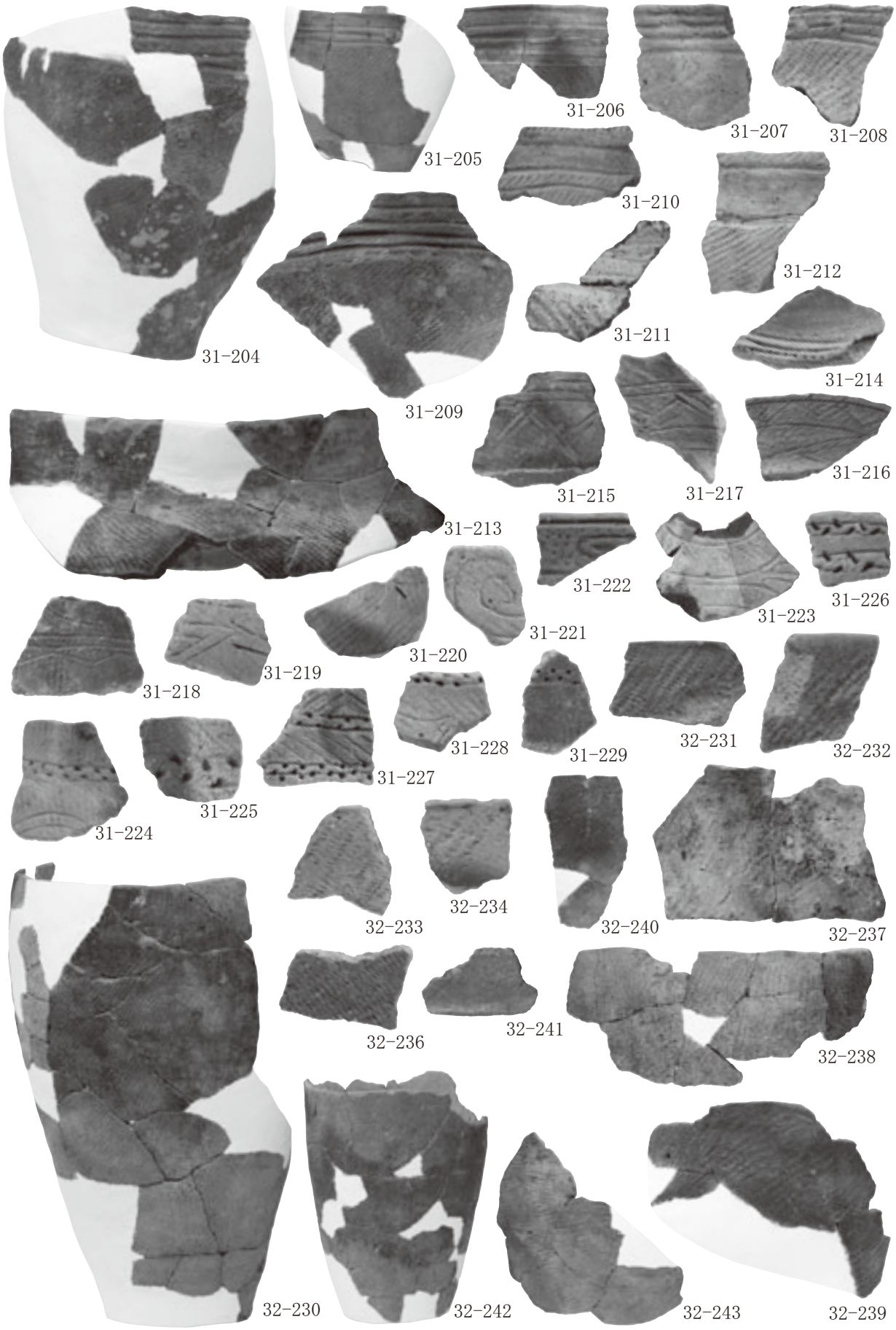


写真22　横沢山（１）遺跡遺構外出土遺物（７）

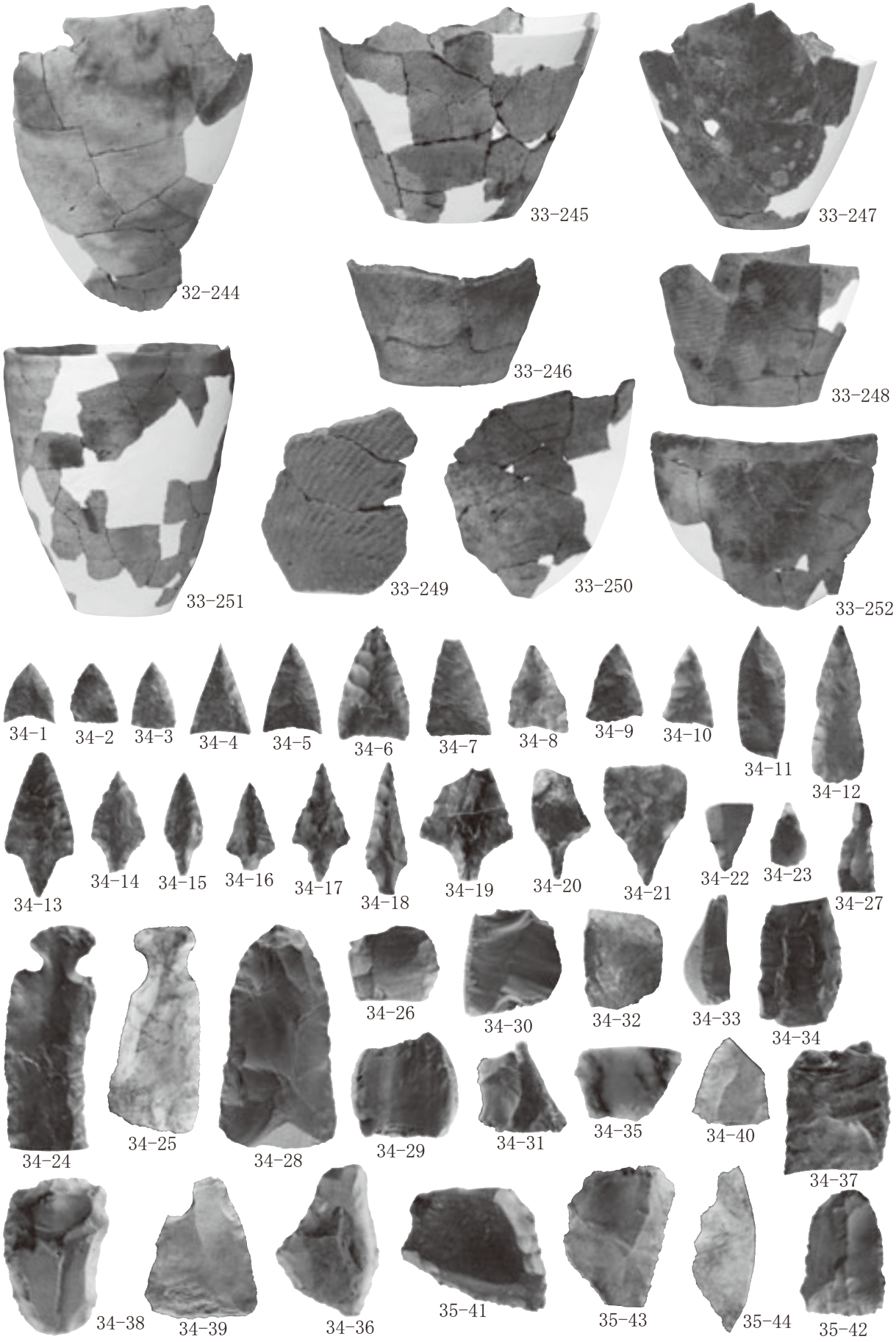


写真23　横沢山（１）遺跡遺構外出土遺物（８）

写真24　横沢山（１）遺跡遺構外出土遺物（９）

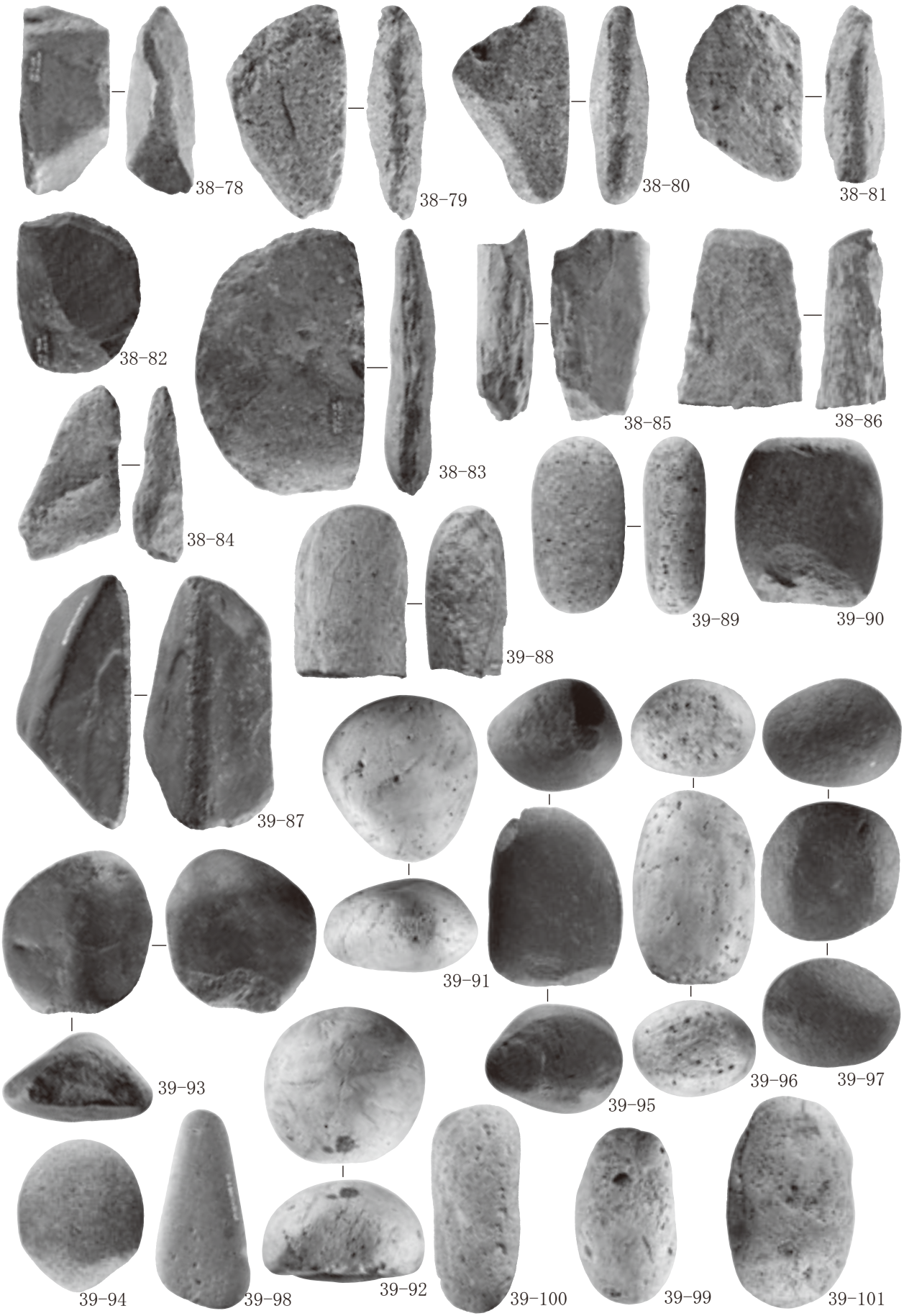


写真25　横沢山(１)遺跡遺構外出土遺物(10)

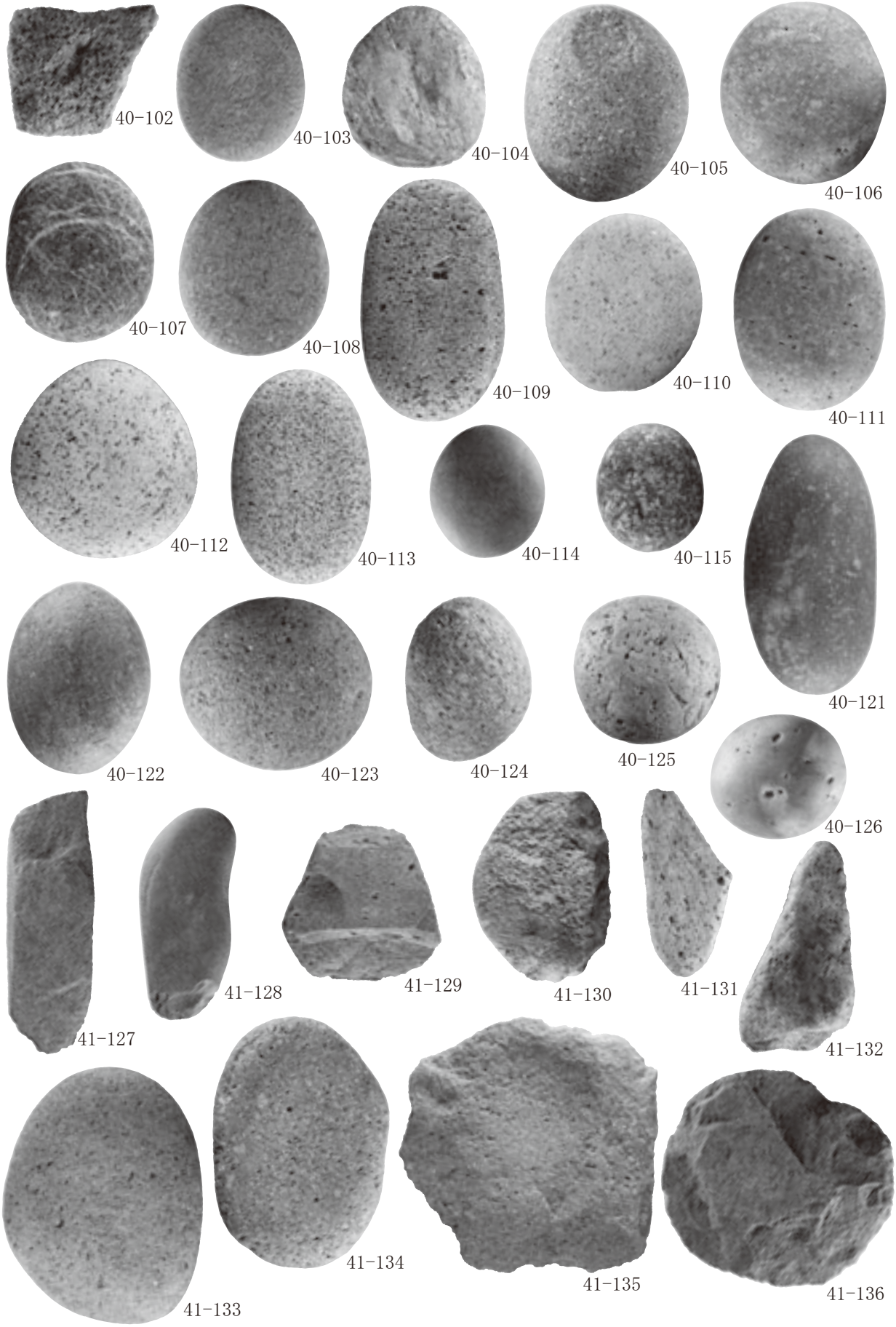


写真26　横沢山（1）遺跡遺構外出土遺物(11)

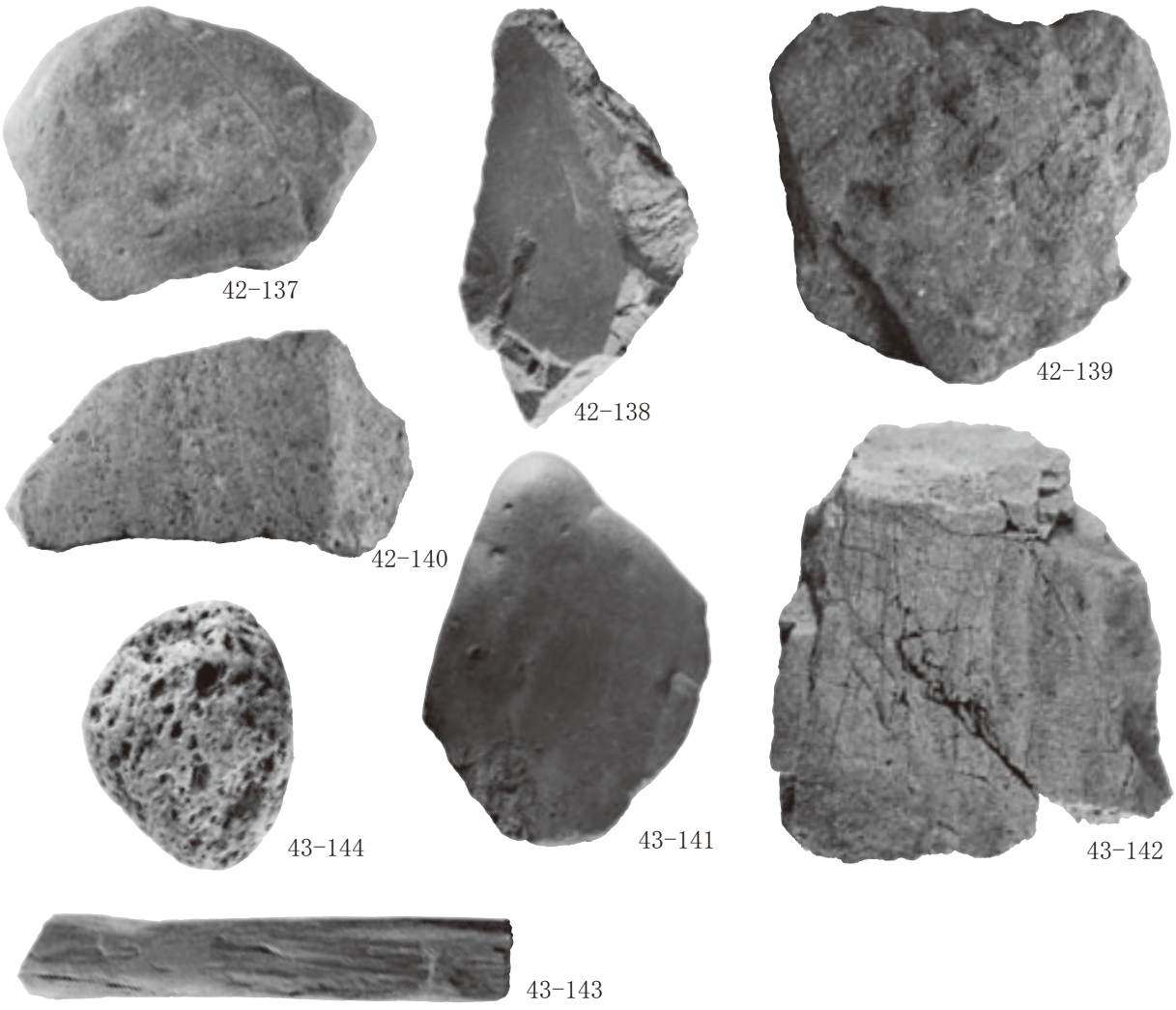


写真27　横沢山(１)遺跡遺構外出土遺物(12)

報 告 書 抄 録

ふりがな	あらやしきくぼかっこにいせき・よこさわやまかっこいちいせき・よこさわやまかっこにいせき
書名	荒屋敷久保（２）遺跡・横沢山（１）遺跡・横沢山（２）遺跡
副書名	国道45号八戸南道路建設事業に伴う遺跡発掘調査報告
巻次	
シリーズ名	青森県埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第４６５集
編著者名	小田川　哲彦　　平山　明寿
編集機関	青森県埋蔵文化財調査センター
所在地	〒038－0042　青森市新城字天田内152－15　TEL017－788－5701
発行機関	青森県教育委員会
発行年月日	西暦2009年３月６日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	日本測地系（Tokyo Datum） 世界測地系（JGD2000） 北緯	日本測地系（Tokyo Datum） 世界測地系（JGD2000） 東経	調査期間	調査面積	調査原因
あらやしきくぼ 荒屋敷久保（２） いせき 遺跡	あおもりけんはちのへし 青森県八戸市 おおあざかなはまあざど 大字金浜字土 はし 橋19－6外	02203	03283	40° 27′ 44″	141° 36′ 38″	20070424 ～ 20071030	12,000㎡	国道45号八戸南道路建設事業に伴う事前調査
				40° 27′ 54″	141° 36′ 25″			
よこさわやま　いせき 横沢山（１）遺跡	あおもりけんさんのへぐんはし 青森県三戸郡階 かみちょうおおあざどうぶつあざ 上町大字道仏字 よこさわやま 横沢山1－176外	02446	63076	40° 27′ 44″	141° 37′ 06″		6,800㎡	
				40° 27′ 54″	141° 36′ 53″			
よこさわやま　いせき 横沢山（２）遺跡	あおもりけんさんのへぐんはし 青森県三戸郡階 かみちょうおおあざどうぶつあざ 上町大字道仏字 よこさわやま 横沢山3－6外	02446	63079	40° 27′ 36″	141° 37′ 30″		2,258㎡	
				40° 27′ 46″	141° 37′ 17″			

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
荒屋敷久保（２）遺跡	狩猟場	縄文時代	土坑　３基 溝状土坑　８基	縄文土器	落とし穴と思われる筒型の土坑
	散布地	古代 時期不明	土坑　４基 溝跡　１条		
横沢山（１）遺跡	狩猟場 散布地	縄文時代	土坑　６基 溝状土坑　22基 野外炉　１基	縄文土器・石器	日計式土器 長七谷地Ⅲ群土器 大木３式土器
	散布地 生産遺構	弥生時代 時期不明	集石遺構　６基 焼土跡　５基 炭窯　５基	弥生土器	
横沢山（２）遺跡	狩猟場 散布地	縄文時代	土坑　１基 溝状土坑　１基	石器	

要約

荒屋敷久保（２）遺跡　平成19年度に新規登録された遺跡である。土坑・溝状土坑・溝跡が検出された。縄文時代の土坑は、落とし穴と思われる筒型のものである。それ以外の土坑は、出土した炭化材の年代から８世紀後葉～９世紀後半に廃棄された可能性がある。溝跡は調査区を横断するもので、比較的新しい時期の地境と推定される。

横沢山（１）遺跡　遺跡は小川（松森川支流）に面した西～北向きの斜面とその上部の平坦面で、調査区は遺跡の北西端にあたる。調査区東側は遺構・遺物とも希薄であるが、中央では溝状土坑が密に検出され、西端では斜面に遺物包含層が形成されている。縄文時代早期から晩期、弥生時代までの遺物が出土しており、断続的ではあるが永きにわたり小川を利用していたものと思われる。特筆されるものでは、縄文時代早期の日計式併行土器（魚骨回転文土器）が調査区中央の平坦面から出土しているほか、西斜面包含層から大木３式土器が出土している。検出遺構は主に縄文時代の土坑・溝状土坑であることから、水場（小川）の利用のほか狩猟場としても使われている。

横沢山（２）遺跡　平成19年度に新規登録された。検出された遺構は、縄文時代の土坑と溝状土坑が各１基である。密度は低いが、縄文時代に狩猟場として利用されていたと考えられる。

青森県埋蔵文化財調査報告書　第465集

荒屋敷久保（２）遺跡
横　沢　山（１）遺跡
横　沢　山（２）遺跡

－国道45号八戸南道路建設事業に伴う遺跡発掘調査報告書－

発行年月日　2009年３月６日

発　　行　青森県教育委員会

編　　集　青森県埋蔵文化財調査センター

〒030－0042 青森市新城字天田内152－15

TEL 017－788－5701　FAX 017－788－5702

印 刷 所　長尾印刷株式会社

〒030－0931 青森市平新田字森越17－１

TEL 017－726－7121　FAX 017－726－9237

活彩あおもり